THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年　第拾壹號

第二百六十號

明治四十三年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

新刊

大隈伯社會觀

時事問題の解決書

大隈伯は現代我國唯一の世界的人物なり。その一言は以て全國の相場を上下すべく、その一句は汎く世界の政局に反響す。本書は伯の社會觀なり政治外交財政經濟より、教育制度、人物月旦、青年修養談等社會百般のこと一として伯の話題に上らざるなく、話題に上るもの一として伯が三寸の舌頭に說破せられざるものなし

菊判凡五百頁 上製
正價壹圓三十錢
送料十二錢

故伊藤公一週忌紀念出版

福本日南君校訂 小野鐘山君譯

和譯宋名臣言行錄

本書は朱子學の祖述者として有名なる宋の大儒朱熹の著にして維新當時近思錄と共に愛國の志士の愛讀せしもの故伊藤公の如きも常に座右を離さゞりき。這回鐘山君之を和譯して一般人士に推薦せらる。今や燈下親しむべき季、清夜之を繙て名臣の面影を偲べ

菊判上製美本
正價金壹圓
送料拾錢

東京本郷森川町 文成社 振替一九四六七番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る御旨附記を乞ふ

特價販賣

野村泰亨先生著
中澤文三郎先生
阿部漸先生
補助

新佛和辭典

（最新刊）

新形美製箱入

全壹册

正價
金貳圓

語數六萬言餘

特賣冊數
僅少なれば
何時特價
を停止するや
も知れざれば
速に購入せよ

内容見本進呈

■特價 五千部限り 金壹圓六拾錢
郵税金八錢

文化の向上が言語の複雜を來すは之れ自然の數也極度に發達したるこの佛蘭西語の如きは語形の轉化語義の錯雜及び文化の産物たる術語新語の増加により初學者の困難すること甚だ多く加ふるに彼我語源語勢の異なるありて簡單なる語彙を編むだに多くの障碍を有す然るに學界の情勢日に新にして昨は今の用たるに足らず玆に於てか佛語界の泰斗として既に數種の大著ある野村泰亨先生が五箇年の時日と滿腔の熱血を絞り玆に本辭典を發行するに至れり本書の特色の二三を掲ぐれば▲新譯字の多數なる▲熟語の頗る多き事▲語數の豊富なる既出版辭書中に比類なし▲譯字の附し難き難字には其意義を釋明し▲譯語のみにて解し難きものには一々懇切なる說明圖を附す▲例文を掲ぐ等直に活用する事を得る最新の良辭書なり

松井知時
上田駿一郎
共著

◎新和佛辭典

新佛和辭典特賣中に限り
●特價壹圓七拾錢
郵税金八錢

進呈 改正圖書總目錄

東京日本橋角
電話本局四一一四番
振替口座東京二三八番

大倉書店發行

信用なき店鋪及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

東京帝國大學法科大學助教授
法學士　上杉愼吉先生著

婦人問題

婦人問題とは何ぞ

男子獨り人にして婦人は人に非ざるか、婦人は必らず結婚せざる可からざるか、婦人は獨立の人たることを得ざるか、婦人は教育を享けて天賦の知能を發展する權能なきか、婦人は男子の附屬物使用物に止まるか、男子獨り國民にして婦人は國民に非ざるか、

是れ婦人問題なり

之に答へて婦人の覺醒、自由解放、獨立を主張するは、今正に歐米に熾盛なる婦人運動なり、著者西遊數年、熱火の如き婦人運動を目擊し、又幾多の著書論文を讀みて、同胞婦人の爲めに世道人心の爲めに憂ふる所あり、乃ち本書を公にして以て穩健なる婦人問題解決の指針たらしめんとす、獨り婦人諸子のみならず、時世を憂ふる士の一讀を勸告す

近世社會問題解決の急先鋒

既刊　（全一册）

總クロース裝釘優美

定價金壹圓
內地送料金八錢

東京　神田仲猿樂町
巖松堂書店
電本二二五四　振替六五五六

（大好評初版賣切れ再版出來）

現代の偉人
大隈伯序
福田琴月君著

世界偉人傳

上製金文字入美本
正價壹圓廿錢
郵稅拾貳錢

▲古今東西偉人の傳記或は言行を錄して二十三章を集め、其興味と事實と世人を感奮せしむるものを擇び、文章を以て精彩を添へたる處、彼の乾燥なる傳記類に似ず、國民自奮の資材として屈竟なるもの也。（國民新聞評）

▲世界の偉人二十三人を選び、各人の傳記中最も波瀾あり、精彩ある部分を取て特に面白く書きこなしたり、正確なる史書といふよりも寧ろ趣味の讀本なり。（都新聞評）

▲文章は平易にして記述は巧妙、然かも血あり涙ある描寫琴月君の筆にあらざれば能はざる所なり、青年の絕好讀本。（東京日々評）

發行所　東京京橋南紺屋町　實業之日本社　振替貯金參貳六番　賣捌全國書店

讀者文藝懸賞——愈々本號より發表！

本欄

諸名家苦心の名篇傑作を掲げて趣味津々たり

學生文藝

讀者文藝

滿天下青年文士の玉咏佳什を掲げて百花闘妍の美あり

十一月一日發行
毎月一回發行

第一卷第三號

定價一冊
金十五錢
郵税壹錢五厘
六冊郵税共
▲九十錢

▲動物の保護體色……飯島理學博士
▲遺傳と性質の變化……外山農學博士
▲臺所より見たる文士の正體……文學士 佐々醒雪
▲學生近視の話……小川醫學博士

▲時代と學問……文學士 笹川臨風
▲英文學講話……文學士 栗原古城
▲意慾と理性……文學士 小笠原秋水
▲上﨟（小說）……馬場孤蝶
▲寄生木（小說）……小金井君子
▲我文藝趣味の發達……高安月郊
▲文士の墓巡り……一記者
▲歌壇の新傾向……前田夕暮

▲予が作蛇苺と當時の境遇……小杉天外
▲都下中學評判記……葉山繁樹
▲十月の評論と創作……白雲子
▲口繪優美・挿繪鮮麗
▲心機（小品文）……安藤白水
▲女三人（小品文）……宮崎一雨

東京市本郷區龍岡町
振替東京三〇五八番
聚精堂
賣捌所全國各地
到る所の書林雑誌店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

追補增冊再豫約募集

▲内容見本▲ 申込次第送呈

從前の加盟者には九月の配付本に追加見本を添へあり必讀必讀

先哲遺著 漢籍國字解全書

菊判 廿五冊
紙數 壹萬四千五百頁
總洋布製美本

本全書目錄

孝經（熊澤蕃山）
大學 中庸 論語（中村惕齋）
孟子（中村惕齋）
易經（眞勢中州 松井羅州）
詩經（中村惕齋）
書經（大田錦城）
小學（中村惕齋）
近思錄（中村惕齋）

老子（山本洞雲）
莊子（毛利貞齋）
列子（太田玄九）
孫子（荻生徂徠）
唐詩選（服部南郭）
古文眞寶前集（榊原篁洲）
古文眞寶後集（林羅山 鵜飼石齋）
春秋左氏傳（加藤正庵）

傳習錄（三輪執齋）
楚辭（淺見絅齋）
管子（菊池晩香）
墨子（牧野藻洲）
荀子（桂湖村）
韓非子（松平康國）

▲附錄書目は茲に掲げず▼

漢籍の現下に切要なるは絮說を要せず嚮に本全書を豫約するや非常の喝采を博し出版界異數の盛況を呈せり江湖の渴望以てトすべし然るに讀者は之を以て足れりとせず其選に漏れたる必須の典籍を追補せん事を熱望して已まざるを以て其希望に基き春秋以下の七部を追補して一大完璧と爲し之を續刊せんとするに方り單に之を從前の加盟者のみに頒ち一切の新注文を謝絕する事の學問に忠なる所以に非ざるを思ひ漢文學普及の爲に萬難を排し茲に全貳拾五冊の再豫約を圖らんとす嚮の豫約に漏れたる者は復此好機を逸する勿れ

豫約規定

甲種 即納 金貳拾六圓
乙種 五圓六十錢宛五回拂込 金貳拾八圓
丙種 貳圓宛十五回拂込 金參拾圓

▲申込十一月十日限り▼

郵送費（平均） 東京市内（四錢宛十五回）金六十錢 内地（十五錢宛十五回）金貳圓廿五錢 滿韓樺臺（卅五錢宛十五回）金五圓廿五錢

送本期 本年十一月より毎月二冊又は一冊宛を發行し十五ヶ月に全部完成す

豫約元 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部

豫約取次 各書肆

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

空前の世界大歷史

陸軍大學教授兼學習院教授 文學博士 瀨川秀雄先生新著

西洋全史

上下附圖索引共全二冊二千六百餘頁正價金拾貳圓

繪畫 三色版二色版コロタイプ光澤寫眞版 計五十枚　寫眞版挿畫精巧木版約 六百

最も貴重なる人類經驗の總記錄として、最も目覺しき優勝劣敗の全實例として、世界史は實に活ける聖典也、立志篇也。或は邦家興亡の由來を語りて國民の自覺心を鞏固にし、或は英雄功業の偉績を敎へて個人の向上心を激勵す。特に最近我國運の大發展と共に吾人同胞が將來の活動は益々世界的となり、內外の競爭驅逐亦愈々熾盛ならんとす。此時に際し吾人に最も急要緊切なるものは實に世界歷史の知識にして、眼前の備國政變を始め、日々の新聞紙に報導せらるゝ政事、經濟、科學、文藝其他凡百の事件の如き、世界史を基礎とせざれば其眞想を解する能はず。何れの點より見るも世界史の修養は我が中流以上の人士に現下最も重要なる資格也。瀨川博士が半生の心血を濺がれたる本書の此時に出てたるは、

最も時勢の要求に叶ひ、社會學界多年の渇望を醫するものといふべし。博士は夙に本書の第一次稿を終へて歐米諸國を歷遊し爾來幾度か稿を更め、拮据六年にして始て成る。全篇學術的、系統的方法を骨子とし、實際的、文學的方法を血肉としたれば專門學者と一般人士とを問はず、上下五千載世界文明の由來は勿論、無論無限に趣味ある人間功過の總物語を了解せしめて委曲詳參、加ふるに

精巧華麗なる圖畫六百五十個を以てし、各國各時代の風俗、生活、建築、調度は勿論、英雄豪傑、學者聖僧、名士佳人の風采を眼中に活躍せしむ。且つ別冊には最も詳明なる沿革地圖を網羅し、本文地圖各索引を附し、縱横活用に便す。何れの點に於ても寔に完全なる世界大歷史にして近代學界の偉觀といふを憚らざる也。

弊社は今や時勢の急要に鑑み、特に

犧牲的廉價を以て本書の普及を圖らんとす。挿畫に裝釘に印刷上の理想を盡したる極美堅牢の製本全三冊僅に九圓にして、而も分賣の特別法を設く。たゞ期間短く注文一時に蝟集すること必然なれば一刻も早く申込あらんことを切望す。

短期特賣

製本既成十一月五日より着金順送本 **特價金九圓** 上卷參圓六拾錢 下卷參圓九拾錢 附圖索引壹圓五十錢

見本進呈

往復葉書（▲各冊分）申込の事（▲實費▲送料）市內八錢 市外四十四錢 臺樺九十錢 朝淸一圓〇五錢

▲詳細見本

發行所 東京神田 富山房 電話本局一〇三六番 振替一〇五〇一番

丁酉倫理會
倫理講演集

拾月拾日發行 第九拾八號　定價一冊金拾貳錢郵稅一錢 六冊前金郵稅共金七拾貳錢

講演

倫理學說と實驗倫理學……文學博士 桑木嚴翼
ノルマン・ワイルド教授の『宗教は奢侈品か義務か』現代の傾向を評す……高島平三郎

泰西思潮

▲獨佛英米に於ける『倫理學最近の傾向』▲伊太利人の日本教育觀 ▲兒童省の新設案 ▲『ルーズヴエルトの田園生活』の一節

雜錄

◎本會記事◎韓國併合に就いて◎同口異音◎病狀回顧◎故ヰリアムジエムス先生を悼む

新刊

應問

發行所 東京京橋區銀座壹丁目 株式會社大日本圖書 振替口座東京二一九番

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

貴族院議員
前文部次官 澤柳政太郎先生著

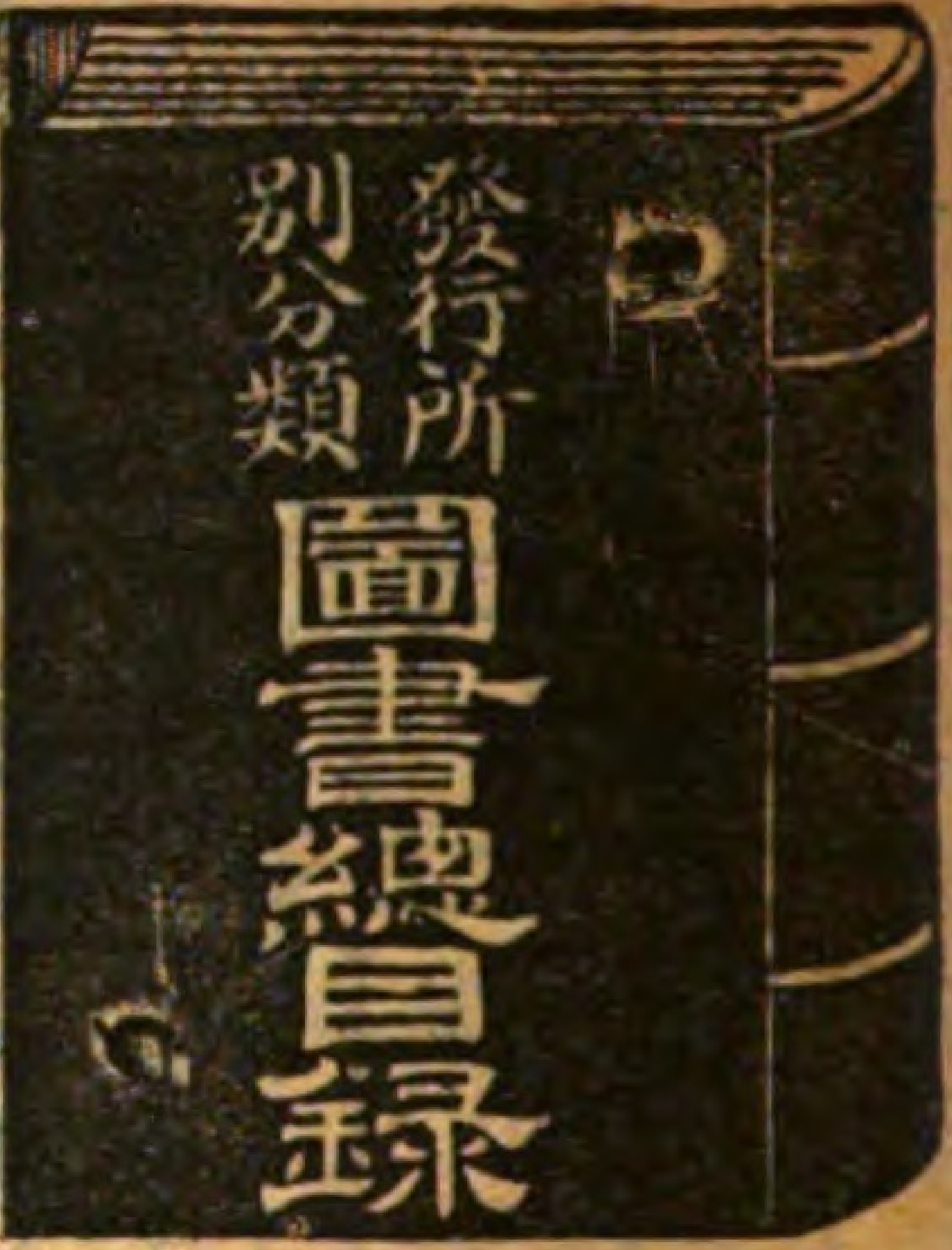
孝道

洋製美本全二冊紙數一千七百餘頁

正價金五圓 特價金四圓 郵税内地廿四錢 臺樺四十五錢 朝清六十錢

忠と孝とは我國民道德の大本にして我が國體をして、世界無比ならしむるもの洵に此に存す。見よ日清日露の兩戰役に於て、如何に我が國民は忠良愛國の精神を發揮せしかを。歐米諸國が爭つて新日本の研究を始めたるは實に之が爲也。然るに孝道に至りては維新以來個人思想の勃興に伴ひ、漸時頽廢の傾あり。若し此の如き勢を以て進まんか、我家族制は忽ち其存在を危うせられ、延いては道德の大本に動搖を來し、累を我國體に及ぼす無きを保せず。憂國の士豈坐視すべき時ならんや。澤柳先生深く此に慨し、高邁の識見を以て孝道に關する斬新の說を立てられ、玆に本書成る。其所說儒家の教は固より、佛教神道並に西洋倫理をも參し、又孝道に關する詩歌格言は悉く之を網羅し、加之孝子の美談に至りては、古今に涉り、本邦、支那、印度より、西洋諸國の事蹟に至る迄博く數千百種の書籍を涉獵して毫も遺漏なきを期せらる。從來新時代に於ける孝道の準據を示すべき典籍一冊だに出でざりしは實に舉代文教の一大恨事なりしが、本書一度出でゝそれ等の缺陷は遺憾なく補はれたりといふべし。古は「孝經」一冊を必らず家々に藏せしめられしといふ。本書は即ち全國學校は勿論、苟も父母あり子弟ある家庭には、一刻も早く必ず備へざるべからざる貴重有益の一大典籍也。依て弊社は此際部數を限り破格の廉價を以て特賣を行ひ本書の普及に努力せんとす請ふ此機を逸せず。速かに申込あらんことを。

發行所 東京神田 富山房 （電本一〇三六 振替五〇一番）



讀書界唯一の燈臺なり 圖書選擇は讀書家の最大要件なり
苟くも讀書家たらん者は必ず一本を机上に備へざるべからず

振替口座東京貳〇貳九五番
東京日本橋區本石町二丁目
圖書雜誌大取次所 **大光堂書店**

弊店は豫て發行所別分類圖書總目錄編纂係りが今回ようやく苦心の結果完成せり右書都下數百各書店發行せる圖書落ちなく掲載せる大冊なり今回壹萬部限り御注文次第速時發送す送料共參拾四錢

反省社編輯

●空文年表

一名かき入年表

定價金五拾錢 郵税金八錢

東京本郷駒込西片町
反省社
振替東京三十四番

東京高等商業學校教授 花輪虎太郎先生著

英語擬試驗問題及解釋

一冊 定價五拾錢 郵税金四錢

各地の中學校を卒業し進んで各種高等の學校に入學せんとするも、都會に出でて親しく其準備をなし能はざる青年諸子に同情して、先生が高等商業學校教授の傍ら、東京專修學校、明治大學等の高等豫科の英語教壇に立て、親しく教授せらるゝ教材につき、和文英譯、英文和譯、文法、書取の四科目の内、日本學生の最も誤り易きもの、又は學習に難澁なるものに重きを置き、其程度を斟酌して、假りに試驗問題に擬し、別に詳密丁寧なる解釋を附せられたるものにして、問題の數實に七百以上に及べり
されば、一般英語を學習するものにありても、之れを繙讀練習するときは深き興味の内に、英語の知識を得ること尠少ならざるべし

發行所 東京本郷區駒込西片町十番地 **反省社出版部**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士

坪内逍遙譯

新刊‖沙翁傑作集‖第貳

ロミオとジュリエット

洋裝天金高雅
美本全一冊
寫眞版木版密畫數十箇入
正價金壹圓三十五錢
郵稅金八錢

凡そ沙翁の名作にして讀者を失望せしむるは一もあらずと雖も其**長く且つ廣く天下に歡迎**せらるゝ點に於て直に「ハムレット」に次ぐものは是なり、此劇は翁が作三十七篇中**唯一の戀愛悲劇**にして、熱烈なる青年男女の戀愛を以て終始し、且つ思ひ切つたる**滑稽詼謔**をも交ふれども讀了りて些も野卑猥雜の感を覺ゆることなきは**眞に大詩人の作也**譯筆亦「ハムレット」に比して一層の洗錬を加へ、散文ながらに**朗潤諧暢**時に韻語を誦するが如く髣髴として**原作の風趣**を傳へたり、殊に全篇に漲れる戯謔語、地口、語呂をさへも成るべく原意のまゝに國語に移して**一讀解頤**の實あらしめんと力めたるは本譯文の特色なり。

六版

沙翁傑作集 壹

ハムレット

密畫數十箇入
全壹冊
製本ロミオ同型
正價壹圓卅五錢
郵稅八錢

東京牛込早稻田
早稻田大學出版部
振替東京一二三

發兌

東京神田裏神保町
合資會社冨山房
振替東京五〇一

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論

次號小說豫告

（依賴したる十女史）

次號の小說欄には女流作家の作品を網羅す

森しげ女　小金井喜美子

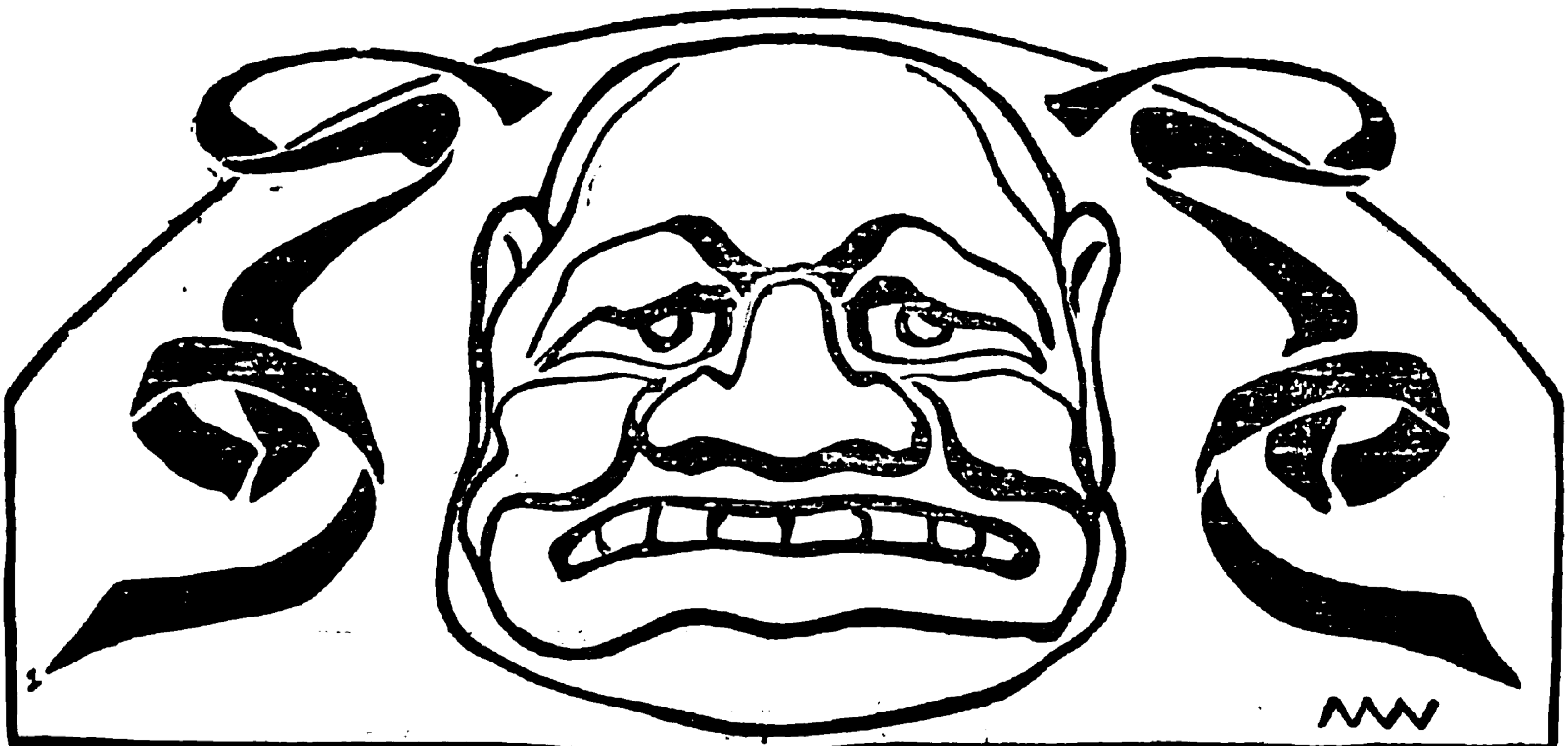
岡田八千代　國木田治子

野上八重子　長谷川時雨

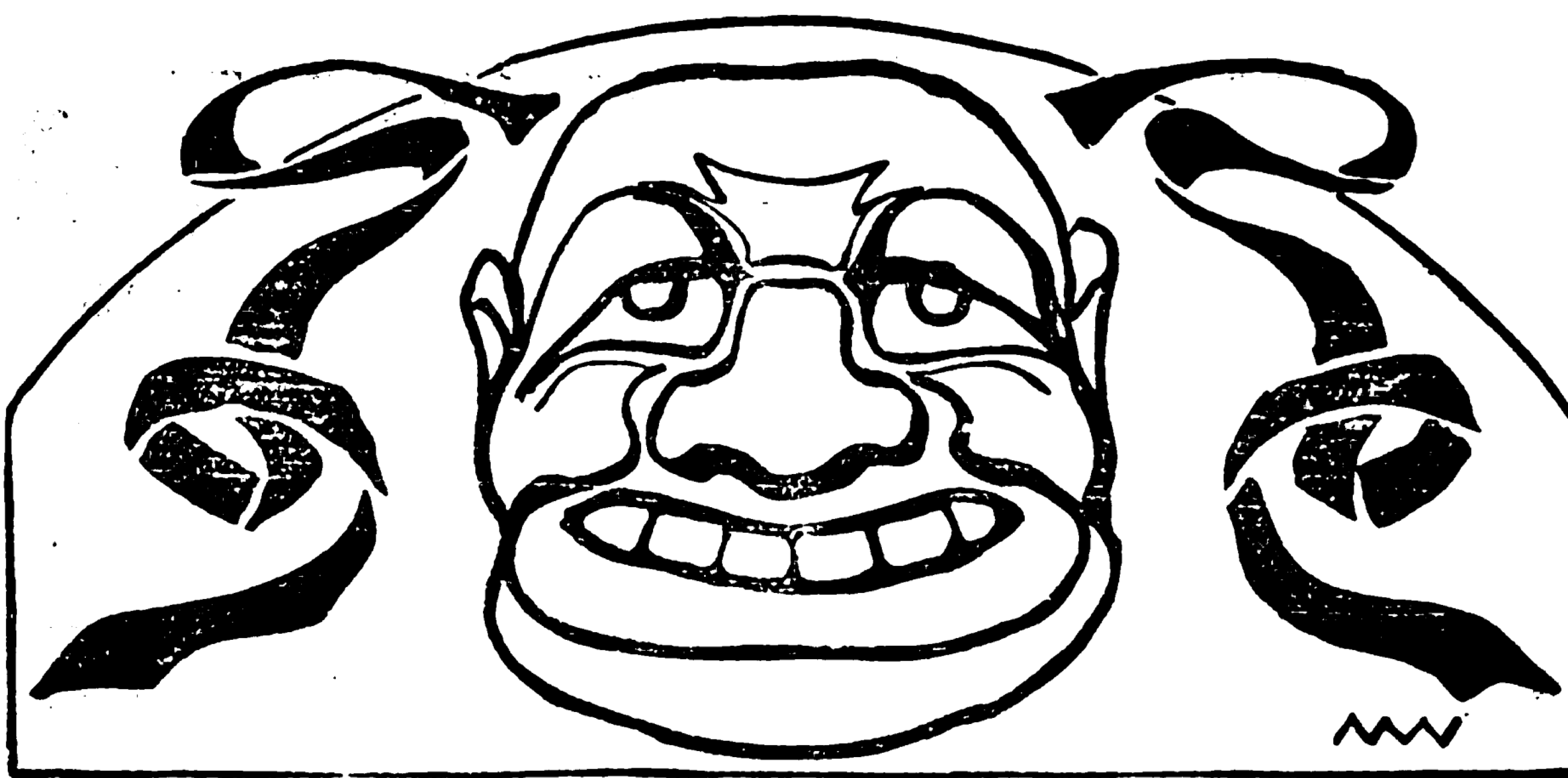
水野仙子　永代美知代

小栗籌子　尾島菊子

次號の小說欄は百花咲き亂るゝの美觀を呈す



中央公論第廿五年第十一月號目次





中央公論



第二十五年
第十壹號
第二百六十號

首都之警察改良論

（一）

忌はしき殺人、强盜、强姦の事頻々として絶えず、而して犯人の逮捕せらるゝもの割合に少きが爲め、今や首都に於ける警察批難の聲、囂々然として幾んど人耳を聾せんとす

吾人の觀る所によれば、是れ區々たる警視統監の責任のみにあらず、實に内務大臣の責任問題也、然る所以は他なし、内務省の所管に屬する首都の警察組織實に不完全なれば也、强盜、殺人、强姦の如き兇人惡徒の横行するは、畢竟此の不完全なる缺陷より生ずる結果なれば也

（二）

近時强盜並びに殺人の事多きは頗ぶる著るしき社會現象なりとす、其の原由を論ずるもの多くは曰く「新刑法は盜罪を罰すると實に重し、故に犯者に在ては、所謂一國を取るも誅せられ、天下を取るも誅せらる、誅は一のみ、寧ろ天下を取るの快なるに如かずの慨なくんばあらず、即ち大袈裟に强盜となりて以て多くの金品を奪取するを智とするのみ」と、吾人は必らずしも之を否定せざるも、また全く之のみを原由と做すと能はず

吾人の見を以てすれば、我が警察は、區々の小盜細賊を目して尋常細事犯と做し、其の檢擧逮捕に努力せず、寧ろ多くの力を他の方面に割きて。小盜細賊を放任する傾向なきにあらず、隨つて婦女に對して醜行を試みんとするもの丶如きは、一片の訓諭若くは輕き科料拘置にて終局せしむるもあり、或は被害の婦女に多少地位あり名譽あるがため、之を屆出でざるを幸ひ、犯行を耳にするも銳意して之を檢擧せざるが如き傾向も見ゆ、是れ實に强盜、强姦、殺人等の兇賊險人を生ずる主たる原由ならずや、凡そ先天的に兇惡殘忍を極むるもの丶外は、始めより殺人、强盜を敢てすると稀也、素より絕無とはいはざるも、實は甚だ少數のみ、多くは始め細物を偸むも捕へられず、再びし三びするも尙ほ免かる丶に至て、盜たるを恥づるの良心漸くに痲痺し、習ひ性となりて竟に强盜となり、又殺人の凶行をも敢てするに至るのみ、婦女を姦し、甚だしきは其の犯跡を晦ますため、殺人を敢てする者亦同じ、犯者も亦人也、素より强姦の罪たるを知らざるに非ず、唯だ一び之を試むるも檢擧を免かれ、再びし三びし、竟に强姦を遂ぐるも亦逮捕せられず、茲に於てか之を視ると尋常茶飯事の如く、唯だ情慾を充すの快きを知つて

罪惡の重きを忘るゝに至るのみ、若し警察にして始めより嚴密に之を檢擧し逮捕せば、彼等また畏れて容易に再びせざらん、唯だ尋常徼細の犯罪として之を放棄し、例令放棄せざるも、力を擧げて捜査を嚴密にせざるがために、小盜細賊竟に大兇賊となり、小色魔竟に怖るべき大色魔と爲るのみ

故に吾人は今の警察方針を一變し、微罪と雖も忽せにせず、寧ろ極力之を檢擧して、寸毫も寛假せざらんことを主張せんとす、一び法律の處分に逢へるがため、前科者とし、親戚知人の指彈を受け、竟に自暴自棄して兇惡を敢てする者素より之あり、然かも微罪の檢擧されざるが爲めに、馴れて而して竟に兇徒惡人となる者、更により多きと論莫からん、彼の強盜、強姦、殺人の兇行者が幾んど總て數犯の前科者なるは其の明證ならずや

其の始めに嚴しく之を懲さず、增長して竟に兇人惡徒たらしむ、是れ民を驅て惡に趣かしむるもの、經世上よりいへば不仁の極也、內務大臣たるもの思はざるべからざる也

（三）

第二に非難すべきは、警視廳が政事上の問題に重きを措くに過ぎて、常事犯の取締に重きを置かざることを也、前內閣の時原氏內務大臣として始めて警視廳を自個の管下に移したりしも、其の以前は內閣總理大臣の直屬となり、歷代の警視總監日々必らず總理大臣に伺候するを例としたりき、吾人は素より警視廳が政治の事項を管するを難ぜず、隨つて警視總監をして恰かも政務官の如く時の內閣と進退を同くせしむるを難ぜず、唯だ主力を此の方面にのみ注がずして、更に大に常事犯の方面にも用ゐしめんことを欲

す、其の割合少くも三（政治方面）と七（常事犯方面）の如くならんことを主張す

警察權は國家の重要なる權力の一也、其の衞生、風俗の方面を始め、多くの常事犯を未發に防止するは實に警察の作用に俟つこと多ければ也、所謂政治事項として、現在の秩序を傷害せんとする諸運動（例せば無政府黨社會主義者の如き）及び國事犯的運動を監視し、且つ政黨政事家の行動より目を離さゞること、また警察として缺く可らず、即ち警察を以て國家の掌中に措くべきこと勿論にして、之を府縣若くは都市等の自治團體に委任す可らず

然れども其の府縣又は都市の治安を維持するため、警察は嚴重に常事犯者をも檢擧し逮捕して、其の兇行惡業を防止し以て人民を安堵せしめざる可らず、殊に東京市の如き日本の帝都として、多くの場合に一國を代表し、且つ代表視せらるゝ所に在ては、其の治安と秩序とを支持するに、特別の手段を執らざるべからず、其の衞生、風俗は勿論、殺傷强竊盜强姦等を檢擧し取締るに、最も嚴密なる方法を取りて以て首都たるの名實を支持せざる可らず、東京市に限りて殊に警視廳なる一官衙を設くる則ち此のためならずや、之を以て特別に政治方面に活動するが故のみと爲す可らざる也

然るに今の警視廳は、社會主義者又は非政府黨派に注ぐに嚴密なる監視の眼を以てするに拘らず、却つて常事犯に緩怠なるが如きは何ぞや、吾人は之を以て我が警察方針の最も謬まれるものと做し、敢て其の責任者たる内務大臣の省思を促さゞるを得ざる也

東京市に於ける警察官の員數の不足なるとは、殊に注意を要すべし、東京市の市勢調査によれば、市の人口は約百三十餘萬にして、而して警視廳の調査には百六十餘萬とあり、市勢調査の際には、人頭稅賦課等の妄說流布せられて、市民の頑迷なるもの其の家族數を隱蔽したるもあり、故に市住人の實數未だ得て知るべからざるも、略々百五十萬內外と見て大差なかるべく、之に品川、新宿、板橋、千住、龜戶等市に聯續せる地方の人口を併算せば、少くも百六十萬人を下らざると明か也、然るに警視廳の有する巡査數は約三千人にして、市民五百三十人に付巡査一人の割合也、府會の既に協贊したる增員を實行して四千人と爲すも、市民四百人に付一人の割合に過ぎずとす

我が同盟國の首都たる倫敦は、全市の人口四百五十萬と稱せられ、而して巡査の數實に一萬八千人とす、即ち市民二百五十人に付巡査一人宛の割合なり、若し東京市をして倫敦と同一率たらしめんとせば、巡査の員數を增加して六千四百人と爲さゞる可らず、然るに現定員は四千人にして、實數は三千人に過ぎず

市の區域廣く、戶口多く事繁くして而して巡査の定員足らず、勢ひ巡査を使用すると過度ならざるを得ず、其の結果は反つて不健康者を生じて、實數彌よ少く、使用益々過度ならざるを得ざるべし、去れば犯罪を豫防するに周密なるを得ず、犯罪者を檢擧し逮捕するに嚴密なるを得ざる、素より其の所なるのみ、何ぞ況んや東京市には洪水の如き慘禍もありて、巡査を勞すると遙かに倫敦以上なるをや、又況んや警視廳の殊に政治方面に重きを措くがため、力を割くと頗ぶる多きをや

是れ實に最も睹易き理なりとす、然るに責任ある内務大臣が巡査の増員を敢行せず、徒らに口を財政難に藉りて現狀に甘んじ、竟に强盗、殺人、强姦等の兇罪を頻發し、市民をして殆んど枕を高くして眠るを得ざらしめ、著るしく我が首都の名譽と信用とを毀損したるは緩怠の極なり、無責任なりと號呼するも、到底辯解の辭なからんとす

地方をして警察費の一半、寧ろ大部分を負擔せしむるは、原則として非理也、警察は猶ほ軍隊の如し政府は宜しく其の費用の全部を國庫支辨とし、而して其の定員の配置を豐かにして、以て完全に警察の機能を發揮せしむべき也

（五）

警察官の俸給を豐かにし、待遇を良くすると亦大に考慮を要す、現制の如くにては、有爲の士を得ると能はず、失職者の一時の腰掛け勤務たるに終るの外なからんとす

米國の巡査は、一人一ケ月の俸給四十弗（八十圓）を最低とし、多きは八十弗（百六十圓）より百弗（二百圓）、百二十弗（二百四十圓）に至る、且つ市街の乘合車（汽車も電車も）には、總て無賃にて乘車し、煙草店及び酒舖に於て、無代にて飲喫し得る慣習とす、而して其の威力頗ぶる大にして、途上誰何するも答へず、制止を聽かずして立止らざる者には、直ちに拳銃を發射して擊殺する特權をも有す、往來雜遝して肩々相摩し、車馬絡繹たる間に立て、巡査一び手を擧れば、總てのもの一齊に停止し、再び麾くを待て始めて進行を續く、彼の國市民が能く秩序を守るは論莫きも、巡査の威權の赫々たる亦想ふべきに

あらずや

英米兩國は、巡査の體格に制限を置くが故に、相貌堂々として丈け高く身肥えて、威風四邊を拂ふのみならず、ビスマルクの像に看るが如き冑を被り、長き紺色の絨服を着くる姿態亦甚だ威重あり、然かも英米兩國に於ては、巡査の職務の危險なるため、年々應募するもの少きを以て、兩國政府は其の手當待遇を善くするに苦心を費やしつゝありといふ

我が國の巡査は、其の俸給一ヶ月十二圓より多きも三拾圓を超ゆるものあらず、妻子をして種々の內職を爲さしむるにあらざれば、其の生活を爲す能はざるのみならず、別に役德なるものもあるとなし、今や電車にすら無賃乘車を禁ぜらる、殊に多くの新聞紙は、筆を揃へて巡査を咒咀するの狀態にして、市民と巡査との間、感情甚だ妙ならず、巡査を畏るゝものは視ると虎の如きも、之を侮るものは鼠の如く猫の如し、蓋し民權論の熾んなりし頃、法律書生等動もすれば法律論を楯に、巡査を理窟攻めにするを以て快と爲すものありしがため、一部市民の間には、理由なく徒らに巡査を輕侮するもの多し、之がため巡査の威信殆んど地を掃ふて空し、夫れ人民に接して威信なく、而して俸給乏ふして僅かに口を糊するのみ、何人か敢て好んで巡査たるべけんや、然かも況んや其の職たる勞多くして而して甚だ危險なるをや、失職のため一時腰掛的に巡査たる者のみなる、洵に當然のみ

明治の初年士族の職を失ふや、進みて巡査(當時は邏卒といへりき)たるもの多かりき、官吏たるとは士族の名譽にして又本分の如く信ぜられたれば也、此の氣風明治二十三四年頃まで及びて、巡査其の人

には、人格の優良なるもの少からざりき、今や臺灣に於ても巡査の手當豊かにして、滿州にては最低の月俸四十圓、朝鮮にては時として八九十圓にも及ぶ、爲めに此の方面に向ふもの多く、內地殊に東京市に於て巡査たるものは、唯々薄俸と輕侮とを忍びて、一時腰掛的に勤務するに過ぎず、巡査の人格の漸次優良なるを得ざるも宜なりと謂べし

故に警察の改良を圖らんとせば、其の方針を改め、大に定員を增加するの外、尚ほ巡査の俸給を豊かにし、其の威信を高めて以て優良なるものを擧ぐるを要す、是れ豈一警視總監のみに委するを以て足れりとす可んや、內務省自ら其の計畫を立て、自治團體進みて之を贊し、而して新聞紙の如きも率先して之と筆調を同くし、所謂官民一致に由て以て其の奏效を期す可き也、若し然らずんば、我が警察機能は益々荒廢し弛怠して、竟に秩序治安を維持するを得ざるに至るなきを保せざる也

倫敦市街に於て一婦人の慘殺せられて、而して其の犯者の檢擧せられざるや、竟に內務大臣の責任問題を生じたりき、今の東京市に於て、強盜、殺人、強姦の頻發する、亦必らずしも區々警視總監のみを責む可らず、吾人は內務大臣の責任として、玆に大に警察機關の改良を計らんことを要望す、口を財政上の都合に藉りて之を斷行せざるが如きは姑息也、緩怠也、無責任也

政友會の安危

（一）

菊花妍を競ふて、世は將さに政治季節に入らんとす、此の時に當つて殊に注目せらるゝは言ふ迄もなく衆議院の嚮背にして、而して衆議院を左右するもの政友會に外ならざるに於て、同會の態度が萬目注視の焦點たる、素より怪む莫きのみ

今夏盛暑の候、西園寺侯が輕井澤に於て桂侯と會見したりし結果、政友會と政府とは、今期議會に於て又々妥協して、無事に來るべき冬を過さんと觀測するもの多し、蓋し中らずと雖もまた甚だ遠からざる可き乎

即ち西園寺侯は尚ほ善意の中立を部下の政友會に要望すべく、而して政友會も亦唯々として此の總裁の命令を遵奉すべし、其の間多少の小波瀾、細波紋の生ぜんと勿論なるも、大體の歸趨は惟ふに竟に斯の如くなるべき乎

（二）

衆議院に於て、聊かながらも絕對多數を占むる政友會が、民黨にもあらず、政府黨にもあらずして、一種曖昧なる態度に出づること、斷じて大政黨の面目にあらずといふを休めよ、彼れが今到底政府黨たると能はず、而して又政府の敵となつて之と戰ふことをも能くせざるは、今や全く戰ふべき機會に非ざ

れば也、假令戰ふも到底勝利を得る見込なく、假令勝利を得るも、自から政府を取て之を守持する方策なければ也

戰ふて敗るゝ結果は知るべきのみ、勝つも之を完ふすべき所以なきに當つて、敢て戰ふは徒らに戰ひを好む也、寧ろ武を黷すもの也、思慮ある主將としては斷じて之を爲すべからず

政友會にして、若し頑然として政府提出の重要なる議案を否決し、若くは豫算を不成立ならしめんとせば、總て意の如く行ふことを得べし、此の場合に於て議會解散か、然らずんば內閣の引退あるのみ、兎にも角にも、政友會の獨力を以て、現在の政局を打破すると極めて容易なりとす、則ち容易なりと雖も、其の結果の政友會に取て、祝すべき乎、弔すべき乎、抑も又窮達利弊は如何、如何に樂觀のみを逞くするも、政友會に取ては到底吉勝利たらざるを奈何ともする莫きのみ

（三）

試みに議會解散と假定せよ、政府が政友會を敵とするの態度彌よ明白となりて、其の辛辣なる長爪は必らずや主として政友會の頭上に及ばん

智慮ある桂侯は、政黨に對して一視同仁を標榜し、殊に政友會に對して不離不即の態度を現示するも、尙ほ陰に政友會を抑へて强梁ならしめざる爲めには、計圖百端を極めつゝあり、看よ、貴族院の方面を堅めて、容易に搖かす可らざる勢力を扶殖し、以て永く政友會に對抗するの地盤を堅むると共に、事ある每に寧ろ國民黨を揚げて政友會を抑へんとする形迹あるのみならず、政友會の汲々として地方に勢力

を植ゆるに對しても、亦陰に應抗の手を緩めざる也、平田男が水害地方を巡視するの途次、政府亦港灣及び治水に鋭意して、然かも其方針の國家の大局より打算せられ、區々地方の小利害に偏するとなきを聲明して、陰に政黨々派のために左右されざることを諷するや、政友會の某進言して曰く、斯く〱の工事は請ふ速かに之を斷行せよ、議會に於ては我が黨進んで贊するを以て、些の顧慮を要する莫しと、男乃ち應じて曰く、所謂議會とは何ぞや、貴下の黨與假令衆議院を左右するも、議會は一院に非ず、貴族院の同意を得ずんば則ち奈何ともする能はざるに非ずやと、某言沮み辭窮して去る、而して地方人の曾て政友會を恃めるもの、玆に至て頓に索然たるに至れりといふ、後藤男亦地方を巡歷して鐵道布設の情願を聽く毎に、緩急總て國家全體の利益より打算して、政府鋭意して其の前後を研究すと揚言し、示すに精細なる調査資料を以てし、以て暗に政友會が鐵道問題を提げて地方人士を籠絡するを指彈す、而して地方人士亦政府調査の精覈なるに伏し、徒らに政友會を恃むの愚を悟れりといふ、政黨を視るに隼の如き眼を以てし、一び搏てば必らず獲ざれば止まざる大浦男は、其足跡を印する處、必らず政友會をして震慴せしむ、此の三男が或は德を以て、或は智を以て、或は勇を以て、政府の威を示すと同時に政友會に與ふるに痛切なる打擊を以てすることは、少しく政界の情勢を解する者の齊しく認取する所たらん、政府は實に斯くして一旦事ある時、政友會の力を殺ぎ勢ひを削りて以て大に之れを抑へんとす、苟くも解散を視ん乎、此等の結果は覿面に政友會に現ずべし、是れ今日に於て政友會が政府を敵として最も不利なる所以にして、姑らく陰忍するの已むを得ざる所以ならずや

且つ注意すべきは、中央俱樂部が政黨組織に更ためんといふの一說是れ也、吾人素より其の實行せらるゝや否やを推斷するに苦むと雖も、若し果して政黨組織と爲らん乎、國民黨も其の影響を受くべく、而して政友會は最も戒心せざるべからず、政友會の近畿、四國、中國の一部分實に割取せらるゝの虞あればなり、西園寺侯にして幸ひに輕々しく桂侯と絕たずんば、中央黨(政黨として)敢て無遠慮に政友會の分割を試みざらんも、敵意の現然たるに至らば、危機は忽ち脚下より生ぜんこと言を俟たざるのみ

(四)

內閣引退の場合に在て、政友會幸ひに取て代ることを得たりとせよ、少くも三個の難關あることを知らざる可らず

三個の難關とは何ぞや、第一は外交上の難局也、條約改正は世人の思惟するが如く然かく容易ならず、現に關稅問題に於て英國との意思或は疎隔を來さんとし、殆んど妥協の餘地を見ず、甚だしきは則ち日英同盟の前途すら漫りに樂觀を許さゞらんとす、況んや日露協約、韓國併合以後、清國の我れに對する感情頗ぶる險惡に瀕じつゝあるをや、又況んや米國との交情も、外親しくして而して內疎なるの傾向あり、斷乎として大手腕を揮ふにあらずんば、容易に密雲を一掃し得ざるが如き狀態なるをや、而して獨墺諸國が日露協約を呪咀すると、最早蔽はんと欲して蔽ふべからず

凡そ、斯の如き難局は、經驗なき政友會の堪えざる所にして、國民も亦信賴せざるべし、敢て問ふ、政友會の自稱デプロマチカア、此の難局を解排し來て、功名手に唾して取るの自信ありや否や、易を避

けて難に就く、壯は壯なりと雖も、若し謬まらば國家を奈何せん、政友會にして眞に遠識あらば、何ぞ輕起す可んや

第二の難關は財政難也、海軍擴張、朝鮮統治、總て資源を要すると多きのみならず、國債償還の事亦俄かに變更すべからず、之を變更すれば信を列國に失ふの大不利あれば也、且つ陸軍强梁にして、擴張を要望せば、何を以て之を抑ゆるや、殊に公債を募集して鐵道の延長工事を急進すべしとは、政友會が近く前期議會に唱へし所、此の公言を實行せんか、非募債の政策一變と共に、又忽ち財界の反感を惹起し、甚だしきは財政の前途を悲觀する者を激增して、一昨年にも優さるの失敗を再びするなきを保せず、是れ政友會の頗ぶる考慮を要するや論なし、徒らに政權に渴して輕起するが如きは、斷じて智者の事にあらず

第三の難關は多言を要するまでも莫く貴族院にあり、政友會政府に立たば、貴族院に於ける味方を助けて、敵黨を窘迫し、以て自黨の勢力を扶殖すべき便宜はあらん、然かも二年三年にして成功せんとは至難也、而して反感の激發する處、意外の失敗を蒙むらん、貴族院は衆議院の如く解散するとを得ず、彼等の多數若し頑然として政友會內閣に反對すると、猶ほ政友會の桂內閣に於けるが如くならば、政友會は唯だ自から退きて內閣を抛つの外一策なければ也

西園寺侯は天成の首相の大器にして、且つ至尊の御親誼極めて厚きも、政友會が御信任を辱ふして、單獨に內閣を組織し得んとは疑問也、否、政友會のみを以て大臣を得るとすら不可能也、何ぞ況んや外

交と財政と貴族院との三方面に難關の横はるをや、政友會今進んで挑戰し、幸ひに勝て内閣を取るも到底持久するの算あらざる也、算なくして起つは兵家のなさざる所、思慮ある政黨は之を爲さず

（五）

故に政友會のためを圖るに、陰忍して敢て發せず、靜かなると林の如き陣形を支持し、其の間政府側の侵略に對應して以て自個の結束を堅くするを最良最善とす

唯だ桂内閣は、之を攻撃せざるも自然に自から引退するの機あるべし、桂侯功成り名遂げて一個の大元老たらんと欲して自から引退する其一也、外交と財政の破綻に由て、自から敗るゝ莫きを必せざる其の二也、而して其の後繼内閣が清浦子の手に成るも、寺内子の手に成るも、抑も又山本伯の手に成るも、政友會は到底彼等後繼者の打算以外に措かるゝの理なし、政友會の決然として奮起するは實に此の時に在り、西園寺侯の勇ましき態度を示すは此の時に在り、大政黨の面目を發揮するは此の時に在り、然り、其の時機餘り遠き將來にはあらじ

若し夫れ挑戰の後、解散となるに及びて、國民黨と連衡すべしといふと勿れ、是れ惡夢也、政友會を自滅せしむべき詛ひは是れ也

一言にして之を蔽へば、政友會の安危存亡の決は一に繋りて其の陰忍して時を俟つと否とにあり、更に要約していへば曰く、善意の中立を堅守するに在り、西園寺侯は大體に昧からず、而して松田原氏等まで能く總裁の意中を解せん哉

公論

北守南進論を駁す

法學博士　戸水寛人

私が歐羅巴に向て出發したのは明治二十二年てある。處が北守南進といふ言葉は其以前からあつた。誰が拵へた言葉かよく記憶せぬが或は日本新聞の仲間から出たのてはなからうかと思ふ、即ち谷干城或は其一派から出た言葉のやうに思ふ。然し確かな事は固より分らぬ。北守南進といふ言葉が斯樣に古くからあつたに拘らず、日本は滿洲に於て勢力を扶植し、尙朝鮮をも合併した。然らば即ち北守南進の説は日本人が之を實行せなかつた所の説てある。そして最も滑稽なのは所謂北守南進論者が朝鮮合併を祝して居ることてある。國旗を掲げ祝盃を上げて萬歳を唱へて居る。借問す、朝鮮を合併したのは果して北守か、將た北進か。若しも之が北進ならば北守南進論者は其言動に於て自家撞着に陷つたものてある。國民黨は由來北守南進黨てある。而かも聽く所によれば、國民黨も亦朝鮮合併を喜んて之を祝するの計畫を立てた。所が其形式が氣に入らぬといふので俄かに祝盃を上ぐることを中止したといふ事てある。若しも其形式が彼等の氣に入つたならば其喜や知るべきのみてある、彼等の言の信用するに足らざる之によつても明かてある。

私の考をいへば、第一に北守南進論には學術的根據がない。世界の人種を分つてブラキセファリック（bra-

chycephalic）即ち短廣と、ドリコセファリック（dolichocephalic）即ち長狹との二種とする。之は腦髓の形について分けたのであるが、亞細亞に住する蒙古人種は、ブラキセファリック即ち短廣である。然るに歐羅巴に住するチュートニックを初めとして亞弗利加に住する黑人に至るまで皆ドリコセファリック即ち長狹である。そして馬來人種は其短廣と長狹との間にある、即ち其血液は混合して居る。日本人は短廣人種なる蒙古人と混合人種なる馬來人種との結合から出來て居る其結果日本人の腦髓の形狀は朝鮮人程短廣ではない、然し歐羅巴人に比しては遙かに短廣である、日本人は蒙古人種及び馬來人種の結合なるが爲めに、寒にも堪へ暑にも堪ふるのである、世に水陸兩棲動物なるものがあるが、日本人は實に寒暑兩住の人種である。其證據には先年日本が露西亞と戰ふに當つて澤山の兵士が露西亞に滯在した。寒に苦んだには相違ないが之に堪へたのである。寒に堪へたといふ點についていへば寧ろ露西亞人以上てあつたらうと疑はれる。而して又日本人はよく暑に堪ふる人種であるとは何人も知つて居る。歐羅巴人及其血統を引いた所の米國人の如きは悉く寒には堪ふるが、然し暑を恐るゝこと甚しい。若しも亞米利加の人間が五十歲以上になつて比律賓に行けば甚しく其暑に苦むことは書籍に記されてある。又先年日本に來遊したる新聞記者クロットウォルゼーの言によれば、亞米利加の女が比律賓に行けば其年齡以上の老衰を來たす。花の如き顏の妙齡の女子が、比律賓に滯在する數年にして、忽ちに其艶美を失つて了ふ。故に歐羅巴人は寒には堪ふるが暑には堪へない。日本人は之に反して寒にも堪へ暑にも堪ふるのである。然らば日本人は北に進んで行けないといふ理由は一つもないのである。若しも日本の國權伸張の爲めに北に進んでよいならば北に進んで一向差支ない。若し日本の國權伸張の爲めに南に進んでよいならば南に進んで一向差支ない。又東に行き西に行くも日本人は到る處之に苦む憂がない。だから日本人たるものは侵略し易い所に向て侵略するがよいと思ふ。侵略といふ言葉は或

は穏當てないかも知れぬが、實際に侵略を望むのてあるから此言葉を用ゐても差支なからうと思ふ。

且つ又日本の爲めに北進を可とする歴史上の理由がある。それは即ち朝鮮に關係する事實てある。餘り古い事は玆に述べぬが、明治元年大政復古を機として朝廷から宗對馬守に命じて朝鮮に修交の談判をなさしめた。其任に當つたものは樋口鐵四郎、菰田多記てあつた。處が其目的を達しない。明治二年外務省は佐田白茅(素一郎)、森田茂を遣はして談判せしめたが矢張り要領を得ない。其後佐田白茅は盛んに征韓論を主張し西郷南洲の征韓論も主として佐田の説を採用したものだと噂せられて居る。明治五年花房義質を朝鮮に遣したが是れ亦其目的を達せずして空しく歸つて來た。而して明治六年に至ては何人も知る如く南洲の征韓論が起り、其議行はれずして南洲は官を去つた。其餘波は延いて明治十年の西南戰爭となり、又豪傑大久保利通の暗殺となつた。朝鮮の爲めに日本人は實に多大の犠牲を拂つた。明治八年雲揚艦は朝鮮人の爲めに砲擊せられ、之が爲めに明治九年黒田清隆と井上馨は朝鮮に遣され、談判の結果日韓條約を締結した。けれども朝鮮人は心甚だ驕つて誠意日本と交るの色がない。明治十四年堀本中尉(禮三)朝鮮兵を訓練せんが爲めに渡韓した、處が明治十五年、大院君を味方とする亂兵が日本公使館を襲うて、堀本は害に逢ひ、花房公使は纔かに身を以て免れ、仁川より英艦フライイングフイッシユに乘つて日本に歸つた。そして更らに政府の命を受けて朝鮮に行き、償金五十五萬圓を取ることを約し、内十五萬圓の支拂を受けた。同年十一月竹添進一郎が公使となつて朝鮮に赴任した。然るに明治十七年に於ては金玉均の亂ありしが爲めに日本公使館は支那兵の爲めに攻擊せられ、磯林大尉(眞三)之に死し、公使も亦日本に歸つた。之が爲めに十八年には伊藤博文と西郷從道とが支那に遣はされて天津條約を結んだ。それから以後數年間は支那が獨り朝鮮に跋扈跳梁して日本人は殆んど之に對抗する力がなかつた。然るに明治廿七年金玉均が暗殺せられ、同年夏終に日清戰爭が起つた。

此日清戰爭といふものは政府一個の考によつて起つたのではないので、日本人全體の輿論の爲めにどうしても戰はざるを得ざるに至つたのである。嘗て北守南進論者たりしものも悉く此輿論の喚起に力を添へた。北守南進論者の自家撞着は此時にも既に著しかつた。幸にして日清戰爭に於ては日本人は勝を制し、遼東半島を手に入れた。然るに三國干渉の爲めに之を還附せざるを得ざることゝなつた。臥薪嘗膽といふ言葉は北守南進論者の口からも出た。所謂北守南進論者なるものは屢々滑稽を演じて居る。明治二十七年より八年に跨つて井上公使は殆んど萬機を綜攬して居つたが、初めは其勢力の隆々たりしに似ず、後には其事業失敗に歸した。三浦公使が後任者として朝鮮に行つた。其當時支那黨は屏息したが其代りに露西亞黨が大いに勃興した。之を率ゐたものは實に閔妃であつた。日本人は憤慨の餘り遂に閔妃の事があつた。其反動は恐ろしいもので、日本の勢力は朝鮮に於て益失墜を來たした。三浦公使の後任たる小村公使も殆んど術の施すべきものがなかつた。明治二十九年に至つて山縣ロバノフの議定書が出來、小村ウエーバーの協定書も出來た。其當時には例のウエーバーが非常の辣腕を揮つた。之に代つたものは稍々穩和なるスペーアであつた。此頃に於て朝鮮の國王が露西亞の公使館に住んで居つた事は何人の記憶にも存して居ることである。此頃より日露戰爭に至るまで露西亞人は朝鮮に於て暴威を揮つて居つた。然るに明治三十七八年の日露戰爭の結果として日本人は南滿洲鐵道を手に入れ、且つ又朝鮮を保護國とすることが出來た。然るに單に之を保護國とするといふ事は朝鮮の經營上甚だ不便である故、遂に本年八月に至つて日韓合併を行ふことゝなつた。

日本人は右の如き歴史上の理由よりして朝鮮を合併した。此合併が果して北守なるか、北進なるか。北守南進論者にして此合併を喜ぶは甚だ奇觀といはねばならぬ。且つ又日本人が朝鮮を他の國人、特に露西亞人に委ぬべからざる理由がある。朝鮮の南端に鎭海灣がある。其灣は深くして大、以て澤山の軍艦を碇泊せしむ

ることが出來るのである。若し之に露西亞の艦隊が入つたならば、日本人は腹に刀を擬せられたと同じ事である。日本人は國防上どうしても朝鮮を手に入れねばならぬ。而して日本人が朝鮮を持て居る以上は滿洲に於ても多少の勢力を扶植する必要がある。何故なれば古來朝鮮は滿洲の方面から侵略せられた。滿洲に勢力なくして朝鮮人を安心せしむることは不可能である、斯くの如き事情に基いて日露戰爭は開かれ、而して日本は遂に其目的を達したのである。

處が、日本は滿洲に於て鐵道を所有して居る。そして其土地は即ち支那の領土であるとすれば日本と支那との衝突は到底免れざる所である。今日に於ては日本も平和を望み、支那も亦平和を望んで居るが、かくの如き狀態は決して長く續くものでない。日本が强くなれば南滿洲を併はすに極つて居る。支那が强くなれば鐵道を取り上ぐるに極つて居る。斯くの如き事が分らずして東洋の外交を談じやうとするのは少し間違つて居る。且つ又將來の實地問題として今後關東州を何と處分する積であるか。之れは千八百九十八年に露西亞が廿五ヶ年間支那から租借したものである。日本人は其權利を繼承して千九百十年即ち明治四十三年までに己に十二ヶ年を經過して居る。餘す所は僅かに十三ヶ年である。此十三ヶ年經過の曉には支那人は果して如何なる態度に出るであらうか。現今支那人は利權回收熱に犯されて居る。此回收熱は必らず久しく繼續するてあらう。支那に於ては今から七年以後、即ち明治五十年に國會を開くことになつて居る。國會を開く曉には利權回收熱は益々昂騰するに相違ない。事玆に至れば、支那の大官等は利權回收熱を主張すれば其地位を保つことを得、主張せざれば保つことが六つかしくなる。獨り大官のみならず、支那の皇室と雖も利權回收論を容れざれば、必らず之れが爲めに苦しむを免れまい。然らば今後十三ヶ年を經過すれば、猛烈なる勢を以て關東州の回復を迫つて來るといふ事は最も睹易きの道理である。其時に支那の後援となるべきものは或は米國人であらう。或は獨逸人であらう。日本人は豫

め之を備へんが爲めに、今日に於て海軍の擴張を實行することが必要である。然らば陸軍の方は如何。少くとも現狀を維持すべし。所謂軍備縮少論は取るに足らぬ愚論である。若し軍備縮少をすれば、今年出來た所の日露協約は必らず破れる。露西亞人は日本人を多少恐怖するから日露協約を結んだのてある。若し縮少すれば何等恐るゝ所がなくなり、露西亞は必らず此協約を破る。若し陸軍を縮少すれば獨り日露協約が破れるのみならず、日英同盟も亦破れる。明治三十五年に日英同盟は結ばれた。何の爲めに出來たかといふと、印度の防備に就て英人が多少懸念する所あり、又西藏に於て英人が多少爲さんと欲する所あつたからである。之が爲めには强大なる陸軍を有する所の日本と手を握ることが便利である。若しも日本が陸軍を縮少すれば、日英同盟を繼續する必要が無くなる。要するに陸軍縮少論は日露、日英の協約及び同盟を破り、日本は極東に於て孤立するといふ結果を來たす。此孤立は日本人として決して望むべきことてない。且つ又他日滿洲の處分を行ふに當つても日露の妥協といふ事が必要である。若し妥協をなさんとすれば、陸軍は斷じて縮少することが出來ない。クロパトキンの回想錄を讀むと、日本の陸軍の微小なることを指摘して居る。ポーツマス條約を結んだ當時は露西亞人は百萬の兵を哈爾賓附近に有して居つた。更らに奮發して南進をなして日本の軍隊を破碎する積てあつたのである。然るに此ポーツマス條約を結ばれたる爲めに滿洲の軍人が非常に憤慨失望したと回想錄に書いてある。其言或は誇張に失するやも知れぬが、日本の陸軍の大ならざるは露西亞人によつて斷言せられて居る。若し日本が陸軍を縮少したならば、露西亞は何の爲めに日本と妥協するか。從て滿洲を處分する時に日本は大困難を感ずるに相違ない。

且つ又北守南進論者は頻りに南進のみに重きを置いて暹羅、緬甸、非律賓諸島に日本の勢力を扶植せねばならぬといふて居る。必らずしも兵力を用ひずとも、澤山の移民を送つて大和民族の勢力の發展を計るとい

うて居る。然しながら多數の移民を送つて單に平和の目的を有するといつても、他の國が果して其れを信ずると思ふか。英獨佛米等の諸外國は、日本の之までの行動に徹して猜疑の眼を以て日本の一擧一動を注目するに相違ない。且つ日本に於ては多少北進の考を持つて居たから、英吉利人も日本と相提携した。然るに北進を罷めて陸軍を縮少し、海軍を擴張して南進を試みたならば、英人は忽ち日本の敵となる。單に英人のみならず、獨人、米人、佛人皆日本の敵となるに相違ない。然らば英獨佛米悉く日本の敵となつた爲めに、露西亞人は日本無二の朋友となるかといへば之も亦甚だ覺束ない。其結果日本人は南進も出來ず、北進も出來ず、只孤立の窮狀に陷るの外はないのである、且つ南進は國を富ますに都合がよい、南進のみすれが國の元氣が銷磨する。大陸に領土を有して國民の腹を太くし、北方の強と境を接して、國民の元氣を作興して置くといふ事も國家百年の計をなすものゝ忘るべからざることとてある。

私の考をいへば、我日本帝國は北進南進東進西進を實行せねばならぬと思ふ。國は伸び得べき時に於て伸び得る所に向て伸びるより外に伸びるの道がない。故に機會の來る每に多少づゝ其目的を達することを心掛くべきである。織田信長の侵略方法を見るに、強い方面には餘り兵を用ひず弱い方面に先づ兵を用ゐて、勝を制して然る後に強き方面に進む。即ち上杉とか武田とかいふものを後廻しにして、京阪地方の松永、六角等を攻め、次いで朝倉などを征し、此等を合併した強き勢力となつて初めて上杉武田などに當る計を立てゝ居る、露西亞人の侵略方法も之と似て居る。獨逸方面には餘り力を用ひず、主として亞細亞方面に骨を折つて、强大なる兵力が出來上つたならば初めて西に向ふべき方略を立てゝ居る。日本人も矢張り織田信長や露西亞人の爲した所を學んだらよからうと思ふ。北進の便利なる時は北進し、南進の便利なる時は南進するがよい。斯くの如き方針を取つたならば、他日南北何れの方面に向ても多少國威を宣揚することが出來る。之

に反して北進を捨て、南進を實行せんとすれば、日本は國境外に一歩も國威を宣揚することが出來ぬといふ事になる、愚なるものは北守南進論である。殊に滑稽なるは日韓合併の時、或は國旗を掲げ或は祝盃を上げた所の北守南進論者である。

更らに問を發するが、朝鮮を取つたのは北進ではないか。此に由つて之を觀れば北守南進論には學術的基礎なく歴史的根據がない。此論を唱ふるものは將來の實地問題についても無經綸極まるものである。願くば讀者諸君北守南進論に耳を傾くること勿れ。之に比較すれば私の北進南進東進西進の議論は遙かに優つて居る。よく此論を實行すれば、東洋の覇權を握ることが出來る。尚進んでは世界を壓倒することが出來る。昔、露西亞の彼得大帝は遺訓を作つて世界を征服せよといつたといふ事である。之れ果して大帝の遺訓なるや、或は之れ露西亞の理想とする國是なるや私は深く知らぬ。然しながら日本人は露西亞人に代つて斯くの如くならんとの決心を抱いたらよからうと思ふ。（完）

人種改造と惡質者の處分

海野幸德

予は本誌前號に於て人種改造の意義其理由並びにその國家的大問題たる所以を論じ、中流人士の減少と共に下層社會の膨脹を來し、社會の盛衰國家の興亡に關するに至るべきを切言し、我同胞の反省を要請せり。之れより更らに進むで惡質者の處分に論及し、以て人種改造の及ぶべき範圍を提示せむとす。

先づ誤解を避る爲めに一言すべし。予の惡質者を窘迫するとを以て慈善博愛の精神を缺くものとなし、又貴族的性向によるものとなすこと勿れ。予と雖も惡質者の慈愛すべきものなるを知れり。されど社會並びに

國家動物たる吾人々類の重點とするところは個人よりも社會並びに國家なるを以て、社會又は國家に有害なるときは個人を犠牲となし泣て馬稷を斬るは當然のことなり。又貴族的性向によると云ふ非難は予は貴族にあらず單に中流社會の一員たること、及び予の論討するところが一に學術的なるにあるを知らばたゞちに霧消することとなるべし。

予は之れより惡質者の處分を論ずべし。されど予は予の論結をたゞちに現實せむとするものにあらず。假りに結言し置くものなるを以て、有識者の批評を仰ぎ一般社會の公認を經て初めて社會並びに國家の採納を乞ふこととなるべし。されど玆には單に科學的遊戯として論述するにすぎず。誤解せざるを望む。

(一)監獄　犯罪人の社會並びに國家に害惡を及ぼすは顯明なることとなり。吾人は犯罪人の横行するが爲めに高臥安眠するをえず。日夜戰慄之れが爲めに備へざるべからず。國家は之あるが爲めに警察を起し、監獄を設けて多額の失費をなさゞるべからず。若し犯罪人を社會並びに國家より排除することをえば吾人の幸福の增進すべきこと明らかなり。此の必要に應じて犯罪人を隔離し、一般良民の幸福を增進せむとして起りしものは監獄なり。その果して効果あるか否か攻究すべし。世界の諸國は犯罪人取締に費すこと約一億二千萬圓なり。されど犯罪人の處分は未だ科學的となり居らず。各國未だ舊慣により非科學的に處分し居るを以てその効果の擧がらざること、有れども無きが如くなるは次ぎに說述するところの如し。

拙著「日本人種改造論」中には生物殊に人類を形成する要因を(一)遺傳(二)外圍=(環象及社會的遺傳)となし左の如く結言せり。

(一)個體を開發せしむるものは遺傳並に外圍の兩要因なり。

(二)個體は遺傳並に外圍兩要因の協同的產物也。

(三)人類の他動物と異るところは其可塑性を領有するにあり。

(四)可塑性を領有する分量に從ひて外圍の勢能の消

長を現ず。若し可塑性乏しきときは外圍の勢力は微弱なるべく、之れに反し可塑性大なるときは外圍の勢力強大也。

(五)外圍の個體開發に及ぼす勢力は至大なれども、その根本的要因をなすものにはあらず。分量に於ては(一)外圍(二)遺傳なれども其輕重に於ては(一)遺傳(二)外圍なりとす。

(六)之れを以て若し可塑性滅却するときは如何程精良なる外圍ありと雖も完全なる個體を形式すること能はず。

(七)一定の可塑性あるときは外圍の如何によりて多少の形觀を顯現す。

(八)個體開發上遺傳と外圍との分量は遺傳三又は四外圍七又は六也。

(九)人類の發達は社會財産に竢つ。

(一〇)人類は社會的本能を有すれども其社會的本能は動物の領有するが如き强固なるものにあらず。從つて之れを基礎とし社會の發展國家の建設をなすは不可能なり。

(一一)然るに人類は他動物と異なり豐富なる社會財産を有するを以てよく其四周にある生物無生物を征服するをえたり。

(一二)社會財産は一定不變のものにあらず。絕えず進步し發達するものなり。

(一三)社會財産は質と量とを包容す。

(一四)社會並に國家は財産の多寡に從ひ進步し或は退步す。即ち社會財産の内容分量に正比例す。

(一五)社會財産の質と量とは必らずしも相提携し隨伴するものにあらず。

(一六)社會並に國家の健全なる發達は社會財産の質と量とを兼有するにあり。

以上の十六個の法則は人類を形成するには不可缺のものなり。即ち人類形成は之等の法則によりて遂成せられ、人種改良は之等の法則を根基となす。されば犯人を取扱ふにつきても之等法則を格守せされば到底科學的方法を發見し、獲得すること能はざるべし。

犯罪人を遇するに之れまて自由意志を根據となし復讎的に責罰せしと雖も、自由意志と言ふが如きものは畢意宗教的哲學的迷妄の結果にして、科學的に精神狀態を觀察するときは、心的現象は內界外界の一致抱合によりて現生するものにして、抽象的に內界のみを獨立することは理論のことにして實際には出來うべからざることなり。此の出來うべからざる舊式の自由意志說は今も尙ほ勢力を揮ひ、一般民衆は勿論責任あるものにても復讎的觀念を放棄せず。精神病者を遇するに自由意念によるもの現今少なし。されど精神病者と同じく形質上不具なる犯罪人は未だ自由意志の外に立つ能はざるなり。一般的迷妄を離れて科學的に嚴密に攻究すべし。果して形質と遺傳と環象と社界的遺傳とを離れたる意志なるものありや。吾人正常なる人類にありても一擧一動は先代並びに父母の遺留せし特質より發し環象と社會的遺傳（社會的遺傳の如何なるものなりやを拙著によりて知了せられたし）とによりて變形せられたるものなり。先代並びに父母の遺留せし特質により、復讎的に責罰することは正當なることなりや環象により、自己の慾求せざる方向に變化せられし特質に對し復讎的に鞭撻するは正當なることなりや。社會的遺傳によりて、强いて着色せられし特質に對し責任を問ふは正當なることなりや。宗教家哲學者の自由意志說の根據は淺しと云はざるべからず。生物の基礎的要件は潛在的本性にして之れに內的要因と外的要因とを附加したるものなり。內的要因は細胞內に伏在する物質と其量並びに質、發酵素、原形質、細胞膜等にして、之れに外的要因は附加せられ、以て潛在的本性を開發して生物體を形成す。宗教家並びに哲學者は潛在的本性、外的要因、內的要因の外に一種靈能なるものありとなすや。吾人籍を科學界におく者にありては分析も、染色も觀察も、實驗もかくの如き幽靈的なるものを發見することなし。客觀と主觀との融合形成せる現象界には一切にかゝるものゝ存することなく又存する筈なし。されば吾人は宗教徒哲學徒の言說を排斥しどこまでも自由意志を排斥せざるべからず。

以上少しく意由意志說を辯折せり。之れ犯罪人の取締並びに處分に必要なればなり。犯罪人は(一)遺傳により(二)外圍によりて形成出現するものにして、自由に自己の意志によりて出現するものにあらず。現時吾人の犯罪を隔離して高臥安眠するところの監獄は實に自由意志の產物たるなり。監獄は社會破壞者を隔離すると共に又之れを改善して正常なるものとなさむとするものなり。監獄にして舊時の遺物にあらず、自由意志の產物ならずとせば、吾人は何故に遺傳的に犯罪人たるものを幽閉し更らに之れを解放するやを解することを能はず。遺傳的に犯罪するものはその形質によるを以て形質の改良せられ改造せられざる限りは犯罪の源泉は消滅せしにあらざるなり。かゝる非科學的なる愚擧をなし居る以上舊時の遺物自由意志の產物なりと云ふも拒斥するに由なかるべし。以後若し人類の幸福の爲に監獄なるものを要すとすれば、そは(一)遺傳的に犯罪する者はその罪の輕重を問はず終身之れを獄舍に幽閉すべきこと、(二)遺傳的ならず環象並びに社會的遺傳の結果によるものは、(A)犯罪者を良環象良社會遺產の中にをくか、(B)環象又は社會遺產の改良を計らざるべからず。外圍によりて犯罪したるものを獄舍に投ずるは其用有害なることとなり。以上の法則によりて改良せられし監獄は現今列國中一つも存することなし。之れ未だ少數の學者を除き一般世人の了知せざるところ、又容易に了解し能はざるところなるを以てなり。予は人種改良上漸次社會並びに國家の此の種の方法を採用するに至らむことを希望せざるを得ず。

人類界に於ても外圍の權力を揮ひ居るものなることは拙著「日本人種改造論」に明らかなり。讀者はそれによりて犯罪人と外圍との關係を推考することをうべし又遺傳の如何なるものなるやは拙著によりて一と通り了解することをうべし。さればこゝには單に犯罪と遺傳との關係を明確ならしむる爲め一二の例證を提示するに止むべし。

Aなる家族にてはAは四兒を有し、一人は粗暴なるもの、一人は白痴、一人は殺人者、一人は飲酒家にし

て、粗暴なるものは一人の白痴、一人の狂人、二人の精神虚弱者を出し、飲酒家の兒は一人の癲癇、一人の殺人者、一人の飲酒家、一人の正常なるものを産せり。一地方に於ても家族の場合と同じく遺傳的に犯罪人を出すものあり。アルテナの如き即ち之れ也。アルテナと以太利と比較するときは、殺人罪を犯せるもの、以太利に於ては九、三八なるに、アルテナに於ては五二、五〇なるを示し、暴行をなすもの伊太利にては三四、一七なるに對し、アルテナにては二〇五、〇〇なり。强盜の數は伊太利の三、六七に對し、アルテナは一四二、五〇を有し、竊盜は以太利の四七、三六に對し、アルテナは一四二、五〇を有す。アルテナの如き犯罪者は日本、伊太利、西班牙、白耳義、墺地利、佛蘭西、獨逸、英吉利に於て發見すること能はざるところにして、之れ實にアルテナの表號なるなり。これによりて見れば家族のみならず、一地方も亦遺傳的に犯罪者を出すを知るべく、更らに一國及び犯罪國なるものあるを推定しえらるべし。

以上の如き遺傳的犯罪者の監獄に於て改良すべからざるは明らかなり。然るに監獄は此の種の犯罪人をも收納しては解放し、更らに收納解放を繼續す。かくの如き非科學的にして無益に國費を消失するが如き愚擧は早晩改正せざるべからず。又監獄に投じて改善の實を擧げむとすることも佛國の學者の言ふが如く無益のことにして、一度監獄に投ぜられたるものゝ惡しくなるとも良くなることなく、かくして監獄は犯罪者の製造所たるが如き觀を呈す。予は敢て監獄無用說を主張するにあらず。たゞ無益に國費を消失するの愚を止め今少しく科學的となり、輓近學術の指示するところに從ふべしと云ふにすぎざる也。

監獄の人種改良上その効果薄く又無きことは上述せしところによりて分明となれり。

(二)感化院　監獄を論じたる際遺傳と外圍との關係を論じ、以て監獄の價値を判斷したるを以て之れを感化院に移すときは、たゞちにその價値の如何なるものなるやを知ることをうべし。されば こゝに感化院の價値、

に就て論述するの必要あらざるべし。感化院に入るものゝ中、精神病者、不具者、飲酒家、白痴、犯罪人、惡質者の子孫の薰化改善せられし例は無之く、たゞ薰化改善せられしものは境遇によりて不良となりしものゝみなり。後者の意味に於て感化院を開設するならばいざ知らず、前者の場合に於ては全く無用有害なるは自明なることなりとす。動物の中にても特に不良の個體あることあり。たとへば盜癖を有する蜂あるが如き之れなり。かくの如き個體は先天的に不良なる形質を有する結果にして、人若し盜癖ある蜂を薰化して正常なるものならしめうと言はゞ、世人はその不明を嗤笑すべし人類の場合も之れに同じ。

（三）惡質者の隔離　予は監獄を論ずる際遺傳的惡質者は永久に幽閉するにあらざれば効果なきを言へり。此の種の見解により、惡質者を永久に隔離し、以て社會並びに國家の幸福を增進せむとするものあり。されど惡質者の數は極めて多きを以て、悉く之れを隔離するには巨大なる費用を要せざるべからず。かくの如き巨大なる費用を支出しうる國家ありや否や之れ吾人の考慮せざるべからざる問題なりとす。此の故に永久に隔離するの可否はしばらくをき、果して實行することをうるものなりや、此の疑點の解決せられざる限り此の方法は採納すべからざるなり。

惡質者を悉く遠隔せる島に追放すべしと言ふが如き說もあれど、英吉利、佛蘭西、伊太利、露西亞の例を一覽するときはその有効ならざることは容易に看取せらるべし。

（四）結婚免狀　惡質者の結婚を阻止する爲め政府に於て結婚免狀を發行すべしと說くものあり。米國の中には結婚免狀を發行する洲あり。されど結婚免狀によりて惡質者の蕃殖を阻止すべしと考思するは甚だしき樂觀なりと言はざるをえず。不具者、白痴、犯罪人、惡質者の一々政府の結婚免狀をえて而して後に夫婦となると云ふが如きことはありうべからざることなり。免狀あるにせよ、無きにせよ、夫婦となりえざることなければ、結婚免狀發行の結果は屆出てなき結婚の激增

となりて現はるにすぎず。公然結婚するを要するは良質者のことなり。惡質者にありては公認は無用のことにして一文の價値あることなし。かくの如きものに對して結婚免狀の効用あるを信ずるは甚だしき謬見なりと言はざるをえず。予は結婚免狀發行の議に反對するものにあらず。たゞその効果は一〇中一或は二位のものにして、特に取り出てゝ言ふの價値なしとす。されど結婚免狀を發行するときは良質者の便利となり、多少の効果あるを以て、我國にても結婚免狀の發行せらるゝに至るを望む。されど人種改良上には殆んど効果なきことは予の今より斷言するところなり。

（五）炭酸瓦斯による排除說　之れマキムの主張するところにして、マキムは惡質者を一室に收納し、之に炭酸瓦斯を通じて靜に穩かに死亡せしむべしと主張せり。炭酸瓦斯による排除法はたとへ、有効なる方法にして、死亡に際しても些の苦痛なく惡質者に取りては却つて幸福なりと雖も、予は一般生物學的知識を缺き人類の鑑能を云ふ時代にありては不適當にして到底實行すべからざることゝなす。されば之の說の實現せられざるべきは明白なり。

予の主張せむとするところのものは、世人の一般認めて適當なりとし、慈善博愛の精神に反せず、又實行しうべきものにして、人種改良に効力ありと信ずるところのものなりその如何なるものなりやは次に說くところによりて知るべし。

（六）生殖器の手術　男子並びに女子の生殖器を奪取するは確かに有効なる方法なれども、心身の變化を伴ふものあれば此の方法は無害のものと稱するをえず。又男子の生殖器の一部を除く方法あれども之れ又生殖器全體の衰退を來すを以て實行するをえず。されば現時に於ては無害に男子の生殖器を處理することは不可能なるなり。されど女子の場合は之れに反す。女子の子宮を切取することは、女子の心身に變化を來すを以て實行すること能はずと雖も、フハロピヤ氏管靭帶を切斷するときは、姙娠すること不可能となるを以て、若し惡質婦人を此の方法に依て處理するときは惡質の傳

達を防止するとをうるなり。現今惡質者の處分法として有効にして無害なるものはたゞ之れのみなりとす。

惡質者の處分は重大なる問題なり。されば予は之れを輕々に斷定せざるべし。されど惡質者の增加は否定すべからざることにして、若しこのまゝに放置するときは、漸次國家の運命に關すべきを以て、吾人は今に於て之れが攻究に從事し、社會並びに國家の秩序と幸福と昌榮との破壞を阻止せざるべからず。惡質者の處分、人種改造は國家隆興の大問題なり。如何にせば人種改造の思想を周知せしめうべきか。如何にせば幾多の有識者を驅りて之れを唱道し鼓吹するに至らしめうべきか。又如何にせば吝嗇なる富豪をして資金を散じて國家有用の、事業に貢獻せしむるをうべきか。之れ日夜予の心勞するところの問題なりとす。

獨逸最近の外交を論ず

マスター、オブ、アーツ 米田實

一

最近歐洲外交界に於て活動振り極めて目覺ましきを感ぜしむるものは獨逸是也。就中エドワード七世崩御後四月を越えざるに、俄然土耳其羅馬尼亞協約を成立せしめ、君府に於ける英國の地盤を顚覆せるが如きは、抑も何等巧妙の手腕ぞや。

然かも予は土羅協約を說くに先だち、少しく獨逸外交の活動する所以を述べん。抑も同國外交の活動は墺國と協同して行はるるものなりと雖も事實上重に獨逸其者の外交的活動と言ふも不可無し。現に昨春ボスニアヘルツエゴボナ兩州併合問題解決の如き、人或は墺國外相エーレンタル伯の辣腕を推賞する者あれども、

其最終の決定は實に獨逸の對露宣言に依りたること、識者の承認する所也。而して獨逸外交の活動する所以に至ては、予は三箇の原因が伏在して、之を刺戟し、之を鞭韃しつゝあるを見るもの也。

三箇の原因とは何ぞ。第一は言ふ迄も無く獨逸が新進の青年國として、元氣旺盛に、英國の如く現態維持を目的とせず、寧ろ現態變改を利とするの境遇に在ること是ならずんばあらず。蓋し英國の人口增殖比例は約千分九なるに反し、獨逸は千分十五を占め、其程度歐洲諸國之に及ぶものあらず、是已に同國が根本的に膨張を要求する所以の一たり、之に加ふるに國民的歷史に依りて涵養せられたる進取敢爲の氣象は正さに高潮に達し、國內產業の發達と共に、商運の進步甚しく、歐洲大陸に於ては(葡國のみを除き)、貿易增加率遙かに英國の上に在り。南米に於ても亦然り。此商運に現はれたる膨張力は、如何てか外政上にのみ反映せざるを得可き。況んや之を版圖一千一百萬方哩に及ぶ老大國英吉利に比するに、攻守の勢自ら異るものあり、從つて活動の程度も同じからざる可きは寧ろ自然なるに於てをや。第二は外交上に於ける獨逸皇帝の特殊なる地位是ならずんばあらず。夫れ歐洲諸國中、皇帝若くは大統領が外政に干與する權利を否認せるもの尠しとせず譬へば伊太利の如き、佛國の如き其好例也、故伊帝フムベルトの治世に當り首相クリスピーが一切皇帝の干涉を否認し、外務省が大使公使に送りたる訓電の寫文を皇帝に示すを拒絕し、伊國議會が首相の態度を是認したるは、史家の共に知る所たり。又佛國大統領カシメル、ペリエの執政期に當り、時の外相アノトオ氏が外國との交涉文書を大統領に示すを拒み、且つ直接大統領と通信したる丁抹駐劄佛國公使を召還し、遂に大統領辭職を見るに至りしも世人の記憶に殘る所ならん。茲に至て人或は言はん、他は焉らく措き帝王の外交權を承認するもの、獨露墺英諸國皆然りと。然かも、此內獨逸の制度は他と類を異にし、實際的活用上、特に英國の如きに比し一層帝王の權力を大ならしむるものあるを奈何。蓋し獨逸聯邦會議(ブンデスラット)に外務委員會なるもの

り、索遜、瓦敦堡各委員を出し其他の諸洲全體より猶二名の委員を出すは事實なりと雖も、之等は諮問機關と見る可くして、眞に外政に干渉するの權限無し。又英國に於ては外交は皇帝の大權に屬すれども、そは議會に對して責任を負ふ外務大臣の意に反して行使せらる可きものにあらず。之に反し獨逸に於ては外務大臣も議會に對し責任を負ふの義務を有せず。是豈滿身の野心を藏して、亞歷山、シーザーを夢み給ふ現維廉三世の活動自在なる所以に外ならん哉。

然りと雖も、之等は唯だ獨逸外交活動の一般原因のみ、其最近に於て特に急轉直下、異常の飛躍を見來れる眞因に至ては別に之あり。何ぞや。過去數年間の獨逸外交の失敗即ち第三の重因是ならずんばあらず。蓋し獨帝が多年熱望せる所は、露國をして英國と相鬩がしめ、佛國をして獨逸に屈服せしむるに在りき。英露にして相鬩ぐ無らんか、小亞細亞方面より一轉して波斯に入らんとする獨逸の野心は遂げらる可きにあらざる也。英佛露を離反せしめざらんか、血緣的關係を利用し、又地理的必要に迫られて、和蘭を併合せんとするホーヘンツォレルン皇家の希望は實現せらる可きにあらざる也。是に於て乎獨帝と獨逸政府とはあらゆる手段を盡して故エドワード七世の英佛露協商策を妨害したり、然かも千百の詭策も、多年の焦慮も、水泡と消え、英佛、英露兩協約相繼て成れり。茲に至て獨帝の痛恨それ果して如何なりしぞ。

然るに本年五月、英帝宿痾を以て易簀し、アルビオン島帝國の外交、俄然として衰退す。維廉二世たるもの、此間に乘じ、多年の鬱憤を遣らんとして、英佛露三國協商に打擊を加ふるもの、豈寧ろ自然ならずとせん哉。而して予を以て之を見る、其土羅兩國間に斡旋して、協商を結ばしめたるものは、則ち此打擊の計畫の一步而已。然らば則ち亦何の異とす可きことか之あらん。

二

九月下旬、土羅兩國間、戰時相助くるの約定成るや、世人は駭然として自ら其耳を疑へり。然かも兩國

には夙に相援く可きの勢ありき。獨逸の如きは唯巧みに其勢を利用したるに過ぎざる也。

何ぞや、羅馬尼亞は近東に於ける唯一の拉丁民族の國家也。北には露國あり、南には勃牙利、塞爾比あり。スラブ民族に裏まれて、心細さ限り無きは、縷說する迄もあらざる也。孰れの非スラブ的國家とか相結び、自衛の方途を講ぜずんば、邦家の安泰も得て期し得可きにあらざる也。是時に當つて、眸を自國の附近に放たんか。スラブ的國家たらざるもの、唯だ南に土耳其帝國あり、西南に墺洪帝國あり。從つて羅國が獨逸と墺洪國との慫慂の下に、土耳其と相結び、以て土墺兩國と親善なるを期するが如きは、豈寧ろ其國是に適合するものにあらざらん哉。況んや同國、曾つて土耳其の虐政に惱めること無きにあらずと雖も、十九世紀後半獨立以後、相互の關係は、他の諸小邦に比し頗る親善なるものあるに於てをや。

若し其れ土耳其が羅國の援助を利とするに至ては、一層甚し。他なし。一九〇八年憲政實施は世人の想像するが如く國内の平和を齎らさず、就中マセドニアの紛亂依然たり、加ふるにクリート問題の難關は益々土耳其の對外關係を危殆にするを以て也。

最初土耳其憲政成るや、回教徒迫害は中止せられ、自由、平等、穩和の政治を見る可しとは萬人の期待せる所なりき。然かも政治は成長するものにして俄かに造らる可きものにあらず、善美なる憲法も之を運用する土耳其官吏が愚盲なる以上は、是遂に一片の空文而已。基督教徒の不平は遂に勃發せざるを得ざりし也。然かも此點は少焉らく措き、假りに土耳其の政治善美なりとするも、マセドニアに對する希、塞、勃三國の野心は到底滅却す可きにあらざる也、乞ふエリス、バルカー氏をして之を語らしめんか、氏曰くマセドニアの人口は大部分スラブにして土耳其人に至ては寥々たり。是諸スラブ國が玆に流涎する所以也、而して諸國は相競爭して自國民を最多數なるが如く紹介し、之が統治權獲得の準備をなす、即ち塞爾比人の計算に依れば同地人口は塞爾比人二百〇四萬八千、勃牙利人五萬七

千、希臘人二十萬たり、希臘人に從へば希臘人六十五萬六千、塞爾比及勃牙利人四十五萬四千たり、勃牙利人に從へば勃牙利人百十八萬四千、塞爾比人七百、希臘人二十二萬たりと。而して之等諸國は各々不公式に軍隊をマセドニアに送り、住民を脅迫し自國民となり、自國の教會に屬せんことを求め、聽かされば村落に放火すると世人の已に知るが如く也。土耳其新政府たるもの、此醜怪の現象を國內に見る。何ぞ長へに默許するに忍ん哉。

思ふに最近土耳其勃牙利關係險惡の聲を聞くに至れるもの、則ち土耳其が此醜態を鋤去し、一掃せんとしたるが爲めのみ。然かも此政策は土耳其が國家として存在を全うせんと欲する限り、放棄せらる可きにあらず。同時に土勃若くは土希間戰端を啓くの憂ひ之無きにあらざる也。況んや亦希土間に於ては、年來の宿題たるクリート島處分未だ解決を見ざるに於てをや。

其れ然り、土羅接近は巴爾幹に於て孤立せる兩國に執りて相互の一大利益也。之を成立せしむべき原因と必要とは既に已に充分に之ありき。左れば現羅馬尼亞王家と血緣的關係深き獨逸皇帝は、新に外相に陞任せられたるキデルレン、ウエヒテル氏の羅馬尼亞駐剳公使たりし時代に於て兩國接近を計畫せるは、敢て難事を企たるにあらざりき。然も其巧に難事ならざるものを利用し、至小の勞力を以て、多大の効果、獨逸外交上に致したる點に至ては、抑も何等卓拔なる眼孔ぞや。

蓋し獨逸の土羅協約斡旋が、英佛露三國に對し各々箇々としての打撃を加へ、同時に英佛露協商を打破し三國を分離せしめんとする獨逸の根本的政策に、大に貢獻する所ある可きや疑惑を容れず。先づ之を英國に見んか。土耳其憲政發布以來英國は深大の同情を土耳其に致し、其勢力も隆々たるものありき。然るに獨逸は英國がクリート問題處分上、希土兩國間に板挾みとなりたるを機とし、又新帝ゼョルジ五世が希臘皇帝の甥君に當らせらるゝに乘じ、種々流言を放つて、土英離間の下拵へをなし今回の協約に於て愈々英國を排去し、自ら之に代るに至れり。君府に於ける英國勢力の失墜は、近東に於ける其勢力の失墜を意味す。是豈ス

ウダ灣を窺覦し、土領メソポタミヤに發展せんとし、將た、回教徒多數の埃及を統治せる英國に執りて容易の事なる可けん哉。次ぎに佛國に見んか。土耳其と財政的關係深大なるものは則ち佛國を以て第一とす。現在土耳其に於ける佛國資本の投下額は十億圓に上り、獨逸の三億六千萬圓、英國の三億圓と同日の談にあらず。其範圍たる、獨り國債のみにあらず、鐵道事業あり、銀行あり、鑛山及工業あり、通船業あり。而してシリア其他に於て讓許權を得たるもの尠少にあらざる也。然るに今や獨逸の勢力嶄然として回教帝國に重きを成す、佛國事業の發展も、恐くは獨逸の恩惠と好意となくして行はれ難きに至らん。現に最近アナトリア灌漑事業が、過去十五年間注目し計畫し來れる佛人の手に落ちずして獨人の手に落ちたる如き、何ぞ其適例にあらずとせん。更に之を露國に見んか、獨逸の勢力が君府に盛大なる限り、露國が獨逸と和せざる限り、ダーダネルス海峽問題の如き、恐くは露國の希望を實現せしめ難かる可し。殊に露國が多年希望する所は、巴爾幹同盟の成立にありき、然るに土羅協約は則ち巴爾幹を兩分し、長へに同盟の機會を破壞せんとするもの也、換言すれば露國の一大政針を破壞し終れりと見る可き也。

之を要するに獨逸の外交は、一方に於て當の敵手たる英國に一大打擊を與ふると共に、他方に於て佛露二國にも打擊を與へ、三國協商の賴み少きを悟らしめんとする政策に貢獻する所大なりき。誰か維廉二世の卓腕を推賞せざるものぞや。

三

最近に於ける獨逸帝國外交の勝利は上述の如し。然らば則ち今後に於ける同國の態度は如何。蓋し獨帝が新成功の勢に乘じて、更らに發展の策を講ず可きや明か也。然かも其發展策は抑も那邊に向つて講ぜられんとする乎。

大體より言へば、獨帝は處を嫌ふの人にあらず、從つて其のあらゆる方面に於て英國の勢力に打擊を加へんとするや贅辭を待たず。左はれ予は其間に在つて二箇の重要現象を見る可きを信ず何ぞや、曰く親露政策

其一、曰く親米政策其二

蓋し獨帝が打擊を加へんと欲するは、英佛露協商なりと雖も、其要は一に獨逸發展の前路に横り、之を防害し若くは防害せざるを得ざるの運命に在る英國を孤立にし、微弱ならしめんとするに在り、然かも其盟契せる歐洲の二國間、佛國に至ては、或は之を英國より幾分疎隔することを得んも、歴史的政治的關係上、到底獨逸の味方たらしむ可きにあらざる也、露國に至つては則ち之に反す。乞ふ少しく之を說かん。

夫れ露國は歴史的に獨逸と深大の關係あり。久しき以前より之に文物を輸入し、之を啓發せるものも獨逸なり。從つて現今此獨逸的文明に養はれたる宮廷及守舊派間に於ては、親獨熱極めて盛んに、昨夏外相イスウオルスキー氏攻擊を開始し、英露提携の獨り英國を利するに止まり、露國の活動に對して一大制肘否寧ろ妨害を加ふるのみなるを指摘せるが如き、實に彼徒の處爲に外ならず。而して最近英露佛日四國協約に効あり、妥協大臣の異名あるイスウオルスキー氏が外相の職を抛つに至れるが如きは、實に親獨派を中心とせる英露協商不平派の畫策なること、殆んど公然の秘密也。蓋しボスニア、ヘルツエゴヰナ兩州合併問題と言ひ、波斯問題と言ひ、西藏政策と言ひ、將た最近土羅協約と言ひ、英露協約は徒らに露國の活動を制肘して、今や極東より一轉、中亞及近東に發展せんとする露國の進路を阻害するの觀ありたれば也。

然らば則ち敏慧の獨帝何ぞ之に對して沈默して止むものならん哉。親英外相の沒落に乘じ、親英主義の不信用に乘じ、巧みに獨逸派を籠絡して、同國政策を一變せしめんとするは自然也。其方法は先づ獨墺と露國との利害杆格せる(鐵道問題其他に於て)近東に於て相讓步し、以て相互親和の障碍を排去し、此上にて波斯蒙古西藏方面に於ける露國の發展を助くる等に在る可きか。而して本月獨逸に行はる可き獨露兩帝會見の如きは最も獨帝の希望を屬する所なる可きか。

次ぎに親米政策が獨逸の排英政策の一端として行はるゝ所以は他なし。米國は歴史的に最も英國と接近し

易き關係にあり、而して其接近は最も英國の勢力のみを増加するものなれば也。然かも是亦露國同樣、獨逸の運動を便ならしむ可き事情あり、何ぞや曰く米國に於ける獨逸人及愛蘭人の勢力、曰く東洋に於ける英獨日米の關係是也。

目下米國人口は七千萬を超ゆと雖も、大統領選擧有權者數は一千三百萬に過ぎず。然るに其三分の一は米國市民たる獨逸人及英國を嫌惡する愛蘭人より成る。然かも之等は他の民族と異り極めて鞏固なる政治的團結を有す。現に一九〇七年春ジエームス、ブライス氏、英國大使として赴任し、英米同盟說傳へらるゝや、之等獨愛人代表團體即ちジヤーマニツク、リーグ及ハイバニアン、アソシエシヨンは極力之に反對し、費府に於て協同的團結決議をなし、飽く迄英米接近反對の運動を進行せしむることに決定せりき。而して此裏面には獨逸の機密費活動せりと稱せらる。是我邦人の多く注意せざる所なるも、此人口的事情が米獨接近の一便利點たるや疑ひ無し。殊に近來米國の政策は英國よりも寧ろ獨逸との接近を促すもの少しとせず、現に淸國に於ける日米の利害が相衝突し、然かも英國は日英同盟に束縛せられて同文同語たる米人を助けず、寧ろ米獨間却て親密なるの感あるは世人の知るが如く也。是亦獨帝が外交上に利用せんとする所なるや亦疑ふ可からず。思ふに最近獨帝が小亞細亞に於ける米國鐵道布設問題（獨逸バグダド鐵道の利益を來す可き）に關して米國に讓步するの報あり、又中南米に就ても米國と相和せんとするもの、豈此勢を利用して親米策を講じ以て英國に打擊を加へんとするものにあらざるを得ん哉。

予以爲らく獨逸外交が近き將來に於て活動を試むる所は則ち此二方面に在らんと。然かも其成否は固より別問題ならざるを得ず、蓋し一部露人英露協商に飽くと雖も、同國事業家に至ては寧ろ英佛との接近繼續せられんことを望む可し、況んや英國の外交も全く眠れるものにあらず。最近波斯に於て無干涉的政策を放棄せるが如き、大に露國の輿論に鑑みたる者たるに於て

をや又米國に至ては、歴史的、人種的關係上（無論世人が思ふが如く純英人系流の米人は多からざれど）、今日猶親英思想牢乎たり。從つて獨逸の外交は、幾分英米の親交を妨ぐるの効果を奏し得んも、之を拉して獨帝の嚢裡の物となすは頗る難也。況んや獨逸は果して南米を放棄し米國の左右する所に委す可きか、若くは如何なる程度迄讓歩す可きかは、一疑問たるに於てをや。之を要するに、今後外交界の興味ある題目は、露米兩國に對する英獨の懸引に在りと言ふ可き也。

全的要求

金子筑水

自分は先月の『太陽』誌上に「ロマンチシズムとナチユラリズムの對照」といふ小論文を掲げた。論旨は、ロマンチシズムは、感情本位の要求に根ざし、ナチユラリズムは、理性本位の要求に根ざしてゐるとすれば其の點から、人間の要求の本質が、多少でも解釋されるといふにあつた。自分は、此の解釋は、現代の思想や文藝の理解に、少なくとも密接な深い關係が有ると信じた。然るに世間の所謂批評家は、單に此の小論文の皮相だけに注意して、其の内面確信の在る所を認めてくれなかつた。頗る遺憾に堪へない。因つて、茲に其の補遺を書きしるして見る。

ロマンチシズムを感情的、ナチユラリズムを理知的と言つたのは、單に普通の平びたい意味の感情一遍とか知識一遍とかいふ意味ではない。又人間の要求に、理性的と情意的と有ると言つたのも、決して一通りの意味て、知的のも有れば情的のも有るといふやうな意味

てもない。其等には、もつと〳〵深い具體的な意味が籠つてゐる。元來自分が强ひて斯ういふ區別を立てたのは、ロマンチシズムやナチユラリズムを區別するといふよりも、我々の內的生活を反省して、そこに見出だされる複雜無數の要求中、特に際だつた著しい二種類の要求に想ひあたるからである。多少內的生活に思ひを潜める者は、此の二種類の要求のために少なからぬ苦心を重ねるからである。而して此の二種類の要求は、共に生活經驗に關する最深要求であることに、先づ注意して貰ひたい。我々は、人間として、善い生活が欲しい、ベッターなさまに生活したい、價値の高い生活が欲しい。之れが生活上の根本的要求である。初から主情意的とか主智的とかいふやうな區別は無い。すべてが全人格上の複雜な要求である。すべて生命上の切實な全的要求である。然るに此の全的要求が分脈して、それ〳〵特殊な傾向を取つてくると、無數の傾向の中で、特に際だつた二種類の傾向が目についてくる。暫く宗教上の要求に就いて考へて見やう。我々は、最後の安心を欲する、確信を要求する。此の安心とか確信とかは、どういふ境に見出だされるか。或種類の人は、人生の實相の會得といふ點に重きを置いてゐる。人生の歸趨眞姿が自得されゝば、そこに安心や確信が宿ると觀てゐる。斯ういふ神秘的な要求は、事實我々に避けがたい。或は此の種類の要求は、人間に不相應な無益なる疑ひつゝも、尚我々の運命を想ひめぐらして、一種神秘な感慨に堪へない。死の島は、我々に限りない感想を與へる。茫漠として無涯限な天地の間に生死することは、畢竟何故であるか。如何にも不思議に堪へられない。其れが全然無用な疑問だといへば、科學なども畢竟は無用なことに成つてしまふ。此の種類の要求は、勿論其の性質が甚だ複雜で、普通の意味に於て、智的などゝいふ言葉で解釋の出來ないことは言ふまでもないが、然しながら、其の根柢の傾向から言へば、高義に於て、理性的であることは拒まれない。けれども、此の種類の要求と並んで、更に別種な宗教的要求がある。元來宗教上の安心とは、自然の實相とか、人

生の歸趨とかの會得ではない。自然の實相や人生の歸趨は、限りある人間の智慧を以てしては、到底會得されるものでない。隨つて、宗敎上の安心は、其等の智慧の沙汰を離れて、人格の中樞が美事に充實される所に在る。充實の程度は、すなはち安心の程度である。宗敎的眞理は、人格充實の勢力の意味で、普通に謂ふ知識上の眞理ではない。充實の力の大なるものが、すなはち宗敎上の眞理である。斯ういふ意味で我々は、客觀の眞理や事實よりも、主觀の自由や安心や充實を要求する。高義に謂ふ主觀の滿足が、我々の最高の要求である。宗敎上の安心は、此の主觀の滿足の意味に外ならない。

此の二種類の要求は、結局一つに調和さるべきものであらう。けれ共、現代の我々には此の二種類が、意地わるく離れ〳〵になつて、どうもシツクリ調和しない。妙に互に矛盾する要求のために苦められる感がある。

普通の生活經驗にも同じ感じがある。よりよく生活したいといふが、根本の實際的な全的要求である。本來を言へば、此の全的要求は、我々に取つて、全一に調和された要求でなければならぬ。然るに實際は、其れが全的に感ぜられてゐない。科學的空氣の中に育ち、事實や眞實に著しく敏捷となつた現代人は、すべてが事實に合し、眞實に一致することを熱望する、夢幻や空想や不自然が、今の人の敵である。一般此の傾向に支配されて、前の全的要求は、俄に一種の特色を帶びてきた。我々は眞實な生活が送りたい、事實に合した間ちがひの無い生活を送りたい、自然の人性に相應した生活が欲しい。自然性を矯めた虛僞の生活ほど賤しいものは無い。事實を離れた空想的生活ほど空虛なものは無い。事實を離れることは、すべてに於て空虛夢幻を意味する。我々は、得がたい一生を夢にしたくない。シツクリ事實に符合し、自然法に一致した眞實の自覺的生活に這入りたいと。斯ういふ要求が、普通の淺薄な意味の主智的とか理性的とかいふ形容を許さないものであることは言ふまでもない。まして知識一遍の好事的要求ではない。正當と言へば、其れが切實な

要求てあるかぎり、深く情意に根柢し、其の本質も極めて複雜多岐て、容易に一定の形容や解釋を許さない。けれども、此の種類の要求が、飽まて眞實な生活が欲しい、事實に一致した生活が欲しいといふ點を、其の著しい特質としてゐるかぎり、而して此の顯著な特質だけを、强ひて形容しやうとすれば、高義に於て、之れを理性的と解釋するは已むを得ない。情意の全的要求中、眞實といふ一面に重きを置いた一種の實際的要求の意味に外ならない。斯ういふ要求が、最早過去つた前代の要求だなどゝは、餘りに輕卒な判斷だ。現に我々の血管の中に、餘り强すぎる程に躍りめぐつてゐる活きた要求てはないか。我々は、むしろ此の要求の强すぎるために、苦んてゐるてはないか。

此の意味の理性的要求は、全的要求中の一部分にしか過ぎない。我々には、まだ別種の强い要求が有る。よく生活したい、價値の高い生活が欲しいといふことは單に自然て且眞實な生活が欲しいといふことの外に、のび〳〵した自由な生活が欲しい、活き〳〵した元氣に滿ちた生活が欲しい、深い徹底した底びかりのする生活が欲しい、死すとも憾みなしと感嘆し得られる樣な經驗を味ひたい、あはれに美しい優さしい生活も欲しい、恍惚として我れを忘れるやうな生活も欲しいと、一々數へきれない複雜な要求を含んてゐる。出來るならば、自然て且眞實てあつて、同時に富贍て深刻て自由て美しいやうな生活が欲しい。其れがかなはないならば、假令事實や法則は如何にあらうとも、事實や眞實を超越した美しい自由な生活が欲しい。事實や眞理畢竟何ものぞ。本來が生活のための事實や眞理てはないか。生活方便として、人間がこしらへ出した道具てはないか。自分の造つた道具に支配されるやうな意氣地ない生活は欲しくない。我々はたゞ充實した生活を送れば、假令其れが夢と言はれやうが、ロマンチックと呼ばれやうが、自分に絶對の安心さへあれば、死んてゝ憾みがないと。斯ういふ風な複雜な要求が、人間に本來的てあることも拒まれない。主智的な現代は甚しく此の種類の要求を弱めて、人間を狹く窮屈に考へさ

せる傾きが強いが、而も此の種類の要求は、到底人間に固有な本來的要求である。之れを前の理性的要求と區別して、假に情意本位の要求と名づけたい、むしろ全的要求の意味に解して貰ひたい。

我々の內生活には、以上述べたやうな二種の要求が雜然又混沌として並び起つてゐる。本來からいへば、前の理性的要求は、後の全的要求の中に調和されなければならぬ。而かも科學的空氣に育てられた現代の人に取つては前の種類の要求が、非常に強い。現に此の種類の要求のみが、人間唯一の要求と考へてゐる人さへ澤山ある。全的要求が分列して、其間にシックリした調和が無い。雜然又混沌として起こり來たる不調和な要求に對して、我々は、其の取捨選擇に迷つてゐる、內的生活は、これがために、ますます動搖する。此の動搖を靜めるためには、須べからく我々は、全的要求に着眼しなければならないといふが、自分の論文の眼目てある。ナチユラリズムは、恰も近代の傾向を代表し、ロマンチシズムは、主として感情的要求を代表してゐる。無論これはナチユラリズムやロマンチシズムの全體の說明ではない。單に複雜な此等のイズムのチピカルなエッセンシアルな部面を、人間精神の要求といふ一面から觀測したに過ぎない。上に述べたやうな特殊な意味で、理性的なナチユラリズムや情的なロマンチシズムは、最早過去のもので、今日のナチユラリズムやロマンチシズムは、そんな簡單なものではないと評した人もある。其れは評した人が、輕卒に簡單と解したからで、自分は決して簡單なものとは論じてゐない。今日の思想や文藝を、假にナチユラリスチツクなロマンチツクな(自分は其れ丈ては足りないと思ふが)混沌として複雜なものであるとすれば、恰も其れが以上書き列ねた內的生活の混沌として不調和な動搖に相應する、今日の思想や文藝は、單に著しく理知的な要求のみては解釋が出來ない、須べからく、全的要求から觀察しなければならない。文藝家も思想家も、今はすべて、全的要求に着眼しなければならない。これが自分の小論文の主意であつた。

兩極に於ける自然と人



小田内通敏

一

白瀬中尉が今夏南極探險の壯擧を發表して以來、兩極の探險は遽かに國民の注目點となつた。新聞や雜誌は競うて中尉の企圖を紹介し、國民の多數は爭ふて醵金の申込をなし、且つ兩極に關する智識を廣めんと勉むるに至つた。中尉も準備漸く整ひ、本月十五日愈探險の途に就かるるのであるが、我が國民は定めし滿腔の誠意と同情とを以て此の行の成功を祈るであらう。顧るに一時中尉が先後を爭ふべしといはれた英國の南極探險隊は、本年六月一日、ケアプテン、スコット氏指揮の下にテラノヴァ號に搭じ、ロンドンの西インド船渠を出帆した。其の部員總て五十名、中には動物學

者もあれば地質學者も氣象學者もある。ロンドン地學協會は、其の門出を祝はんが爲に、出帆の前日スコット氏を始め部員一同を招待し、午餐會をキングスホールに開いた。此の日此の盛會に來り會する者三百名。會頭レオナルド、ダーウィン氏は起つて送別の演説をなし、先づスコット氏が探險隊の隊長として、最も適當なる資格を具備せる事を稱へ、更に其の準備の周到にして遺漏なきを讃し、且つ曰く

探險の準備中、其の成功に缺くべからざるもの三、指揮者の經驗、目的を遂げんとする決心、指揮者と部下との絶對的信用の必要即ち是なり。然るに指揮者スコット氏は、吾人の既に知れるが如く、嘗つて北極地方に長期の探險をなせし人、加之爾來勉めて兩極探險に關する新報告を集め、殊に昨年南極探險を以て有名なるシャックルトン氏の有力なる助言と、昨春北極到達を以て其の名を博したるペアリー氏の新智識とに負ふ所多きにより、氏の如く探險に關する經驗の豊富にして練熟せる事は、氏を措いて決して他に求め難し。余は又數分間スコット氏及び其の部員に會見し、其の爲さんとする事と其の探險に赴く精神のある所を知る事を得たり。然り而して最後の一要件たる指揮者と其の部下との間に於ける絶對的信用に就いては、余はスコット氏が、其の部下に對して絶對的信用を有する事を諸君の前に告ぐべきを信ずると共に、其の部下に會へるの人は、何人と雖ども彼等がスコット氏に對して絶對的信用を有する事を知るに難からざるべし。……世間往々兩極地方に關する事業を以て、何の爲にするものなるやを疑ふものありと雖ども、こは固より辯解の必要なし。余は最後に此の探險の賜に就きて一言せざるべからず。そは他にあらず、此の行は確かに我が英國民の志氣の剛健なると、此の帝國を建設せし祖先の特質の未だ衰へざるを示すもの、我々國内に留まる者は、其の光榮の寸毫をも享有する權利なしと雖ども、亦以て全國民の自重心を增長せしむるに與つて力あり。是余が此の探險の價値に對して最も重き

を措く所以、此の意味を以て、吾人は此の探險の成功と其の指揮者の祝福とを祈らんが爲に祝盃を擧げん。

と。スコット氏は起つて、盛大なる送別會を開かれたるを謝し、次に數箇月間準備の甚だ困難なりし事を述べ、乘組の部員が何れも適任者なる事を語つて、財力の不足なるに言及し、部員がそれにすら滿足して此の企圖に加盟せし意氣は、科學的用意の十分なるよりも誇とすべきものなる事を語つた。最後に氏は、

余は、吾人が極南の地域に入り、種々なる困難に遭遇するの時に當り、今日の盛筵に對し深厚なる感謝の記憶を喚起すべきを列席の諸彥に告ぐるの光榮を有す。余は鄕國を出帆するに先ち、かく多數の地理學者が、相集り會頭の推獎の辭と會員の心からの期待とを以て送らるゝを感謝せざるを得ず。余は余及部員のために、述べられたる希望に對し深く感謝せざるべからず。

吾人は會頭ダーウィン氏の演說の最後の一節が、最も其の意を得たもので、我が國民が白瀨中尉を送るの意味も亦之に外ならぬ事であらうと信ずる。

思ふに南北の兩極は、面積からいへば地球上の一小地點にすぎぬ。人類の生活地としての價値からいへば、或は全くゼロかも知れぬ。されど其の神秘的に壯大なる大自然の光景は、人類の冒險的思想と智的要求とを刺戟して、無人の境も萬古の雪も零度以下の寒氣も、物ともせずに探險を企圖せしむるに至つたのである。されば兩極の探險誌は全く勇氣、忍耐、大膽の精粹である。吾人は十九世紀の主なる探險事業によつて、兩極に於ける自然と之を探險せし人類の努力とを知り、之によつて、我が白瀨中尉の壯圖が、如何に大なる努力を要するものであるかを偲びたいと思ふ。

二

北西航路を發見しやうとして北極探險に赴いた英人サージョン、フランクリン氏が、行衛不明となつたので、其の搜索に伴ふ探險は、續々英米に起つて來た。これは丁度十九世紀の中頃である。

其の後合衆國が、北米大陸の北方に横はつてゐる、グリーンランドとグリンネルランドとの間の航路をさがす目的て、探險隊を出したのが一八七一年の六月、船名はポーラリスて船長はホール氏、同二十九日にニユーヨークを出帆した。其の乘組員は三十三人、數年の準備をして北航したが、八月三十日に北緯八十二度十一分に達したので、冬籠のため一旦南航し、十一月八日船長の死により更に北進を斷念し、翌春早々ニユーヨークに歸航した。

八月になつて北緯七十八度二十八分に達した頃、疾風烈しく吹き來つて氷の大塊が船の周圍に一面に張り詰めギシ〳〵動きはじめた。船員はスハ一大事と思つてゐたが、氷塊は碎け舟は自由になつて、今まで氷海と見えた所が忽ち碧波を漂へ、それが一瞬間に氷塊が寄つて來て、ギツシリ閉ぢ込められてしまつた。推し寄せた氷の響が一層烈しくなるにつれ、船員は今度氷塊から離れる時は、船は忽ち大石のやうに海中に沈んてしまうと思つた。こうなると各自は覺悟を極めて萬一の用意をするより外はない、强い風も嚴しい寒さも物ともせずに働いてゐるうち、まはりの氷の軌る音は段々大きくなつて、寒い北の疾風は雪さへ交へて來た。十九人は船を下りて、それ〳〵荷物などの運ばれるもの丈氷丘の上にと積み上げた。そして風雪をさゝへるために荷物の小陰に身をかくしてゐた。……朝になつて風がやみ空がはれたから身を起して舟の所在を見回した。或者は一番高い氷丘の頂に上つて見たが、どうしても舟が見えぬ、見えるものは蒼白い氷ゝ廣野ばかり。かくて彼等は荷物のそばに集つて、默つて顏と顏とを見守るばかり、お互の心はいはずも推せられて。――舟は氷塊から離れると間もなく沈沒し、仲間は舟と共に海底の藻となつたに違ない。舟が沈むと間もなく氷塊は推寄せ、顏も出せずに氷の下になつたに違ない。(其の後彼等は非常の困難を犯して氷上に冬籠し、海豹熊等を狩つて食糧に充てゝ越年した)……八十三日間日光は見えず、其の間の寒氣は實に烈しい。一番烈しい時などは毛布と毛皮の間に雜居し、明日をも期

しがたき一命を保つてゐた。……或日幸にも舟の影が見えたから信號を示して漸く救はるゝ事を得た。此の船はラブラドルから來る海豹の漁船チグレス號で、指折り數ふればポーラリス號から下りてからは百九十六日、浮氷の上で生活しながら千五百哩南下してゐた。

當時彼等は全くポーラリス號の沈沒を信じてゐたが、後に至つて、幸に捕鯨船に助けられ無事であつた事がわかつた。此の探險の價値は、グリーンランドとグランツクランド間の海峽の通路を究めたのにある。

三

アラート及びデスカヴアリーの二船は、サージヨン、フランクリン氏の行衛搜索後、始めて派遣せられたる英國の探險隊である。サージヨーヂナルス氏指揮の下に、十八ケ月間（一八七五年五月より一八七六年九月まで）グリーンランド島の北部探險を試みておもしろい報告を齎した。

五月二十九日英國の南岸ポーツマス港を出帆し、六週間を經てグリーンランドのデスコ灣に上陸した。所がまだ積雪消えもせぬ初春の景色で、雪の消えた灣岸の傾斜地ばかり、漸く初春の草花咲き揃ふ樣可愛らしいが、少し高い丘の上にはなほ白雪が積つてゐる。此の島の海岸には、到る處山上の雪から融け來る水の溜つた小池があつて、春になると其處に蚊の幼蟲が澤山生れそれが忽ち蚊となつて、猛烈に人を螫す。之は探險者に取つての大苦痛である。

夏になると、よく沿海に大きな氷山の流れるのを見る。バッフイン灣附近に浮んだものには、水面上三百呎のものがあつた。浮氷は氷山と違ひ、水面から出てゐる事が僅か五呎位でも、其の面積却つて數哩に亘るものがある。されば夏の航海の最も危險な事は、この氷山や浮氷の間を横ぎる事である。氷上に於ける海象の群は、夏期に於ける探險家の好餌で、其の肉は便りに、ボートを卸して射殺すのは又隊員の一の樂ともなつてゐる。

夏でも疾風の吹く事が珍らしくはない。九月一日、アラート號は南西より吹き來る疾風に送られて一時間に十哩、浮氷さへも一時間に三哩吹き流された。かく

段々北進し北緯八十四度に達する頃、まだ九月の初旬であるのに、時々氷の新しく結ぶを知つた。海岸の少し高い處に上つて見ると、北方にはもう陸が見えぬ。アヽ極海(ポーラーシイー)である！　眼界際涯なき極氷(ポーラーアイス)の大塊ばかりである！　其の日深夜中になつて、太陽が北の水平線に沒する事を見た。

もう十一月になると、太陽は全く沒して新聞も讀めぬ、十二ヤードも離れると誰だか分らぬ位、こんな時に難有いのは太陰の御來臨て、暗い寒夜も御蔭て日光を拜するやうな心地がする。しかも十日間は照り續いて十三日はかくれるといふ奇觀である。されど月にも增して此の長夜の寂寞を破るものは、確かに變化極りない極光(オーロラ)の出現である。青白い其の光と、或は幕の如く或は帶や條の如く、或は波の如く變化する其の狀態には、殊に人目を惹くので、最初の探險家などは少なからぬ驚怖心を起したものだといふ。

冬がすぎ春になると、橇隊が組織されて船てゆかれぬ北方の氷上を探撿する事になり、船には十六人丈殘つて五十三人が二隊に分れ、一隊はグランツランドの海岸を、一隊は出來る丈極の方へと進む事に決した。……ギザ／＼した大きな氷塊の上、橇を曳くの困難は實に名狀すべからざるもの、日々單調な風物を見ながら同じ仕事をするつらさ、疲勞は爲に一層烈しくなる。船員はたゞ英國魂(ブリチツシユオブスチナシー)一つて働いてゐる。……極の方へ向つた隊がレプスルス灣に達したのは六月十三日、當時部員の健康狀態がどんなものであつたか。それは指揮者リユーテナント、ビユーモント氏が書いて殘した記錄(六月十三日の日附)六年後グレー氏の探檢隊によつて發見せられたものに、よくかきあらはされてある。曰く

我々三人は糧食の殘を持ち來るために、野營から約半哩南方に歸つたが、ドビング氏は非常に衰弱し、ジョン氏の容體は一層惡しく餘命二三日もどうかと思はれる。クライ氏は全く絶望！。こうなつては我々丈てはポーラリス灣に達する事が出來ぬ、出來る丈北進し出來る丈生き延びん！。神よ我等を助け給

へ。!!

此の隊ははじめビユーモント氏の下に六人でやつて來たのであつた。

四

合衆國政府から派遣せられ、グリーンランド島の殆んど最北端に到達したるグレーリー氏の探検にも、記すべきものが頗る多い。中にも左の如きは最も耳新らしい。

十月が終ると、暈（ハーロー）と極光との出現が始まる。天文の觀測も探検の一大目的であるから、よく其の現象に注意する。一八八一年十月二十一日の夜に現はれた光景に就いては、グレーリー氏の自記に左の如くある。

太陽を中心とし其の周圍に、二十三度と四十六度の距離で、二つの大きな環が現はれ、其の環には各五つ宛の太陽の假象が、虹のやうな麗しい色で現はれた。其の晩五時頃になると極光が現はれ、奇麗なリボンが螺旋狀にグル〳〵回つてるやうな形で、輝きのない蒼白い色だ。

極地の夕方の光景も繪の樣に美しいものだ。太陽が沈むでも冬夜の薄明が長く空を照して、赤、黄、青の雜色の廣い帶のやうなものが、上下に交つてる白光とこんがらがつて、一種異樣な色彩を現ずる。

或夜の事であつた。月は出たが、地平線上二十二度から四十六度の間隔で、其の周圍に二重の圓が現はれ、其の圓の上には上下に一つ宛、左右には二つ宛皆で六つの月の假象が出で、何れも虹のやうな色に輝いた事もある。

又冬籠中の事であつた。正月の或日晴雨計が烈しく下つて烈しい暴風の襲來を豫報し、間もなく一陣の風が屋上を掠め、それが段々烈しくなつて一時間に十八哩に達し、晴雨計が益々降下した。一人は屋外で觀測するべく命ぜられ、一旦は出たがあまりの强さに吹き倒されるので、他の二人は又助力にと送られた。風は雪さへ交へて一時間七十哩の速力となり、三人のものが六人となつて漸く觀測してゐると、風は一時間に六十五哩の速さに變じ、刻一刻と烈しくなつて九十哩

に達したので。家は倒れるだらうとは誰の胸にも浮んだ心配で、こんな時節に家が破滅すれば、つまり我々の破滅であると覺悟した。幸にも家の建方が安全だのと、上に積つた雪のあるために、風神の怒を避くる事を得た事もあつた。

此の探檢隊は一八八一年にニユーヨークを出帆し、八月グランツランドの北端デスカヴアリー灣附近に上陸して冬籠の準備をなした。以上の記事は初年から次年の春にかけての出來事で、それから例の橇隊で、漸次グリーンランドの北方へと進み、北緯八十二度五十六分に達したものもあり、グリーンランドの海岸に沿はずに北緯八十三度二十三分に達したものもある。かくして四年目に無事歸國した。

五

グリーンランドの北部の有樣と、此の邊に住んでゐるエキスモー、いはゞ北極の人民ともいふべきこの種族の風俗とは、同じ合衆國のペアリー氏が、一八九一年より次春に亙る探檢によつて明かにされた。氏の自記に

我々はどうしても、グリーンランドの北海岸に居るやうな氣がしない。日光のカン／＼照り渡つてる日中、崖の上に立つてゐると、脚下の岩陰には黄色な罌子粟が咲いてをり後方の谷間には麝牛(ムスクオツクス)の群がゐる。蒲公英も咲いてゐれば蜜蜂もブン／＼やつてゐる。

氏はこんな人を引きつけるやうな自然の光景が、どうしても一番近くに住んでゐる人里から、六百哩もはなれてゐる極地にあると思はれない。二週間ばかりは此の邊の視察に費したが、どうしても人が住んでおつたやうな形跡がない。……氏は到達の日が七月四日の米國獨立祭に相當したので、其處の灣を獨立灣(インデペンデントベー)と名つけた。灣の岸は大概三千五百哩もある絶壁で、荒涼たる極海を控へて巍然たる姿は、宛ながら獨立獨行する大丈夫の面影がある。

エスキモーの風俗に至つては、其の簡素淳朴實に愛すべきものがある。ペアリー氏の野營に來たエスキモ

ー共は、グリーンランド邊は一向木のない處だから、野營を建てるに用ゐた材木などは、何處からどうして求めたものかと訝がつてゐたらしい。又今までドン〳〵火を焚くのを見た事がないので、ストーヴの中で木のよく燃ゆる事を心地よげに見つめてゐた。そしてそれがどうなるだらうと不思議さうに思ふてゐた。

エスキモーの服裝は男女共餘り變つてをらぬから、ペアリー夫妻が共に上陸した時などは、どちらが女だか一向分らぬので、一人〳〵見くらべとう〳〵どれが女ですかと問ふた奇談もある。

此の邊に住んでゐるエスキモーの數が僅かに三百、ずうと南方にをるエスキモーと交通もしないし、時々海豹取りや捕船鯨に見舞はれる位だから、全くの世間見ずである。木の生へてる樣子も知らねば、すぐ後の山越して旅行した事もないから山の後方が一面大きな氷塊が續いてゐる事も知らぬ。

エスキモーには人は死んでも、其の魂は其の後繼者を護るといふ迷信がある、從つて人が遠方に行く時は魂は附纏つてゆくと思ふてゐる。だから彼等は時々ペアリー氏の探檢に反對していふ。——海豹もゐなけれや熊も鹿もゐない、そして氷と雪の塊ばかりある遠い所へなぜ行かねばなりませんか？

エスキモーの日用品は極單純なもの、其の財產といへば、衣服の外にはカイアクといふ一隻の漁船、一個の橇、一二匹の犬、二三の槍と石造のランプ位のものである。木は貴重品だから僅かばかりでも珍重するが、小刀と針とは大變欲しがつてゐる。金錢は彼等にとつては何の用もない、取引といつても物品の交換にすぎぬから。……彼等に取つて最も必要な動物は犬と海豹犬は家畜として運搬の用に供し、海豹は食料衣服燈火等に用ふるからである。

六

北極探檢者として最も人口に膾炙せるナンセン氏は、ノルウエーの人で、氏の探檢の大功は極に向つて流るゝ氷流の觀測に歸せねばならぬ。氏の出帆は實に一八九三年六月二十四日である。

九月十日氏の乘つてるフラム號は、歐洲の北端チエリスキン岬邊に來ると、段々浮氷のために推し寄せられて進退自由を缺き、もと來た南方に退く模樣てあつたが、一週間ばかり經て反つて北進するやうになつた。北に進むに從つて浮氷がギシ〳〵重り合つてなか〳〵動きがつかぬ。そしてあまり重なると段々船の兩側に高まつて來る。……フラム號が北緯七十八度五十分に來た頃、どちらに流されるものかと數日間見つめてゐると、かねて豫期した如くもと來た北西の方に流れてゆかずに、反つて南東の方に流れてゆく。……氷の表面を見てゐると、終始上下する有樣がよくわかる。上る時は四五十呎も上るが、上り詰めると雷でも落ちたやう音て碎け落ちて了う。……北極洋が冬になると、ヨーロッパ、アジア、アメリカの三大陸に圍まれた此海岸が、一面に氷て張り詰められる、そして其處に二三千哩もある氷野が至る處に出來る。其の厚さが大概三十呎から五十呎もあるが、干潮と滿潮の掛引て、或は碎け或は重りそれに海流の作用が加はつて浮氷が出來るやうになる。……一八九五年三月十四日ナンセン氏とジヨンセン氏とは、二つの橇と二つの漁船(カヤーク)と二十八匹の犬を伴ひ、船中の仲間に別を告げ、東經百度の子午線に沿ふて北進した。北緯八十四度まで浮氷て流されたフラム號は、更らに北進すべく此の橇旅行を企つたのてある。

七

さきにグリーンランドの北部を探檢したペアリー氏は、昨年四月六日終に北極に到達して其の名を世界に轟した。氏がニユーヨーク港を出帆したのは實に一九〇八年七月六日、其の乘船は前大統領の名を命じたルーズヴエルト、殊に北極探檢の目的で造られたものてある。

氏は、グリーンランドの東海岸に立寄つて、同行すべき順良なるエスキモーを求め、犬、毛皮其の他のものを準備した。それからエター港を出帆してロビンソン海峽を通ると、何れも三年前の舊知己て少ならぬ感慨に耽つてゐた。……翌年一月始めて船を捨て、橇旅

行を試みた。……進行は第一回第二回と時を極めて進む事とし、三月五日には北緯八十八度附近まで進んだが此の時は晝夜風やむ時なく歩行甚だ困難であつた。しかし三月下旬からは橇の工合が非常によく、極地探檢の行程としては珍らしく速かであつた。……殊に四月二日などは朝より霽れ渡つて風もやみ、浮氷も大きく舊いのでガッシリ固り、ちつとも動きもしない。それで十時間ばかり非常の速力（二十五哩）で進み、午後は二十哩ばかり走つた。……段々目的地が近くなるので、何れも勇んで八十九度を踰えると、風のあまりに冷いので、顔がひら〳〵さける樣な感じがする。――丁度先年グリーンランドの内地を旅行した時の樣あたりを見回はすと遠い水平線は黒くぼんやりとなつて見えるが、脚下の氷は名狀すべからざる乳白色を呈してゐる。氏は北極に達した時の感じを報告中に記して曰く、

　私の位置が八十九度五十七分に達した事を知つた時に、私はもう旅行の進程も程なくなつたので、到頭北極に來た！三世紀間に於ける世界の懸賞、二十年來私の夢にも忘れぬ決勝點が遂に我が物となつた!!

グランツランドの北端コロムビア岬を三十七里を費して到達した北極に、氏は一日滯留し十六日にして再びコロムビア岬の人となつた。

八

南極探檢は北極に比べると餘程新しいから材料も從つて乏しい。而して英人サージエームス、ロッス氏の如き先づ其の筆頭であらう。

ロッス氏は當時已に航路の定まつた佛米兩國のそれに反し、濠洲の方面から南下するに決した。然るに此の航路の直下すべき南極は、一大灣をなし、南緯六十九度まで航海し得た事は、全く天祐ともいふべきであらう。エレブス號テーロー號の二船が東經百七十度の子午線によつて、南航してゆくと、段々氷山が見えて來た。しかも北極の氷山とは大に趣を異にしてゐる。――北極のは大きくて高いが、南極のは形が小さく頂も

平かで、高さは百二十呎から百五十呎位のものが多い。

はじめて陸影を認めたのは、南緯七十度二十三分に達した時で、一八四一年一月十一日である。陸からは百哩ばかりの距離ではあるが、ギザ〳〵した山の連嶺がよく認められる。船が進むに從つて、今まで見えなかつた山も、東にも西にも見えて來たので、大陸の一部だといふ事が明かになつた。ロッス氏の手記に左の文句がある。

實に美しく晴れた夕方の空に、二つの大連嶺が萬古の雪を戴いてゐるのが望まれる。高さが七千呎から一千呎もあるかと思はれる……

更らに南進してポッシッション島（南緯七十一度五十六分）の火山島にして樹木のなきを見るや、氏は亦島の上にはペンギン鳥が群集し、我々が其の間を歩むうとすると、此處は我が家といふ顔付で、容赦なく我々の手や腕を啄く。幾千年積みに積んだ鳥糞は、一種の惡臭を放つて鼻を衝く。しかしこれを濠洲の農夫に持ち歸つたら、どんなに喜ぶであらうかといふ喜悦の情も起る

など書いてある。船が南航するにつれ、連嶺の高山は一萬二千呎から一萬四千呎位の高さに見えて來て、主なるものは全く火山だ事も明かになつた。エレブス山、テロル山とは、即ち船名を取つたものである。エレブス山は高さ一萬二千四百呎、頂上から數百呎さがると萬古の雪で鎖されてゐる、頂から絶えず噴煙してをる。この噴煙は、時には高さ千五百呎から二千呎位の大圓柱となつて立ち騰る事がある。

北極地方では、氷山の成因を夏季融解した流水の作用に歸してをるのであるが、南極には夏行つてみても大して流水も見えぬ。されど南極の氷山は、暴風の時に激浪之を碎き、それが流れ〳〵て出來るものであらうと認められた。

九

ボルヒグレビンクが、サウザーンクロッス號に乘つてロンドンを出帆したのは、一八九八年の八月で、翌

年の正月已に南緯六十五度四十四分に達した。此の船はロッス氏の航路から見ると、三十度ばかり東方の子午線を通つかたら、アデーア岬に到着した。此の岬の高さ三千六百七十呎ある事や海面上千呎位までの所までは地衣類が繁生し、ペンギン鳥の巣も其の邊まで營まれる事などは新しい發見で、岬の近海には藻類、水母、水蛇類等が棲息し、淡海には魚類の多くをる事なども明かになつた。而して更らにおもしろきはペンギン鳥の生活である。――ペンギンは一陽の來復と共に來るので、長く一列になつて氷の上を歩いてくる。其の一列には大概六十羽位もあるが、陸地に近くなると雄雌揃つて巣をつくる所をさがすに飛ぶ。巣が出來ると、なかに二つの卵を生んで孵化するまで一ヶ月間雄雌交々之を抱いてゐる。そして雛が生れると自由に飛ぶ事の出來るまでは養育する。……またこの鳥が南東に頭を向けた時は必ず暴風になる事は、晴雨計の作用と同じだといはれてゐる。

此の如くこの探検は、南極の動植物に就き少なからぬ新材料を提供した。

十

最近の南極探検の二大事業は、何れも英人によつて行はれた。一はスコット氏――今第二回の南極探検に赴いた人――で一はシャックルトン氏である。

スコット氏は、一九〇一年八月六日英國南岸ワイト島のコウエス港を發してニユージエーランドに着し、十一月二十八日更らに同地を發して、南極ヴイクトリアランドに向つたのである。スコット氏が探検家として定評ある事は、已に冒頭に述べてあるが、此の第一回の時にも、ロンドン地學協會々頭の送辭にも、氏を評して「熟練にして大膽なる航海者、科學部員の理想的指導者」といつてゐる。氏は先づヴイクトリアランドの海岸に沿ひ、從來大陸にあると思はれてゐたエレブス、テロルの二山が島にある事を確めた。上陸の後はヴイクトリアランドの内地に入り、今までわからなかつた其の高さが、大概一萬呎から一萬四千呎にある事をも明かにした。かく探検する事五十三日、海岸を去

る事百四十二哩の內地に來たから、一先づ引返してみると、もう夏で氷河が夥しく流れてをり中にはフエーラー氷河の如きは、世界唯一の大さがある。再び內地探檢をやつた時に、不幸にして斃れた人もあつたが、屈せずして內地の高原の地質の調査をもする事が出來た。

シャックルトンの探檢に至つては、一九〇七年より一九〇九年即ち昨年に亘り、兩極に於ける最近最大のものであらう。其の準備の如き二年間（十一人前）の食糧を備へ、從來の經驗上に基き橇や毛皮や、曳橇に用ふる馬や犬に至るまで周到なる準備をなし、乘組員も四百人の志願者中より精選して十一人、中に醫者地質學者生物學者美術家などがある。

氏はエレブス山に登つて、其の高さ一萬三千三百五十呎ある事を確め、其の火口には水蒸氣がすぐ氷結した珍らしい氷の噴氣孔ある事などを知つた。山を下つてから內地に南進し、氷河の事などもいろ〳〵觀察した。

* * * * *

兩極の廣漠たる氷原、肌を劈く寒氣、神秘的なる天象と之を踏み之を物ともせず之を研究する人類の努力とは全く自然と人力との奮鬪とも見る事が出來る。而して此の奮鬪が今度初めて我が同胞白瀨中尉によつて試みられるのである。我々は國民的元氣の發顯として、中尉の成功を祈つてをる。

讀者に謝す、去月中旬より病床に臥する事三旬、時日切迫して僅かに The Romanse of Polar exploration とロンドン地學雜誌、日本地學雜誌（山上氏「最近の南極探險」）などを材料として此稿を作る、請ふ諒せられよ。

後藤象二郎謀反の序幕

魏　呂　卿

一、怪傑の狙撃

明治英雄中の怪傑、後藤象二郎が其雄胸に滿溢せる策を縱横するの時機は達しぬ。

時は維れ、明治十四年十一月末、國會開設の詔勅の降下するや、政權爭奪の渦潮を故に避けたる風を裝ふて、一方同藩出身の板垣退助と提議し、義を全帝國に唱へて、天賦人權の伸張を主張し、一方緣族同藩の後進岩崎彌太郎と締約して、金權の位、能を占得すべく奔走せし彼、後藤象二郎は、是機を摑んて、笑ふて起ち、當時の英雄を渾て其徑六寸の掌上に翻弄し初めぬ。只管に事を好みて安坐し得ざる渠は、如何なる場合にも機を逸せず、陣の先頭に胄鎧を拂ふ工夫を回らし、設令其準備を缺くことあるも、一分一秒一瞬の躊躇なく、活潑なる其動作を逞ふするを常とす。

自信力強き、寧ろ過度に自信力強き渠は、赤裸々、猛炎狂瀾の中に投じ了り、克く敵中に味方を得るを目的として、數々成功したり。大英雄と稱すべきや將た或は狂的僥倖と稱すべきやは吾人之を知らず。

餓虎の餌を狙ふが如く烱眼を四方に爛かし、牙鳴る脣を强く嚙み、爪痕深く堅岩に印する程に怒り狂ひし渠は、野心强き明治政府在朝者の周章狼狽を瞥見するや、現在の勢力者を棄てゝ顧みず、將來に生命を有つ政治家に秋波を注げり。秋波と云ふも、渠の地位は、飽に病む少女の戀に非ずして、半ば脅迫の意を含みて、强制的に情を遂ぐる老妓のそれに髣髴たりき。斯くて渠は參議伊藤博文に白羽の矢を放ちぬ。當時伊藤博文は參議の列に伍し、內務に長官たりしと雖も、其權力は未だ大久保の後を襲ふに至らず、餘ある其智を持して、

演劇脚本の作者として、樂屋内に潜めるに過ぎず。木戸の沒後、渠の將來を洞觀せしは只後藤一人のみ。野心滿々たる伊藤も亦自己を知れる英雄の隻眼に感謝し熱烈に其心術に戀焦れ、或は深淵に誘はると忖度しつゝも、後藤と手を切る能はざりき。

薩派の領袖として、當時政權の中樞たりし參議兼開拓使長官、黒田淸隆は、幕府及び明治維新の風雲に際し、敗者の地位に立ちし各藩各地の俊豪と交善きを利し、一擧にして不動不拔の根基を据えんとせしも、餘りに單純率直なる渠は、先づ藩僚に於て、西鄕、大山、川村、松方の嫌ふ所となり、寺島、海江田、仁禮の先輩より賤められ、後進三島の輩より嘲られ、井上、山縣を魁とせる長州人は固より渠を斥けんとせしを以て渠は自然の勢佐賀の大隈と結び、西九州出身の首長たらんとせしも、江藤新平の死以來、副島前參議は渠に含む所容易に融解せず、事毎に渠を沮みぬ。渠了に走りて後藤象二郎と歡を締びぬ。狡猾なる後藤は、結ぶべき勢力として渠を見ず、利用すべき器具として、必要の程度に渠を迎へたりき。

後藤象二郎は廟堂に於て尙ほ一個の敵を有じたり。そは即ち大隈重信卿相結ぶべきか、相爭ふべきか。其方針を定めずして、彼は蹶起せり。

國會開設の詔勅と同時に、參議伊藤博文の元勳網維策により、後藤も入閣の勸誘を受けぬ。渠は言下に之を退け、尙且つ當時閣臣が蛇蝎視せる板垣退助と從來の提携運動を絶ち、其本意の所在を疑はしめぬ。衆咸く蹙眉の秋に渠一人笑へるなりき。

二、怪傑の希望

實際渠は尙ほ波瀾の大ならんを冀望せるなりき。

時勢の機運とは云へ、歐洲列國の史に見るが如き血の色彩なく、殆んど無雜作に發表されし憲法政治の宣言を見、渠は力負けの相撲を角したる感に囚れぬ。昨德川慶喜に對する大政奉還の献言、今は明治政府に對する民選議院設立の建議、實現の案外なる渠自身も驚愕せざる能はざりき。是の驚愕は、如何にするも喜悦を含まず、寧ろ悔恨を値せるものなりき。蹇によりて以

上の價格と色彩とを其事業に有せしめんは渠の本願なりしなり。本願は渠を驅つて靜坐に堪へざらしめぬ。懐に惱まざるも、計に困める渠は、自然に歎じて謂ひけらく、「漸々面白くなつて來た。が、千兩役者も相舞臺がなくちや、到底一人ぢや芝居をされぬ哩」と、渠は繆纒に苦める陸奥宗光を迢に想へるなりき。

渠の歎息は、時なりき。死兒の齡を算せずして、渠は直に其策に歩を進めぬ。

渠は、高知後進の俊英、谷重喜を招き、陰に宇内の大勢と帝國の現局とを說き、民權の伸張に勝利せる吾黨は、庶民一致の此秋に乘じ、須く征韓論の實行を爲すべきなり。西鄕、前原、江藤の失敗は、諸君が加はりて苦き經驗を嘗めしが如く、其の反對論國內に爆發せるを以てなり。宜しく其爆彈を國外に投ずべし。政府は、國家としての活動に逡巡せんも、個人、憂國の志士が海外に執る行動に對しては、祝して贊せんと。

慷慨の士、谷重喜は、言下に服理して、之を片岡健吉、林有造に謀る。固より林は贊し、數年前、陸軍中佐として、桂太郎と相伴ふて、歐洲を官命視察し來りし片岡健吉は、少思案の後、大に可し、必ず佛國に約すべし、彼佛國は、普佛戰爭の後に蹉ぎ、銳意して恢復を謀る所、方に淸佛戰爭の烽火上らんとせり。機運は即ち可しと。玆に於てか、林、片岡、谷の三士は、後藤の授くる所を守り、鯁岸なる板垣に語らず、植木枝盛、永田一二をして秘密に自由黨領袖の間に傳ふ所あらしめたり。誰か贊せざらん。

同時に、後藤象二郎は、元老院議官中島信行を說き落して、己が腹心に從はしめ、渠をして官海にある靑年有志を誘はしむ。曾てより渠と通じて、假に官途に席を置きし古澤滋首に來りて、直に大和の豪富土倉庄三郎の俠義に投じ、自由黨と主義を同ふして、一面政府に意を仄かせる一政社を起したり。是時、渠は元老院副議長河野敏鎌に一切を秘したりき。河野自身は、渠と氣脉を通じ、其腹心を握れりと自信せり。而も、狡猾なる後藤は、江藤の死以來、唯偵狗に渠を利用せしのみ。故を以て、河野は後藤が後進を紹き售れるを

患り、大隈參議と肝膽相照す約を締びて、辛く其地位を持しぬ。而して河野の憤慨は、一朝にして解けず、陰に自由黨内の勇士大石正己、末廣重恭、馬場辰猪を導き陷れ、後年自由黨内に悲むべき內訌を醸さしめたりき。想へば、英雄なる者は、狹小豆の如き度量に私權爭奪の策を弄ぶ者、然らずんば猜忌の爲めに恩に背きて顧みざる者、吾人は明治英雄の一般が然るを見る。

自由黨の志士快擧に應ずるや、後藤は、商業視察に托して、女婿宮地茂春を香港に派遣し、樽井藤吉を上海に游ばしめ、又頭山、進藤を領袖とせる福岡の壯士を次々に南清に赴かしむ、宗像等九州出身の群勇咸く支那に入れり。渠等壯士は、水滸傳的豪猛の氣に驅られ、旋乾轉坤の快事爲すべしとなし、故なく悅喜しぬ。實に清韓に對する帝國志士の活動は、詭策奇を好む後藤の發案に動かされたる眞面目なる先輩の挺身に胚胎せるなりき。

三、怪傑の歷訪

斯くて突然後藤は伊藤參議を訪ひぬ。

參議伊藤博文は、船越衛、河瀨眞孝、齋藤利行、林清康を通じて、後藤の來り訪ふを半は喜び半ば畏れて、日に夜に待ちぬ。政界轉局、元勳和合の前觸をなして、會見を求めし後藤は席上何事を談じ出せしか。

渠は、大手を擴く膝の上に張り、內懷を啓け、『拙者は謀叛人だが、貴公の樣に、遣り損ひをして、白を切つて、面を被つて居ない』と、冒頭鋭く、抽象的に伊藤を挫き、薩を殪さんが爲に、前原の叛を知りつゝ、其前日木戸と連署して、前原參議復職を主張し、大久保の看破する所となれる失敗を責め、更に長派が會奸と嫌厭せる幕府側と結托せる非を說き、今日の勢は、政權の藩閥を爭ふべきに非ず、宜しく國內團結して外に對すべく、今に於て全國士氣の憤慨を外部に洩らすなくば、內に勃發して不測の禍生ぜんを說けり。伊藤は、世界の情勢に烱眼を有する者、今や達觀的大勢を巧妙に論述せる後藤に訓へられ、其手を執り額に戴きて、其策を授けんことを要めぬ。後藤は、笑ふて急に應ぜず、良久時して象二郞既に其計を籌せりと、告ぐ

るに佛國と結ぶ對淸問題を提議し、淸佛葛藤の機に乘じ、朝鮮を吾略取し終らん、事端世界問題となるは必せるも、吾は憂へず、蓋し歐洲の天地は佛國中心となるが故に、波瀾決して吾に及ばず、吾は唯勞せずして功を收むるのみと。伊藤は勿論立所に賛し、以て帝國前途の好開運なりと謂へり。而して渠は直に露國、英、獨駐在使臣に命を傳へて、淸佛葛藤に對する駐在國の動靜を探らしめぬ。

後藤は又伊藤に議して、參議中の先輩、寺島、山縣、大木を操縱せしめ、彼自身は井上、黑田、西鄉に衝らんことを約せり。以來、伊藤は後藤を却け得ざりき。

井上に會しては、渠後藤は、井上が藤田傳三郎と結託せる收利會社に反抗して、岩崎と相結べる昨日の非を謝し、決鬪の瘢痕尙ほ深く新なる怨を忘れ、天下の橫着者は貴公と吾との二人なりと、井上の肩を叩き、大隈と約する深きを裂かんが爲に、奇兵を放ちて、井上が長派の英雄、山縣、山田等を畏憚する短に乘じ、勢を植うるは鄉藩を先にすべし、君は宜しく武辨にして謹飭、然らずんば嚴厲にして端正を衒ふ長人の好を假に模すべし說きぬ。言々句々首肯せる井上は、瞑想少時の後、拍手して計上の上と案を叩き、言下に白根多助、上野景範、花房義質、田中芳男を召集して自家の立脚を全ふすべきを議しぬ。井上は、修史館次長長松幹と諠譁し、渠に謀りて修史、飜譯に奉職せる學者輩を幕下に糾合せん策を定め、品川彌二郎を巧に激厲して、山縣、三好、三浦等長派軍人の心情を迎へしめぬ。是計は即ち井上が鹿鳴館時代洋化の風に醉ひつゝ、保守自治黨なる頑固主義の流を丸山作樂の手に結ばしめ世人をして渠の行動の無意味なる意味を疑惑せしめしなり。而も井上は、大隈を孤立せしめん後藤の計にかゝり、首尾善く欺かれ、一生懸命に活動し、後其の空なるを曉るや、大に後藤を憤りて終生忘れざる怨を抱きたり後藤は直に其魂膽を忘れ去りぬ。斯點は、權の爲に利を謀る後藤と利の爲に權を弄する井上との色彩異る所なり。洵に井上は、後藤の言を信じて、是際に渠が刑餘の汚を被らんとせし商利の關係を無條件に岩

崎の手に讓與せしなりき。後日悔ひ怒れる渠は三井と頑執の握手を爲し三菱に對抗頡頏し來る。

井上に成功するや、後藤は黑田を尋ね、民權勃興は意外なるを歎き、自己は斯ゝる極度の民權を希望せざりき、今にして少しく壓抑するなくんばと、政府の干涉を勸說し、專制を好む薩派の爵々を唆したり。其智なくして其實を得んと、大久保の死以來、殆んど狂せんばかりに苦心せる黑田は、衰へたる薩派の勢力を代表して、露骨に長派放逐を案出し、大山巖を警視總長の地位に据え、頑たる渠を扶助するに川路、安藤を登庸し、更に蠻勇の將三島縣令を股肱として、政黨退治及び長派攻擊に着手せり。此計策の波瀾は、薩派の描ける井上の贋札事件となり、長派の煽動せる開拓使收賄事件となれり。

尙ほ後藤狡爺の眼に映じたる英雄一人ありき。渠は、明治六年、臺灣の英雄として、且つ大西鄕の代理者として、政府の重鎭に位し、故なく畏怖されし偶像の本體、西鄕從道なりき。渠は、多く理を云はず、偶々諧譃を弄して人の膽を奪ふ。後年、後藤が、大同團結の首領として入閣し、責任聯帶內閣論を主張し、意氣冲天の慨を爲すや、默して後藤を抱上げ、首相の椅子に据え、熟視一番、呵々哄笑して曰く、『未だ貫目が輕い』と、一擊下に後藤の野心を破碎し了りぬ。是時も、渠は、『本統にやりますか、後藤さん、やるなら、公明：……』と、言を遮り、後藤は、『なに、唯由井正雪を眞似るのさ』と、空に嘯き、『問題を正面に進めるは愚劣です、一網に諸君が嫌つてる連中を刈り盡して、結局拙者が切腹する迄です』と、膝を進めて、渠を見詰めぬ。西鄕は股を撫し、天を仰ぎて、『愉快でせう。が、エ、マアッと、俺共は傍觀して居たら、役が濟むでせう。お奮ひなさい』と、言を轉じて、新柳に於ける攀花折柳の艶を語りぬ。渠は存外に皮肉なりき。翌日、內閣に出頭し、大隈參議を揶揄し、『大隈さん、貴君は智慧者だが、柔術に小股すくひの法のあることを御存か、また轉身の傳と云ふて、却て敵の虛に急突する法のあるを御存か』と、一言亦他を言はざりき。大隈は其意

を解せず、單に、、、と笑返せしのみなりしが、間もなく伊藤、井上、黑田が聯合して、自己に反對し來るを見るや、憮然として嘆息し、『流石は大西鄕の弟だ』と褒め稱へぬ。

四、怪傑の擲彈

在朝元勳を籠絡し終り、民間志士を鞭撻し終りし後藤象二郎は、樽井藤吉、谷重喜、宮地茂春等をして香港に於て、クルベー提督と協約せしめぬ。約の主なる點は

一、佛國の東洋艦隊を支那に集中すること
二、日本の壯士先づ突入して支那官衙に爆彈を投ずること、
三、是爭端に乘じ保護の名の下に佛軍上陸のこと、
四、同時に日本の志士は朝鮮京城を乘取ること、
五、直に日佛提携の宣言を爲して列國に同意を求むること、
六、日本は朝鮮を獲取し佛國は上海外二箇所を支那海岸に割取すること、

に在りき。同時に、後藤は吉田正春、中江篤介、大井憲太郎をして、東京駐在佛國公使ウエッキーに談判せしむ。其條項は、上記の外に、佛國より壹百萬フランクを後藤以下志士の手に渡し、淸韓に於ける運動の原油たらしむる項を加ふ。佛公使直に應じ、クレマンソも打電し來りて、其計を喜賀す。ボアゾナード、ジブスケも亦後藤の帷幄に參し、誠心日佛同盟の成功に盡力しぬ。ボアゾナードは、是機に於て、故國に於ける帝政、王政、共和政の三派の嫉視を和合せしめ、國力發展の端を得べしと信じたるなり。ジブスケの如きは一隊の志士に將たらんとさへ提言しぬ。又渠等は京城滯在の宣敎師カンに通じて京城の動靜を消息せしめぬ。

後藤象二郎は、玆に於て、板垣に其實を明かし、土佐藩勢力の復活を喜びぬ。寧ろ愚直に近き板垣は爭て反對すべき、固く伊藤を信じて己に秘せしを怨みたりき。而も渠は直に目的遂行に走りぬ。

時に策士藤田一郎あり、渠は後藤伯以上に狡猾、許

の上は敵の心を衝くにありとなし、飄然短髮して、北京に游び、密書と稱する僞作文書を携え、李鴻章を訪ふて、非常の劃策を講じぬ。戰國策士の風を學べる渠は巧に李鴻章一派を罠にかけ、

一、東洋合盟
二、清國の排外政策
三、藤田及び其黨の清國歸化
四、藤田の大官登庸
五、南洋に於ける分割
六、日清交婚

を密約したり。事端は英國間牒の探知する所となり、英清交渉問題を惹起し來り、李鴻章は非常に苦悶しぬ。藤田の策は唯佛國の提携を秘密にし、列國の注意を斯點以外に轉ぜしむる單純なる目的に出しなるも、清國の爲には非常の紛爭を内外に生ずる因となりたりしなり。

後藤象二郎は、倘ほ藤田一郎の策を用ゐ、慷慨の氣に勝てる陸軍士官學校生徒を挑發し、小池、菱川の諸をして脱校自由黨に來り加盟せしむ。巨人荒尾精も亦當時の氣に感電せる一人、渠は遂に清國に日本人の天地を拓ける祖となれり。

五、怪傑の微笑

後藤の奔走に依りて、民心一轉を確信せし在朝一般は大に輿論に媚從せんとせる態度を一變しぬ。渠等は大斧を庶民の頭上に閃かさんとしたり。

獨り參議大隈は談議の外に卻けられたり。是固より後藤の策する所。後藤は、大隈の才を認め、而も頤使するには卻て頤使さるならんと思ひ、且つ伊藤が眼上の瘤と大隈を嫌ふを知り、渠を權力圈外に放逐せんと企てたり。而して其策は、露骨大膽に、突急的なりき。渠は、薩長人に敎ふるに郷藩の勢力を團ふするを以てして、稍々分解せんとしつる閥族籠城を一層堅固ならしめ、自然に佐賀出身の大隈をして孤立の境に立たしめ悶々遂に憤怒せしめぬ。爲に大隈は桂冠して野に下り、不平官吏を網羅して、改進黨を作り、結社的勢團を以て、政府を强要する自由黨の如くならんとせり。

渠は、主義の爭議は兎に角として、對政府問題に至りては、自由黨と相提携せんとしぬ。而も自由黨に應ぜず、敵として過せり。

自由、改進兩黨は意思の疏通を缺き、爲に軋轢しき、政府は益々暴慢の壓を加ふるに好都合の機會に際せるなり。

後藤は微笑せり。渠は更に板垣の刺客難を見て微笑の噐を深くせり。而して、彼は伊藤と密約するに板垣及び自己の入閣を以てし、且つ大隈をも加へ、聖勅の降詔を乞奏して、所謂元動網羅、擧國對外の活動を試み、豪放なる其膽の量を檢せんとしぬ。是を故後藤伯謀叛の序幕として萬丈の波瀾明治元勳の間に掀るを見る。

原始的言語の新研究

青柳有美

▲古い物は同じ　今日でこそ西洋人であるとか、日本人であるとか、色々の區別があり、顏や膚の色が白ろかッたり黒ろかッたりするが源を糺せば皆な同じ溪川の水で、今日のやうな甚しい差別のあッたものでは無い。顏の色や膚の色も、こんなに異らず、同く木の葉を衣にし、同く穴の中に住んでたものだらう。随て、極々古るい野蠻時代に用ひた器具なぞは、今日世界何れの邦から堀り出されるものでも、殆んど似たり寄ッたりで、餘り大した違ひが無い。例令へば、矢の根石のやうなものとか、素焼の甕のやうなものは、日本の古墳から出るものでも、歐米に於ける太古の遺跡から出るものでも、今日の器具が洋の東西によりて其趣を異にする程の、大したる差が無いのだ。皆な殆んど同じである。これから押して行くと人類が此の地球上に現はれたばかりの原始時代は素より言ふまでも無く、文明の今日の如く進歩せざりし太古蒙昧の時代に於ては、世界何れの處にありし人種も其風俗習慣等が又殆んど同一て、各人種の間に共通の點が頗る多かッた事と察せられる。

▲言葉の共通　言葉は人類の文明に最も關係ある要素の一つで、之れ有るが爲に人々互に各自の智識感情意志を交換し、文明も進步發達すれば、社會も面白く圓滑に運轉し組織せられて行くのであるが、今日の世界では、此の言葉が到る處に相違して、日本人は歐洲人の言葉を解せず、歐洲人は日本の言葉の意が解らず、世界に於ける言葉の系統が、色々に區別せられ、印度歐羅巴統語とか、テウレニアン統語とかいふものになり、甚しきに至ると、同じ日本國内でも薩摩人は奥州人の言葉を解せず、奥州人は又薩摩隼人の言葉が解らぬほどであるが、これとて、矢張源を質せば同じ淺川の水で、世界到る處の人種も、太古野蠻蒙昧の時代にありては、必ず同じやうな言葉を語り、同じやうな口の動き方をして居たものに相違無い。人類の用ひた古い々々殆んど神代(かみよ)に近い時代の言葉は、その器具や風俗習慣の殆んど同一共通であッたやうに、矢張世界中到るところ同一で、又共通であッたらふ。されば、今日世界に行はるゝ各國の言葉を其語源に遡りて研究すれば、矢張、同一の出發點に達する事になるべき筈のものである。十九世紀の終に於て、米國の語學者のホヰツトニーや英國の言語學者マクスミユーレルなどが、殊に是等の事に趣味を持ッて色々研究したが、其結果是れまで不明であッた語源が隨分明瞭になッて來たのである。

▲手振足振　今日の世界では、智識感情意志といふやうなものは、皆な言葉を媒介にして各自に交換するのであるが、其言葉が各國殆んど皆な異ッてるので、外國人同志では、言葉によつて此の智識感情意志の交換を行ふ事が中々に六ケしい。然し、今日でも萬國共通ともいふべき一種の言葉がある。それは、エスペラント語でも何でも無い、手振によりてする所謂身振である。如何に言葉の通ぜぬ外國に於ても、手振足振身振だけは通ずる。これによりて、先方に我が意志や感情を通ずる事が出來、先方でも又之を讀んで理解して呉れる。臺灣の生蕃でも、身振でさへ行れば、歐洲人が之を見て共意志のある處を覺り、生蕃人も西洋人の身振の意味は矢張讀まれる。人類が此の地球上に現れて、智識や感情や意志の交換をする爲に用ひた最初の言葉は、此の身振なのだ。身振は言葉の前の言葉ともいふべきものである。つまり、身振は無言の言葉であるのだ。然し、身振のみでは完全に我が思ふところや感ずる處乃至は知ッてる處を、完全に先方に通ずることが出來ぬので、人類は文明の稍々進步すると共に、聲のある言葉を發明するやうになッたのである。

▲言葉の源　人類に言葉の無いうちでも、聲だけは有ッたものである。啞や聾には言葉が無い。然し、聲はある。猿なぞにも言葉は無いが矢張聲だけがありて、而も其の聲が廿八種あるとの事だ、扨又、此の猿の發する廿八種の聲は、七年間も既に猿語專門研究の爲め阿弗利加内地を旅行中なる米國ヴァーヂニア大學教授ガーナー氏が去る七月十六日同大陸海岸に出てゝ談れる處に依れば、悉く喜怒哀樂を表すのに用ひらるゝものなそうである。赤ン坊にも言葉は無い、然し矢張り又聲があるし。て、其の赤ン坊の聲なるものは、猿に等しく喜怒哀樂を表す爲に發せらるゝものである。總じて人類は何事に依らず、感情を激しく刺戟せられ

ると、自然に自ら聲を發することになる。猿や赤ン坊さへ、感情が動いて喜怒哀樂の情を起した時には、聲を發するのであるとしたら、如何に言葉の無い太古蒙昧の原始時代に近かい時の人類でも、感情を激しく刺戟せられて、驚いたり恐れたり悲んだり悦んだりした時には、必ず聲を發したるに相違無い。此く感情の激して發した時の聲が、即ち今日の多くの言葉の源になつて居る。人類學では、斯る感情の激した時に思はず發する聲を叫聲と稱ぶのであるが、つまり、今日の言葉の多くは此の叫聲が色々に組み集まりて出來たものである。

▲五十音は何か　猿の聲には廿八種あるといふが、日本人種の語音には、先づ「ン」まで入れると、五十一種あるものとして居る。この五十音乃至五十一音は、一體全體何であるかと言ふに、其大部分は感情の激した時に發する叫聲の種類であるのだ。假令へば、感心した時に發する「阿ア」はア行のアて、怒ッた時に發する「喝ッ」はカ行のカて、驚いた時に發する「おー」はア行のオてあるやうなものだ。五十音のうちでも殊に母音になッて居るア行の五音は、感情の激しく刺戟せられて高まッた際に、最も多く用ひらるゝ聲である。故に、アイウエオが母音になッてるのである。此の點も萬國共通らしく、歐州アルハベットの母音が矢張a、e、i、o、uである。此のア行ガ音の外にも、「なア」「はア」「まア」「やア」「れー」「吽(うん)」「ほー」「さア」「喝(か)ッ」などの音が、高まッた感情を表す爲に用ひられて居るのは、今日に於ても日々耳にする處である。斯る叫聲は人類が皆な自然に期せずして發する處の音故、世界何れの人種に就て見るも、皆な同じである。隨て、是等の叫聲は萬國共通て、何れの國語の中にもあれば、何れの人種によりても容易に理解せられる。世界にある言葉の多くは、皆な此の叫聲を寄せたもので、其の組合せ方の差によりて國語の差が生じたのである。

▲「靑」の語源　人類の文明が複雜になりてから新に出來た言葉の語源は、既に其の前から存在して居る言葉を寄せたり約めたり變化さしたりして作ッたものが多いので、之を分析して根本の叫聲まで持ッて行くのには、却々骨が折れて困難であるが、天地開闢以來あッたものや、人類の未だ野蠻蒙昧なりし神代に近かい時代から有ッたと思はれるやうな物に命ぜられた名稱とか乃至は之を形容するに用ひた言葉などは、神代に近かい時代から矢張存在して今日に至ッたもの故、其語源の叫聲にある事が頗る容易に知れる。假令へば「靑」といふ言葉である。

草木は神代に近い時代にもあッたもので、今日の如くに靑々して居たに相違無い。天空は人類が野蠻蒙昧であッた太古の頃にも矢張靑くあッたのである。それに又、太古に棲息した人類の遺品などに就て見ても赤と共に靑の繪具だけは極々古くからあッたものと思はれる。神武大帝若くは其以前より、日本國には曲玉といふものがありて、之を裝身具に用ひて居たが、其色は矢張靑である。我々の祖先が、灰色の土中を堀りて靑い曲玉の石を見つけたり、天を仰いで靑い空を眺めたり、森林の靑々として綠滴るやうなのに目が留つたりした時には、定めし自然の美に打たれて感情を激し、「あア」と感嘆し「おー」と驚いたことだらふ。依て、こ

の二つの叫聲を寄せて青い物を『アオ』と呼ぶことになり、『アオ』なる國語が出來たに相違無い。

▲『朝』の語源　『サア』なる叫聲は『さア來い』なぞといふ時に用ひらるゝのでも知れる如く、何物かを迎へんとする場合に感情が昂奮して發する人類自然の聲である。我々の祖先が、暗黑のうちに一夜を過ごして旭の照り輝くのを見た時には、定めし其美しさに感激して『あア』と嘆じ之を悦ぶの餘り思はず知らず『さア』と懸聲をしたものだらふ。以來、此の二つの叫聲たる『あア』と『さア』とを合せて、朝を『アサ』と名くるに至り、『アサ』といふ言葉が出來たものと想はれる。

▲『雨』の語源　今まで晴天であッたものが、俄に掻き曇りて、沛然と雨が降ッて來たら、我々の蒙昧野蠻なる祖先は、定めし先づ『あア』と驚きの聲を發したことだらふ。又、悲しくッて泣きそうになる時には、『めー〱泣く』といふ熟語のある程で、『めー』なる嘆聲を發するものである。されば、雨にづぶ濡れとなつた我々の祖先は、何と無く氣持の惡るさに、『あア』と驚くと共に、續いて『めー』と悲みの聲を漏らしたに相違無い、依て、此の『あア』『めー』なる二つの叫聲を組み合せたる『アメ』を雨の名稱とするに至り『アメ』なる言葉が出來たものと思はれる。

▲『兄』と『姉』の語源　現今の日本人は『にー』なる間投詞を用ひぬやうであるが、支那人は盛に此の『にー』なる音を發し、支那語では『貴君』といふ意味の處に『儞』の文字を用ひ『にー』と發音し、切りに『にー々々』とやる。これは親愛の情が動いた時に自然に發せらるゝ叫聲である

今でこそ日本人は此の叫聲を發しはせ無いが、古い々々我々の祖先の時代には、矢張支那人の如く親愛の意を表する爲めに、『にー』なる聲を發したものだらふ。隨て兄を見た時には、先づ『あア』と感嘆し、續て『にー』と叫び親愛の情を發露したので、此の二つの叫聲を合せて兄を『アニ』と稱ぶに至りて、玆に『アニ』なる言葉の出來たのは、必ずしも察するに難からずである。『ねー』なる聲は今日でも『あのネー』なぞの場合に於ける如く、親しい間柄に於て東京人の盛に用ひるところであるが、姉に對する感情の發動も兄に對する感情の發動も殆んど同一故、同じ言葉を以て兩者の名稱とするも差支なけれど、男女の性を區別する爲め、既に男性の同胞年長者を稱ぶに『アニ』を以しあれば、之との混雜を防ぐ爲め、『にー』と同一感情の發動した際に發せらるゝ『ねー』なる叫聲を、女性の同胞年長者を呼ぶ場合に應用し、『あア』と『ねー』との二叫聲を合せ『アネ』なる言葉を作ッたものと察せられる。

▲『尾』の語源　餘りアの音の附いた例ばかりでは、面白く無いから一つ二つオの音の例を擧げると、原始時代の人類には、或は尾があッたかも知れぬが、最う野蠻人と稱ばるゝ程度の文明の頃には尾といふものが無くなッて居る。然るに、不思議なるかな、獸を見ると、尻の邊から人間には無い何か妙なものが一本ブラ〱下つて居る。我々の祖先は此の妙な尻の邊にブラ〱して居るものを見た時には。定めし驚いて、思はず知らず『おー』と叫び出したことゝ思ふ。それ以來此の叫聲の『おー』を取りて尾を表す爲に『オ』なる言葉を用ひる事になッたに相違無い。

▲『親』の語源　親は權威のあるもので、小供等は唯々其の威嚴に敬意を表して『おー』と感嘆し、その智慮分別の勝れたるを見ては『やー』と驚くばかりてある。是に於てか、小供等が親に對して發する此の『おー』と『やー』との驚嘆の叫びが、遂に『オヤ』なる言葉を作りて、親を表すことになッたもので、間投詞の『オヤッ！』と語源は同じてある。

▲『矢』の語源　『やー』なる間投詞は、是又感情の高まッた時に、人類が自然に發する叫聲て、今日でも『やー大變』なぞと、聊か變ッた事の時に用ひて居る。獨逸語ては『ヤー』は『ハイ』といふやうな意味の言葉てあるが、獨逸人は盛に此の『ヤー』を『ヤー々々』と振り廻す。これによりても『やー』なる言は、人類の感情が何かに刺戟せられた時に自然に發せらる聲であるといふ事が知れるのだが、我々の祖先が、尙ほ神代に近い野蠻蒙昧の時代に、日々山野を跋渉して狩獵を是れ事としつゝある際矢がブーンと一聲弓弦を離れて飛び、目指す獸の胴中にブッリと的中して突き刺さるゝのを見たら、今日ならば『やー占めた』といふ處であるがまだ野蠻蒙昧の時代て、『占めた』といふ言葉が無く、唯自然の叫聲を發し得たるのみの事故、思はず知らず『やー……やー』とのみ叫んだに相違無い。矢のことを『ヤ』といふ言葉で表すのは、斯る場合に發した大叫聲の『やー』が源てある。

▲『山』の語源　芭蕉翁が日本三景の一なる松島に來られた時には、八百八島の美しいのに感じて『あゝ松島や／＼』との嘆を發せらたとの事てあるが、今日でも富士山の白扇を倒にしたやうになッて東海の天に聳ッてるのを見ると、誰でも感嘆の情を禁じ得無いのである。況んや、我々の野蠻蒙昧なる祖先が、平々坦々たる平原の間に住んで居て、急に地平線上に兀として高山の聳えて居るのを見た時には、一種不可思議の感に打たれ、必ずや大に驚き『やー』と一聲高く叫んて感じ入り、續いて『まー』と嘆稱の聲を發したに相違無い。斯く山を見て感歎の餘りに發した叫聲の『やー』と『まー』とを結び合せたものが、卽ち今日の『ヤマ』なる言葉で、之を要するに『ヤマ』の語源も、矢張、叫聲にありといふを得るのてある。

▲其他の語源　其他支那人が好んで用ひる『好(ハオ)』、英語の How(ハオ) See(シイ) 又佛蘭西語の Oui(ウヰ) なぞが、皆な其語源の叫聲にある事を證明するのは、決して難事では無い。殊に臺灣の蕃語のやうな未だ太古の野蠻蒙昧の境涯を去る事遠からぬ人種の間に行はるゝ言葉を研究したら、叫聲に近かいのが頗る多い事と思ふ。此くの如くにして、日本語は申すまでもなく世界の多くの言葉は、其語源に遡ると、叫聲を組み合せたものといふ事になるが、世界の有りと有らゆる總ての言葉は、悉く皆な其語源が叫聲にありとは言へぬ。叫聲の外に尙ほ他に一つ人類の用ふる言葉の源になッたものがある隨て我が五十音の全部も叫聲の音符のみであるとは言へぬのだ。

▲模音の應用　太古の人類は、叫聲を以て直に之を言葉とせるのみならず、或る作用によりて、若くは又或る作業を營むことになりて、或る物體の發する音聲を模し、之を其の作用若くは物體を表示する言葉に

したるものである。此の種の言葉を人類學者に稱して模音語といふのであるが、五十音のうちには、此の模音も交りて居るもの丶如くに思はれる。拉典語で笛の事を『ヒパ』と云ふたり、馬來語では『ヒヒ』と名づけたり、日本語でも子供は之を『ヒーヒー』と稱ふのは、笛の發する音響を模したものである。又日本語で子供は猫を稱して『ミヤンオ』といふ、が支那の北京官話音でも、猫は『ミヤオ』で、佛蘭西語でも同じく『メヤウ』である。皆な猫の發する音聲を模して出來た模音語に外ならぬ。烏を日本の子供は『カーカー』と云ひ、梵語でも『カーカ』と稱ふ。此くして古い源に遡ると、矢張又言葉が萬國共通になる。扨又、日本語で小供が腹を『ポンポン』と稱するのも、腹を打ちとポンポンと音がするからの事で漢語の『滔々』とか『颯々』とかが、水や風の、或る作業を營む時に發する音響を模して作つた言葉であることは、今更申すまでも無い。總て野蠻時代太古民族の心的智能作用は、小兒に彷彿たるものであるとすれば、人類が文明の初期時代に工夫して作りあげた言語のうちに、模音語のあるべきは、當然の事である。隨て、我が國語のうちにも、今日になりては、一寸その語源が模音にあるや否やを判明するに苦むやうな言語で、其實、矢張、模音を語源とするものが少く無い。縁喜を祝ふ藝者や小供がお茶やお湯を『ブブ』といふのは、湯は熱いものなので、飲む前には、之を多少冷却さする必要から、呼息をプープーと、其の湯なり茶なりに吹きかけるが常故、その呼息の音響を模して作られたる言語を用ひたるに過ぎぬのであるが、然しこんなものは頗る簡單で、其語源の模音にあるを知る事が出來る。然し、往々にして之を發見する事の頗る困難なるものがある。

▲『泥溝（ドブ）』の語源　泥溝即ちドブは、惡水や汚穢物の流れて居る溝を呼ぶ言葉である。このドブが、矢張模音語であるのだが、一寸考へた丈けでは、誰しもそれと氣が附かぬ。然し、模音語たるには相違無い。ドブは惡水や汚穢物の流れる溝故、其處を流れて居る水の中には、泥であるとか腐敗物であるとかゞ混じて居て、自然、溪川のやうな譯合に行かぬ。淸水に非ずして半固形體半流動體のものになる。今假りに、其のドブを流れて居る汚い半固形體の上に、小さな石でも落して見るが可い何んな音響を發するか。必ずや『ドブツ』と陰に籠つた音を發して、落下した石は、幾速力を持しつ丶其の半固形汚穢物の中に沈んで行く。泥溝のドブに物を投ずると『ドブツ』なる音響を發するところより、茲にこの音を模して泥溝の名稱とし、初めのうちは、『ドフ』と稱んだものが、長いうちに段々訛りて、今の『ドブ』といふ言葉になつたものに相違あるまい。

▲『蕪』及び『株』の語源　木の切り株も又野菜の蕪も、其形狀は殆んど同じで、地面の中に埋りて居る部分は、丸く太つたものであるが今、力を込めて之を引拔かうとすると、それが地面を離る丶際に、『カプツ』なる音響を發する。是に於てか、太古蒙昧の時代に於ける祖先は、この音響を模して、『カプ』を蕪若くは株を表示する言葉としたものである。それが年代の經過すると共に轉訛して、『カフ』より更に『カブ』になつたに違い無いのだが、文明が進歩して來ると人間も贅澤になり、株の

ことも『カブ』、蕪のことも『カブ』では野菜やら切り株やら判別がつきかぬるといふので、折から新輸入の洋語を早速利用し、野菜の『カブ』には特に之を木の切り株と區別する爲に、『カブ』の下に『蘿』なる音を付し『カブラ』なる新語を作るに至つたものと思はれる。

▲『焰』の語源　支那語の北京官話では、『火』を『ホー』と讀むが、日本語でも太古には火の事を『ホー』と稱んだもので、其の證據には天彦火瓊々杵尊とか、天彦火々出見尊とかいふ神々樣たちの名がある。火を日輪に結びつけて『ヒ』と稱ぶやうになつたのは、寧ろ後代のことだらふ。火を『ホー』、之を約めて『ホ』といふやうになり、何故斯る言葉が出來しものかと考へて見ると、木に熱を與へて之を燃し、依りて以て火を作ると、其周圍の空氣は稀薄になる故、之を塡充せんとして高壓の空氣が玆に侵入して來る故、火の燃ゆる際には、必ず『ホー』なる音響を發する事になり、火は『ホーヽヽ』と音して燃ゆるもので、俗語には『ぼッと燃え上る』などの熟語がある位のものだ。是に於てか、此の『ホー』なる音響を模して言葉とし、火を『ホー』と稱び、それが更に約せられて『ホ』になつたものに相違無い。『焰』は『ホノー』と發音せらるゝところから、今の人々は其模音語たるに氣づかぬが、『ホノー』は『ホのホ』の轉訛せるものに過ぎぬ天川屋儀兵衛や幡隨院長兵衛や花川戸の助六のやうな伊達師は、男のうちでも珍らしい男らしい男故、人は稱して之を男中の男と頌え、又玄妙不可思議の極を名けて玄之又玄といふが、焰が火のうちでも出色の火、火らしい火であるので、つまり、ホ中のホであるから『ホのホ』なる言葉を作りて、火焰を表示することにしたるものだらふ。然らば、一聞したばかりでは、到底模音語だと思へぬやうな『ホノホ』も、又語源が模音にあることが知れるでは無いか。こんな次第で、思ひも寄らぬ言葉の語源が隨分模音たるの場合が少くあるまい。

▲『ドロンケン』の語源　『ドロンケン』は是れでも日本語で、泥醉の狀態を形容する言葉であるが、古代英語で書かれたチョウサーの『カンターベリー物語』のうちにも、之と同一なる drunken なる言葉がありて、矢張泥醉の狀態を形容するに用ひられて居る。この事實は、太古蒙昧の人類は、何れの人種を問はず、模音を共用語とした例證になるのだが、『ドロンケン』は『ドロンク』と『エン』との二つの言葉の組み合せより成れるもので、『ドロンク』は多量の飲料物が咽喉を通過して食道に落ち込む時に發する音響である。是に於てか、飲料物を多量に攝取した場合を表示する言葉として、この音響の『ドロンク』を模したる音を用ひるに至り、英語では『ドロンク』の變化せる drink を『飲む』といふ意味の言葉にさへして居るほどだ。『エン』は獨逸語でも英語でも將た又日本語でも、語尾を變化する必用の場合に用ひる音故、差して重く取りて考慮するまでも無い。つまり、『ドロンケン』の語源も模音だといふ事になる。

▲『鈴』の語源　『鈴』の語源が模音たることは、說明するまでも無いが、英語でも『鳴る』ことを ring なる言葉で表示して居る。この場合の ng 即ち『グ』は、『ドロンク』のク即ち k と同一で、唯僅にン即ち n の音尾の

響を示すに過ぎぬもの故、大體から言へば、英語で『鳴る』ことを『リン』なる言葉で表はして居るものといふも不可無く、又玆にも日本語と英語とが共通の出發點にあることが明かになる。畢竟、これといふのも、矢張、太古蒙昧の時代の人類は、何れの邦にありても、模音を其の言葉として使用したからのことなのだ。更に、『環(くわん)』なる言葉があるが、環(わ)の事を英語では『鳴る』と同一音の ring 即ち『リング』を以て表示して居るこれも、其の語源が『環(くわん)』と等しく模音にある。現に軍樂隊などの使用する樂器のうちに三角環狀のトライアングルといふものがあるほどで、環は之を擊つか乃至は地上に落してもすると、リングとかクワンとかいッたやうな音響を發する。この音響が、矢張模せられて言葉となり、環を稱ぶに日本では『クワン』英語では『リング』となッたものだらうが、『輪(りん)』になると、これは英語の『リング』と全然同一語音の同一意語である。何れにしても環が發する音響を模した模音である。

▲「時」の語源　英語國の小兒は、時計を稱して "tick-tack" といふが、これは、時計の振子の發する音響から來た模音の言葉となつたものである。日本語の『トキ』も、今俄に判然たる說明を與ふる事は出來ぬが、矢張英語の『チック、タック』と、語源の系統が同じで、時を報ずる爲に太古の時代に鳴らした擊柝か何かの音響を模して作られた模音語の轉訛したるものだらう。何物かを鳴らすと『ト……キー』なぞの音響は如何にも出そうに思はれる。

▲「赤」の語源　『赤』の語源は稍々複雜で、これは、叫聲と模音との組合せによりて構成せられたるものである。人類學の結論に據れば、野蠻蒙昧な時代に於ける太古の人類が最初に發見した繪の具は、赤であるとの事だが、此の繪具を初めて發見し、之れを顏に塗るとか素燒の甕に塗るとかして見た時には、其人は如何にも其の色の鮮なるに驚き、先づ不取敢『あー』と感嘆の叫聲を發したに相違無い。然し、『あー』だけでは餘り多くの『あー』が有り過ぎて、その言葉を以て直に『赤』を表示する譯には行かぬ。然るに、人間が憤慨したり憤怒したりして、感情の激した爲に『喝ッ……喝ッ』と叫聲を發する時には、其人の顏の色が、自然、赫ッと赤くなりて、恰も奈良東大寺法華堂の秘佛執金剛神のやうな顏色になる。是に於てか、人が顏の色を赫くした時に發する此の音聲の『喝ッ』を取り之を模した『カッ』の音を、先の赤い色を見て感じた時に發した叫聲の『あー』に結びつけて『アーカッ』なる言葉を作り、更に之を約して『アカ』とし、之を赤色を表示する言葉にしたものであるらしい。

▲言語の進化　此くの如くて、日本語——否な世界の有らゆる國語の原始的語源に遡ると、それが殆んど皆な叫聲及び模音の二元素より成るものたるか一々證明することが出來て、人類の初代には叫聲語と模音語との二種類より言は無かッたものである。然し、人類の智能智識が進步すると共に、（第一）多くの言葉を聯結して新語を作ッたり、（第二）長い音の言葉を約して節めたり（第三）語尾に變化を與へたり（第四）發音に變化を與へたり（第五）同じ言葉でも異る意味に用ひるやうになッたり（第六）外國語が輸入轉訛せられたりして、追々に進化し遂に今日の如き複雜にして而かも類の頗る多い各國語が出來るやうになッたものである。（完）

人物評論（十一）

竹越與三郎論



△常に第一流を以て自ら居る竹越君

山路愛山

竹越君は自ら信ずること非常に厚い。常に第一流を以て自ら居る。世の中を大抵の所まで自分の思ふやうに動かし得る力を持つて居ると信仰して居る。又友誼には極めて篤い。友人に對してなか／＼同情がある。且つ一度交を結べば容易に變らない。

竹越君は常に第一流を以て自ら居るが故に、一體の態度が、例へていふと、鷹は餓えても落穂を啄まずといふ風で、如何なる場合でも必らず第一流の人士たるの品位體面を保たねばならぬと心懸けて居る。立派な膳立てこせなければ客に御馳走を出さない。門構から玄關まで整然とせねば住まぬといふ風に自ら持することと甚だ高い。或意味からいへば自ら奉ずることと甚だ厚い。新井白石などいふ人とよく似て居る。一體の性質がさういふ性質だ。ザツクバランで細暖簾に飛び込んで、有合肴で一ぜんめしを食ふやうな事は決してしない。何處で食つても飲んでも飯は飯、酒は酒だといふやうな考にはないない。どうしても高尚な趣味だ。

文章を作つても其通り、誠に正々堂々の陣で、旗も太鼓も多い。實質は勿論無いではないが、實質を裸かて出さず、衣裳をつけ、羽毛を飾つて、立派なものにしてからでなくては滿足しない。演説でも何でも皆其流儀で、總て莊重典麗。如何なる場合に於ても蓬頭亂髮。野人禮に嫺はずといふ態度で出て來ることをしない。これも畢竟自信力の發現と思はれる。兎に角文章に於ては竹越君は矢張り天下一品である。到底素人てはない。どうしても黒人の文章である。其論調や正々堂々所謂臺閣的の文章である。

竹越君の今一つの性格をいふと、物のブライトサイドを見ることである。仕事をするにしても、大抵光明成功の方を見る。殆んど危惧もしなければ悲觀もしない。それは或意味からいへば用意不周到といふ事にもなる。然しそれが又竹越君の思ひ切つて丸木橋を渡る原因となつて居る。いろんな利害關係を考へて、前後左右を見廻して居れば、なか〱丸木橋は渡れない。竹越君は樂天的にして自己の力量を信じ、運命を信ずることが厚いから、思ひ切つて丸木橋を渡るし、又大概の場合は渡りつけるのである。

竹越君は到底人氣役者でない。又自ら人氣役者たらんとも欲しない。彼は或意味に於ては人望を輕蔑する丈けの自信力がある。竹越君はよく、我々は世の中を押し分けて通るんだといふて居る。これが竹越君の態

世の法である。一體人望などを得やうと思ふものは、竹越君よりはもつと融通が利いて、チャラッポコの一つもいはなくてはならぬ。竹越君にはそんな事は出來ない。そこがエライ處と思ふ。又政友會の如き無學文盲のもの〻多い處では、竹越君の如きは到底も人望のあるべき譯が無い。然し人望のない事と、必要のない事とは勿論別の事であつて、人望のない者が大いに必要の事あるは申す迄もない。今の政友會員中竹越君の如く物の分る人は餘りない。竹越君は決して雜輩でない。問題を捉へて世間に一つの騷動を起す丈けの資格は充分ある。

いろんな事をいふけれども竹越君の「二千五百年史」のやうな、あんなに面白い本はない。あれを拵へた竹越君の年齡から考へても竹越君のエライ事が分る。そしてあれは僅かの間に拵へたものだ。近來の本と雖も何を見ても皆可からざるなしである。只總ての點に於て竹越君があらはれて居るから、さういふ向のものを好まぬ人には氣に入らぬかも知れぬ。

世間では竹越君を輕薄才子などいふものもある相であるが、之れは全くの見當違で私などは未だ嘗てさう感じた事がない。竹越君が世間から誤解されて居る點は寧ろ竹越君の輕薄ならざるによると思はれる。例へば竹越君は人から物を頼まれた場合に、自分の力で今出來ないと思ふやうな事は斷然斷はる。當座の旨い事は決していはぬ。だから若い人などはポンと斷はられて非常にひどい人だと思ふやうな事がある。けれどもさういふ事は當座に恨まれても、斷然斷はる方が其人の爲めにもよいのである。こういふ點は所謂輕薄才子などゝは反對のやり口で、私は常に感心して居る。

一體私は友達の議論をすることが大嫌ひだ。自分の友達といふものは大概馬鹿によく見えるものだ。だから友達の事は却て本當によく分らないかも知れない。私の處へ竹越君の事を話せなどいうて來るのが、第一の間違だと思ふ。

△英國風の政治家

早川鐵治

大した交際は無いが、滿更知らんでも無い、一番初に竹越君に會つたのは、私の懇意な人に富永冬樹といふ人がありました、故、矢野二郎の兄ですがね、或る時精養軒へ行きまして偶然一所になりましたが、見たら一靑年を連れて來て居て丁度親子宜くといふ觀えて御飯を喰べて居ました、其時富永は其靑年を私に紹介して、此若い息子は二千五百年史といふ立派な著述をした竹越與三郎君です、以後何分宜くといはれた、此時なのです。其後西園寺の文部の下に暫く參與官を勸められた時に又會ひ、それからチョイ／＼逢つて居ました。富永の傳手からでせう、矢野二郎とも交際があつた樣だ、富永の知り初めたのは、其後聞いて見たに、矢張り二千五百年史からな相です、大層能く出來て居るので感心して、是非一度逢つて見たいと思つたのが初頭なのだ相です。其後竹越君は誰の手を介してかは知らぬが陸奥に知られ、次いで西園寺に知られる樣になつた。

竹越君は政黨出身者に似合はず吏務の才がある、參與官としての竹越君は仲々能く事務が取れたものだ、所謂人才登庸て政治家連中から引上げたものに吏才のあるものとては殆んどない、局外に置けば兎や角喋り偉ら相にも見えるが、扨て官省に入ると丸でてくの坊である。大臣の權限が如何いふものやら豫算が如何いふものやら一切無茶な連中が多いそれも無理はない、官吏出身のものであれば大抵大學を卒業して高等文官試驗を受けたとかいふ經歷を以て、而して次等上りに經上つて居るのだから、知識もあり事務にも練達して居る、處へ空議空論て荒まかな事をばかり言つて來て居り、學問といつても慶應義塾位を出たものばかり、處が慶應義塾も今こそ大學組織に爲つたから如何か知らぬが、以前は隨分如何はしい生徒を出したものだ、そんな連中がかけがけに飛び込んだとて何て手が出るものか、高田早苗などは明治十五年頃の立派な大學の卒

業て學力才幹共に秀てて居る、現に今日も猶ほ早稻田大學の講堂に英國憲法史の講座をも持つといふ人てある、斯樣な人てもヒヨッと政府へ入って來たばかりでは旨くいかぬ、隨分心配された樣子て暫く熱心に研究的態度を執られた、私に逢つて曰ふ、如何も學校ては大した偉らいとも君を思つて居らなかつたが、能く巨細の吏務を詳悉して敏活に働いたものだと。之は正直に私を褒めたのか、或は御世辭を振り撒いたのか其處は分らぬが、前者とすれば氏の如き人物ても吏務の至難を感得した事と考へられるし、又後者とすれば氏の如き人物ても官省に入れば我々におベッカを遣はなければならぬ程てあることを證明する。此の如く吏務は練熟を要する困難なものてある、勿論官吏出身などのやからには、其知見其人格とかいふ點からいへば詰らぬものが多い、其點は政黨出身者の方が遙に優つて居る、けれども又吏才が乏しい、二つを一つに兼ねるものが其望ましい處てあるが仲々無いが竹越君は獨り珍しくも政黨出身者にして又能く事務の執れる人てある

之を以て見ると世間では一口にハイカラなどといつて冷笑するけれども私は左樣は思はない、學識あり、知見あり、而して吏才もある、餘程立派な人物だと思つて居る、只日本に於ける政治家として聊か君に足らぬ點は蠻的の勇氣のない點である、日本の今日の樣に蠻カラの跋扈して居る際には矢張り今少し蠻カラの處がなくてはいかぬが、君は餘りに其點に於て英吉利風の紳士である、故を以て夫の望月、松本の徒と一つに並べられて兎や角評せられる、

が竹越君にして英吉利へても行かうものならば立派な大臣の器てある、一廉の教育もあり、文筆も達者、演說も上手、お負けに男振も好い、英國では斯ういふのが持てる、若し日本が英國てあろうものなら、先づ西園寺の秘書官からして次第に次官、大臣と經上るべき人物てある。君をハイカラといふが、英國の內閣では皆ハイカラが大臣になる、アスキスとかバーンスとかロイドジョージとかは例外、此三人者は人物で實力から成上つたものだが、其他は皆所謂ハイカラてある、

國務大臣でも、それから何といふか、パーリメンタリー、アンダーセクレッタリーなどいふものでも、皆一通り教育あり、演説もやれば議會の答辯も巧に出來る、それて文才もあつて、一寸印度へでも行つて來れば直に印度紀行が書けるといつた樣なものの揃てある。印度總督をしたロードカーゾンなどがそれだ。

カーゾン卿は先年日本へも來た事があり、其折私も會つて見たが、私等から見れば只一個教育ある若い紳士てある、彼には東方問題に關する著述もあり、又印度に關する著述もある、文筆の士てある、此の人が代議士から進んで官吏になり、遂に印度總督にもなつた、その人の下にはキチナー將軍が居つた、此方て言へば何に當るか、即ちコンマンダー、イン、チーフ、ヲブ、ゼ、インデアンアーミーだ、總督の直ぐ下て頗る勢力がある、是は愛爾蘭人て資產は何もない卑い身分のもの、所謂月給て食つて居る人てある、それが陸軍に身を委ね、段々出世して遂に今日あるに至つたのだが、カーゾン卿と大に衝突し、キチナーの意見が英國政府の用ゐる所となつて、カーゾン卿は遂に罷めて本國に歸つた、併し此樣にキチナー將軍の上にカーゾン卿を据えるといふ事が日本ならば有り得やうか如何であらう。丁度人物を入れ替えて言ふならば、竹越君はロードカーゾンてある、而してキチナー將軍の役割を假に寺內子とする、若し我が國に於て竹越君を朝鮮總督にし寺內子を其下に据えて見たら如何てあらう、何人も異數として笑ふてあらう。否、日本ては到底此樣な現象が有り得ない、が私は竹越君を以てロードカーゾンに比したい。

我國には蠻氣を帶びた政治家が必要であるといふなら、竹越君は實に生れ所が惡いのである。生れた國が惡いのてある。君は西園寺侯に就いて大發展を遂げやうとするらしいけれども、それならば甚だ間違つて居る、西園寺といふ人は野蠻主義な人てはない、資性淡泊物に執着なく、風雲月露を樂むといつた風な閑寂趣味の勝つ人だから、政治家としては知見餘りあり、行く先きは能く見えるけれど甚だ據らない、竹越君の飽く

迄其影、形となり、因つて以て志を遂げやうとするのは頗る覺束ない望てある。

△竹越三叉君

松井柏軒

▲日清戰爭の酣なるや、民友社より一小冊子の發行あり、文辭流暢にして、筆端甚だ才華あり、而して其の論ずる所、我が軍連戰連捷して北京に入るも其の詮なき所以を痛說し、速かに戰局を收めて以て平和を克復すべしといふに在り、擧世滔々勝利を夢みて他事を思はざる時、冷思靜慮茲に及ぶは、確かに政事家的眼孔を具ふるもの、余は其の著者の風采を想望するを禁ぜざりき。

▲此著者は我が三叉竹越君なり、君の文章夙くより陸奥伯に知られ、國民新聞記者より一躍して開拓社を創立し、世界の日本なる一雜誌を刊行して其の經世の氣を吐けるが、伯の薨後、更に西園寺侯に識られ、侯の文政を秉るに方つては、其の參事官たるに至りき。

▲文部省の吏僚等、伊藤首相の風威を憚かりて多く近く能はず、菊池大麓君の如き大臣となりても、伊藤公の前にては啞咤して多く言ふ能はざりしといふ、然るに三叉君白面の一書生と思ひきや、豫算の書類を提げて首相邸に押掛け、主人公と膝組談判を試みて着々要領を得來るより、省中視て驚嘆し、深く君の人と爲りに推服したりきといふ。

▲後に君郷里北越より撰ばれて衆議院の一椅子を占む籍を政友會に置きて頗ぶる頭角を現はす、其の辯舌雄ならざるにあらざるも、竟に其の文章の渾大暢達なるに及ぶ能はず。

▲君の家兄は酒造家なり、君の仕へて勅任に至り、又衆議院議員たるを看、家系を飾るものとして大に得色ありといふ、地方人朴素の風掬すべし、然れども君の志豈斯の如く小ならんや。

▲君の文名を成したるは實に二千五百年史にして、此の書幾んど洛陽の紙價を貴からしめたりと雖も、余は未だ多く推服するに至らず、歷史として評價すれば、

有賀博士の帝國史に及ばざる數等なれば也。

▲君更に筆を支那の歴史に染めんとし、暇有る毎に資料の蒐集に汲々たりといふ、之ある哉、君近時著るしく文字に富み、且つ其の使用に圓熟したるは、多く支那の歴史文章に親める結果のみ。

▲君風姿清楚、爲にハイカラの稱を買ふ、實に寃也

▲最も君に取るべきは其の眼識に在り、與國の氣象鬱として抑ゆべからざるものあるを信じ、彼の政治上の悲觀説を冷評し熱罵し、常に積極主義樂觀主義を鼓吹し、又國運の進張する所の南方ならざるべからざるを唱へ、再び南洋に遊びて南國記の著あり、君の經世家として推重すべきは蓋し茲にあり。

▲然れども君の長所は批評か、實行か、マコーレーか、ピールか、抑もまた併せ兼ぬるグラッドストンたるに在るか、君尚ほ饒く春秋に富む、其の長所未だ俄かに推斷すべからず、唯だ今日までの徑路を限りていへば其の特長は寧ろ批評にあり、マコーレー卿たるに近きが如し。

△竹越與三郎の雅號批判

鐵拳禪

◎三叉を一言にして評すれば三叉也。三叉なるが故に三叉也。吾人は三叉の雅號の起因を詳にせずと雖も、偶然にも彼の人物の總てを語るの、好名詞となりたるは奇縁也。

◎三叉の世に立つや、先づ文筆を以てせり。これ『叉』の第一畫を劃せる也。此の一畫微りせば、三叉今日の名聲を博し得ざりしならん。

◎民友社――『國民之友』、國民新聞社――『國民新聞』、此の四個は、彼れの足と筆とを動かしたる所也。所謂彼れの登龍門ならずんば非ず。

◎三叉の『マコウレー』(十二文豪)及び『格朗空（クロンウエル）』は、徳富蘆花の『武雷士（ブライト）』『格武電（コブデン）』、平田久の『カーライル』宮崎湖處子の『ヲルヅヲルス』、北村透谷の『エマルソン』、塚越停春の『近松門左衛門』と共に、當時の青年に愛讀せられたるもの也。

◎本邦文壇に於て名を成すは、多くは青年の味方也。而して青年に押し立てられたる者也。德富蘇峰の麾下に集まれる民友社の諸子は、青年の人氣に押し立てられて文名を成せる也。三叉も亦御多分に洩れず。

◎彼れは新聞主筆として蘇峰に若かず、記者として福田和五郎の上に出でず、雜誌經營者として山路愛山に優らず。而かも彼れは文壇の雄將たるを失はざる也。

◎彼が新聞記者としての試金石は、『國民新聞』也。當時の『國民新聞』の如く、理想の閑文字と圈點とにて讀者を吸收せし時代に於ては、彼れは適材なりしやも知るべからず。然れども、『愛弟通信』の國木田獨歩の如く天下の注目を惹くに至らざりき。

◎一體は花々しき活動をなす男に非ず、何となく地道也。今日の彼れはハイカラなるにもせよ、當時は基督敎信者にて、極めて眞面目なりし也。

◎マコウレーは、必ずや彼れの理想とせる所ならざるべからず。著書『マコウレー』の青年を感化せしが如く、彼れ自身も亦尠からぬ感化を受けぬ。嗚呼新日本のマコウレー！　三叉の抱負は實に斯の如かりしを想像するに難からず。

◎『世界之日本』は彼れの野心を滿足せしむるに至らず、中途にして廢刊するの止むなきに至れるも、『二千五百年史』は彼れの自負を値する好結果を齎せり。

◎史學界に於ける『二千五百年史』と、地學界に於ける『日本風景論』（志賀重昂）とは、當年の出版界を震動せる二大新著也。

◎一は新趣味の歷史也、一は新趣味の地理也。世人は淺漬の新しき味を愛すると同一の嗜好を以て歡迎し、其の滋味を吟味せしは少數の讀者に過ぎざりしも、發賣部數の多かりしは廣告に非ずして事實也。

◎『二千五百年史』は、當時史家の筆にし得ざりし事を大膽に書せり。カビ臭き日本歷史を棄てゝ、新しき日本歷史を作れり。彼の書は糊と剪の歷史に非ずして、彼れ一家の新研究也。

◎彼の書を精細に批評し、彼の書の缺點を指摘するは、煩瑣多岐に亙るの恐れあるを以て之を省き、更に進ん

て彼れの政治的方面を窺はん。

◎三叉は全く文界と絶縁せりとは云ふべからざるも、今や既に政治壇上の人となれり。これ『叉』の第二畫を加へたる也。此の一畫こそは相支へて以て、活動の舞臺に立たしむる者なれ。

◎彼れは政友會所屬代議士也。彼れ選良の席を占めて議場に列するや、松本君平、望月小太郎の徒と共に『三ハイカラ』と稱せらる。然るに後者二人、中原の鹿を逐ひ損ねて今在らず、三叉獨りハイカラの空名を存す。

◎演壇上に立ちたる彼れの風采は如何にも誂向のハイカラ也。假仕入のキザな點なく、一個の品格を具へたる所、ハイカラの上乘なるもの也。

◎三叉の向ふを張るは、蠻カラの藏原惟廓ならずんば非ず。惟廓の雄辯は殷々たる巨鐘の響の如く、三叉の能辯は輕妙なるピンポンの音に似たり。

◎惟廓の論旨は稍粗放散漫なるを免れざるも、彼れの一語は直ちに聽者の肺腑を突き、恍として徒らに拍手讃嘆せしむるの魅力を有す。三叉は之に反して理路井然たるも、音量氣力共に稀薄にして、聽者を捕ふる事能はず。

◎要するに三叉は、舌の人に非ずして筆の人也。政治家としての貫目に乏し。猪コ參、與コ參と並び稱せられたる當時を懐うて、ハイカラの彼れに煩ひするなきやを疑ふ。

◎三叉は北守南進論者也。彼れは政見を以て天下に遊み言論に、文筆に唱導して倦まず。反響甚だ大ならずと雖も、一部の人士は夙に此の政見を是認せり。

◎國民黨の政綱は、全然彼れの北守南進論に一致す。太平洋問題の解決は、彼等の希望する所ならずんば非ず。吾人は三叉の所論と犬養一派の論策との先後の如きは敢て問ふ所に非ざる也。

◎三叉の『南國記』は、未だ讀まざるも、思ふに『二千五百年史』以後の快著なるべし。

◎最後に臨みて、『叉』の畫龍に點睛せざるべからず。此の一點は才子の瑕瑾なる、漁色を語るもの也。

◎斯くして吾人の三叉批判は終る。旅中匆々の筆、意を盡さざる處甚少からず。本日秋風冷を送りて、東北の秋冷更に一層の冷を加へ、柿實赤く熟して枝頭にあり。(十月九日、阿武隈河畔にて)

△結ぶ所で想像する竹越君

一 政 客

竹越君は薩張り知らぬ、知りたいと思つて居る人だが薩張り知らぬ、只議會で顔を見る位のものだ、さあ政友會に於ける名望かね?、さう、先づ二流の上かね、議會でも大した彼の人の働きといふものも無いからちよつとも目に止めなかつた、三百有餘の頭顱を見渡した所で、そう、矢張り二流だろうね、併し二流にすれば上である。

當代の智識を持つて居つて議論もあり辯說もあり、文筆も達者、一廉の人物ては有るが、政治家としては如何かな、僕は知らんのだから仕方がない、彼の人との私交は無いのだからね。

併し竹越君は西園寺侯と結んで居る様だが、結んで居る上には其處には何等か相合するものがなくてはならぬ筈だ、其點で論じて見るならば、西園寺といふ人は政治家に肝腎な要素を缺いて居る、執着力の乏しい人だ、それは政治家を離れて單に人格などといふなら立派な人だ、御人柄だ、が政治家としては餘りに御人柄過ぎる、政治家として其局に當るには今少し強い處があつて、斯くなければならぬと睨んだ處は何處迄も推し切るといふ勇氣がなければならぬ、邪魔になるものは何處迄も狩り盡して遺孽を止めぬといふ程に迄行かねばならぬ、即ち少々位無理と知つても大小輕重を計つて重きもの大きいものに從つて處斷するといふ勢がなければならぬ。それが極端に行けば星亨てすがね彼の要素が矢張り必要だ、然るに西園寺侯にはそれがない、西園寺侯は頭腦は明朗透徹だといはれる、が大局を總ぶるに當つて事に臨んで自ら斷を與へない、例へば阪谷男が藏相て居て山縣伊三郎と爭つた時の如き

も西園寺侯にして斷のある人てあつたならば彼んな事に至らせぬ、然るに阪谷が來て說けば左樣か、山縣が來て說けば左樣か、どちらて來ても左樣か左樣かて埓が明かぬ、自分の考を明瞭に打切つて說く勇氣がない尙ほ能く二人て相談して吳れといつて返す、其處て只二人だけて爭ふ、それだから果てしが着かぬ、遂に彼んな事になつてしまつた、若し西園寺侯にして勇斷があり、斷々乎として所信を以て阪谷に語り、それが爲には如何に進退するも構はぬといふ意氣を見せれば、阪谷とても其儘て居たに相違ないのだ。が西園寺侯には迚も出來ぬ藝だ、是が桂にてもなるとズッと違う、チャンと意見が立つて明確にそれを示して下に莅む、それだから事が捌ける、如何しても軍人氣質がある。

西園寺侯は矢張り昔の御公卿てある、それ故俳優を招くとか文人を招くとかして喜んて居る、何處か超脫な處がある、即ち優雅を愛する人てある、併し優雅なるものは差當り政治家に取つては不必要てある、此不必要な要素を多分に持つて、そして政治界に馳驅し功を收め樣とするのは難いことてある、私は能くは知らぬ、が竹越君も此類の型でなかろうかと想ふ、即ち政治を喜び政界に馳驅しては居るけれども、矢張り單に優雅の士優雅を愛するの士で、何となく西寺園侯とは一縷の脈が通つて居りソリが合つて居るんではなかろうかと想ふ、竹越君の著書には南國記といふのがある相だ、私はそれを見たいと思つて居るけれどもまだ見ぬ、それても見たら君が果して如何なる見地を以て書いて居るか、政治家としてか、文學者としてか、何等か窺ひ得る所があろうと思ふ、すれば尙ほ君の人物を確めることが出來樣と思つて居る。

政治家の要素には前に擧げたもの丶外に更に、縱橫の機智を要する、竹越君には是があるか如何か、僕はまだ知らぬ、政治家と爲つては氣を油斷なく配り、人が突如として自分の前に現はれても、直に其胸に含む所を洞察して彼あ言つたら斯うと常に裏を缺く用意と才略とが必要てある、竹越君には此樣な要素があるか知らん、それは準備して掛かる事ならやれもしやう、

例へば豫算案が議場に上る日は分つて居る、其處て斯う言ふ演説を一つしてやろうとし、十分の時間にジッ〳〵と考へ込んて行くことならやれやう、此樣な演説なら竹越君もやつて居る、が突如として難問題の起つた刹那、所謂電光石火目にも止まらぬといふ際に、突如として一大議論を構成し雄辯宏辭を造出して、能く危きを轉じて安きに置くといふ樣な斯樣な離れ業が出來るか知らん、僕は長く議場に居るけれども未だ曾て君に此事あるを聞いた事はない、星亭は雄を議場に稱したのも亦一つ此要素を具へて居たからてある、彼は斯かる際にドッシリとズウ〳〵しく構へて、腦裏に機智を閃かし、左右に應酬して敏活な辯論を遣る、機智が一寸浮かばず、而かも危機正に一髮といふ時には彼は大膽にも休憩を迫る。斷々乎として其議を行うて頭に多少の猶豫を與へ、其間に妙構を考へ十分の成竹を得て再び悠然と議場に上る、彼は常に此概を以て通して居る、一寸した事の樣てはあるが咄嗟の間の此の如き處置、是も亦一種の機智てある。竹越君には此類の機智と勇斷とありや否や、不幸にして僕にはまだそれを認むるの機會を得ない。

威重！それは自ら勉めて着け樣としたとて駄目なものだ、一つは天稟だが又一つには平生の心掛にある、西洋ならば左樣てもなかろうが、日本てはまだ餘り身の廻りの取り繕ひに細かな注意をするのを婦女子の事とする、婦人ならば一寸の餘所行にも、誰が爲に形くるのかは知らぬが、直に姿見の前に立つて、と見かう見己が姿を振顧つて行く、それを男がすると厭に思はれる、婦女子のする事を眞似ては我國てはまだ笑はれる、外出するにもネクタイを彼れの此れのと氣にして騷ぐ、顏を一つ剃らせても髭の具合を氣にして此樣な風にとか細かに注文をする樣ては如何しても婦女子の態ありとして厭に思はれる。是が惡いとは言はぬ、が少くも今日の日本に於ては斯う思はれるが通態てある從つて自然威重なるものが着かぬことになる、竹越君は亦此失があるんてはなかろうか、何しろ知らぬ事だから判然した事はいへぬ、只遠くに見て大凡そに想像

したに過ぎぬ、

△竹越さん

正宗白鳥

竹越與三郎といふ名は私には古い馴染だ。逍遙鷗外の名に接する以前から知つてゐた。新日本史、マコーレー、クロンウエルなど、氏の著書は他の民友社諸氏の作と同じやうに、一つ〳〵讀破した。どんな人だらうかと少年時代から折々想像をめぐらしてゐた。その間に氏は政治界に入るやうになつたが、私は氏が世界の日本(?)といふ雜誌を出したり、二千五百年史を著はしたりした時分から、氏の作物から離れてゐた。二千五百年史は未だに讀んでゐない。勅任參事官になつたりハイカラと呼ばれたりしてゐるのを折々新聞で見ても、さして何の感じをも起さなかつた。

それが意外にも氏の事を念頭に浮べなくてはならぬ場合になつた。主筆として三叉來るといふ事が、或日私の雇はれてゐた新聞の編輯局に傳へられた。私は三叉氏の風采や言語に接する興味よりも、先づ氏が如何に社內に改革を起すかと、自分の利害問題などに心を注いだ。編輯の人々はそれ〳〵に不安を抱きながら、三叉氏の取るべき態度を彼此と批評し合つた。パンなくて生きてゐられない人間の重大問題が、局內に渦卷いた。

私はむしろ重要視されるやうになつたが、その代りに仕事が忙しくなつた。日曜附錄は氏の入社以來私が編輯するやうになつたのである、新思潮の湧きかゝつてゐた時であるから、私は思切り新しい者を集めやうとしたが、氏は折々恐ろしく古めかしい文章を何處からか持つて來ては私の手に渡した。日曜附錄の批評振から推して、私は竊かに氏の趣味の存ずる所を窺つた氏は私がその頃私淑してゐた獨步の作物を掲ぐることを好まぬらしい口吻を漏らした。私は氏の命を奉じて二度漱石氏を訪ふた。その時漱石氏は「此間竹越さんといふ人が來たが、僕を先生〳〵といふので恐縮し

た。あの人の方が僕よりや年上だらう」と、微笑しながら云つた。この何でもない事も私には面白い。

社の編輯會議で氏があまり多くの仕事を私に押被せさうだつたから、「私もこれからまだ勉强しなくちやならんのですから、あまり忙し過ぎて時間に餘裕がないと困ります」といふと、氏は首肯して强いことは云はなかつた。氏は靑年に或度まで同情を持つてゐる人だと思ふ。しかしその代り氏は人情負けをして思切つたことをなし得ない人ぢやないかとも思ふ。主筆としても案外遠慮勝で自己の意志を通し得ない所があつたやうだ。

氏はストーブの側で折々打解けて昔話などした。「春恨」といふやうな事をも語つた。我々靑年期の者を羨むやうな口吻をも漏らした。今の政治家の中では文藝的趣味の多い人だらうと思はれる。

氏は文辭を豐富にしたいために明淸の文學を鼓吹したいと云つてゐた。

氏の日就社退社以來數年、私はその謦咳に接しなかつたが、今春議會閉會後に、不意に一通の郵書に接した。一夕ゆつくり話したいから某家へ來て呉れとの事私は喜んで指定された日に其處へ行つた。「君の小說には新橋の藝者が出てゐないから、」云々と云つて、私に數人の一流と云はるゝ女を見せて呉れた。私は默つて見てゐた。「若い時分は女に何とか思はれなければ、只遊んでも面白くなかつたが、今はそんな考はない、息屈醒ましに來るだけだ」と氏は云つた。

これを要するに私の目に映つた竹越さんは、情があつて程のいゝ紳士である。實際はどうであるか、私だけはさう思つてゐる。

△三色摺り

足立北鷗

私は元來人の批評は容易に出來るもので無いと思ふ先づすべきもので無いと思ふ。といふのは今日多くの人物評を見ても之が十分はまつた批評だと思ふものが

少いからである。人物を評するならば、善く言はうと惡く言はうとそれは問はぬが、只惡く言はれても本人が之を聞いて成る程と眞底から首肯く樣なもので無ければならぬ、是ならばするも宜い、處がそれは又考へて見れば甚だ困難である、多くの場合に於て長短は相兼ぬるものである、長處即短處、短處即長處である上に更に又人心は刻々に轉變して已まぬ、一日の中にも陰晴あり、朝の我は夕の我に非るが如くに昨日の我は既に今日の我ではない、況んやそれが一年五年十年と經過するに於ては猶更である、して見れば當にはまつた評の六かしいのみならず、好しやはまつた評をしたとしてもそれが二三年前の其人物の事であつたりすると最早や其評を以て今日の其人を律する譯に行かぬは明白である、然るに讀者の方では敢てそれて律やしうと掛る事になるから非常な間違になる、左樣想はれては想はれた當人に非常に迷惑な事もあろう、それ故大體からいへば人物評は出來るもので無く、するもので無い、況して友人の間柄となつては一層である、併し折角の御需めだから這般の注意の下に話しますが、聞く方でも其心構へて居て貰いたい。

世間では能く竹越、望月、松本と三人並べていふから、私も矢張り此三人を並べて談緖を開きませう、それは斯う三人並べるのが一番適當だといふても無い、三人者各々異なつた面目を有して居る事だから、並べられては竹越君にしても望月君にしても、將た松本君にしても各々迷惑がる事であろうと思ふ。併し世間では常に此三人を並べるから、私も便宜にそれに由つて扨て三人者の性格の同異を説いて見やうと思ふ。

併し並べられるからには偶然並べられる譯ではない何等かの共通點が無ければならぬ事だがそれは矢張り有る、第一には野心。といつても惡意ではない、善意に見ての野心が三人に共通にある、而かも共に燃ゆるが如き殆んど白熱に近い程のものがある、往々にして三人を惡く言ふ人がある、が動もすると言ふ人の方に創がある、其心理狀態に甚だ面白からぬ點がある。能く彼奴はキザな奴だなどといふが、其心理解剖を試み

ると多くは言ふ人自心に名譽心が旺盛であつたり野心が充溢して居たりする、それを以て常に人より前に立たんとの內心の要求がある、然るに玆に一人あつて自分の要求が抑えられる場合が出來ると、自己の自尊心が傷けられる處から非常に邪魔になる、此に至つていや彼奴はキザな奴だ、厭な奴だ、いけ好かぬ奴だなどとの評語が出る樣になる、世の大概がそれてある、苟も高く自ら標置して大きく構へさへすれば左ばかりの事で胸中の天地の搔き擾される事もなく、自ら言はずとも濟む事なのてある、言はれる人の方から見てもそれは智慮もあり才氣もあり、位置も高くて、而かも能く德を韜み光を晦ますことが出來たら一番善いか知らぬが、仲々人間としては萬全を期し難いものてある上は鋒鋩の自ら露出して兎角の評を世間から受けるも已むを得ない。之を以て三人を累すべきて無い。

次には三人とも西洋かぶれの樣に考へられて居る、併し事實かぶれて居るのでは無くて、唯かぶれて居る樣に思はれて居る點だけが共通なのである。望月君の如きは動もすれば詩を作る、古詩なども作るが仲々旨い、只形式をそれに借りるといふのみては無く、內容にも東洋思想が多い、否、詩ばかりては無く、平生言ふ所にも西洋思想は少い、殆ど全然のアヂアチックと言つて宜しい、ゼントルマンシップといふ樣な意味からならば如何だか又別問題だが、如何見ても、――實行は兎も角もとして、――彼れの期する所は東洋流の國士を以て任ずるにある、松本君も亦靜岡縣に生れて其邊の漢學塾に養はれた人、矢張りアジアチックの思想を多量に持つて居る、それて欝勃たる抱負を攄べ、壯圖を蒙古の地に試みて敢て王者の基を建てんなどと眞面目に言ふ、全然佐々木照山式の事を言ふ、佐々木照山と松本君平といつたら人は一寸比較の倫を失した樣に思ふてあろうが決して左樣てはない、兩者に全く共通の處がある、それに又松本君の家には書生を澤山置く彼は之を以て得意として居る所亦孟嘗君客を好むの趣がある、いや彼れ自らも、人が彼の處に多く居る書生中甚だタチの惡いものがあると指摘すると、空嘯いて

なーに鷄鳴狗偸の士も亦養はなければならぬといつた樣なことをいふ。如何見ても亞細亞張りの男である、竹越君は常にアジアチックの思想を持つては行けぬいけぬといふ、口必ずしも心と一致せぬでもない、其文章にも歐羅巴思想が充滿せぬでもない、併し其修辭の大部分は支那の古い文章あたりから拾はれて居る遒麗な文字であると同時に、矢張り支那の古い思想が根柢に貫流して居る、元と修辭々々と單に言ふけれども、矢張り其思想が喜ばれ、其思想が十分に咀嚼せられ翫味せられるんでなくては、形ばかりに支那張りの文字を並ぶるといふことは出來ぬものである、それ故既に其修辭が然りとすれば亦自ら其裡に支那思想が含まれて居ると見ても差支ない事と思ふ。現に竹越君は能く古本屋に古唐本をあさる、而して潛に自家胸中の秘となして自由に其文字を驅使し其思想を發露するのである好きでなくては其樣な唐本あさりが出來る事でない、ても竹越君はアジアチックの思想を排斥する人であるそれ故或は自覺の上の事でないかも知らぬ、併し鮑魚の市に在つて自ら其臭を知らずの類で、傍からそれが非常に臭ふ。

次には三人三樣ながら兎に角稚氣を持つて居る事である、共に不用意の間に天眞を流露して、其處に稚態甚だ愛すべきものがある、稚態を見するのは善いと言はうか、惡いと言はうか、或る意味に於ては、正直である、世渡りがまだ下手であるといふ樣な事がいへるかも知れぬ。それからは、野心の事はもう話しましたね、其野心の最も政治方面に強いことゝ。共通點といつたら先づ此だけですな、がこれだけあれば大分多い方である。

併し之を色に譬へるなら、赤や黄や青や共通の色が澤山有る樣ではあるが、扨て其分量が違う、其色の分量が大に違う。即ち同じ政治的野心があるといつても亦同じ支那思想があるといつても、三人は三人ながら各々其分量を異にして持つて居るので其處に特色なるものが形成される、望月君は赤である、赤は危險な色となる、汽車から電車の信號旗に至るまで赤は危險の

表象である、事あれば直に赤旗を打振る、すると其進行を止める、其他警察の電燈の色も、蜿蜿蛇行する野火の色も、若くは天變地妖を豫報する空燒けの色もハ孰れか赤ならぬものはない。而して望月君は三人中最も蠻カラで聊か以て東洋豪傑式の物騷な所があると共に其顏迄も亦赤を以て表すべき方である、望月君の赤は動かぬ處と思ふ。松本君は黄である。最もアジアチックの思想を多量に有する所は當に其肌膚の色たる黄を以て現はすべきものと思ふ、特に其覇氣の賜物として君の對蒙古的言動が黄禍論の張本人たるカイゼルの忌諱に觸れる恐れがあるなどは君と黄とに宿縁甚だ淺からざるものがある、而して竹越君は青である。竹越君は嘗て新樣の斯齊服の袖の半までケバ〱しく青いのを着て居た事があつたが、君は當に其色を以て表はすべきである。青は平和の色である、日ねもすノタリ〱する春の大洋の色である、一雨颯と行き過ぎた後の大空の色である。それ故又凡ての信號旗に用ゐられて無事の表象をする。竹越君も亦平和の思想を抱いて居り其議論はいつも平和である、いつの戰爭の時でも、即ち日清役でも日露役でも左樣いふ場合になると必ず非戰論に傾く人で、戰爭は偶ま外交手腕の拙劣を示すもの、戰はずして勝を制するのが外交の要諦であると常に考へ常に主張するのである、否其持説ばかりでない其人にも洋々たる趣があつて何となく人を引付ける處がある、譬へば平蕪迢々たる嫩緑の野邊の人の氣心を長閑ならしむる如くに何となく親み易い處がある。青は又物の養育せらるゝ生々の相を現はすが、竹越君も亦能く青年を愛して其提撕を勉める、何處迄も青の一刷毛で行く人と思ふ。

此の如く各々色の分量に違ひはあるが、併し又其色は各々が互に共通に持つて居る事だから、論理上の結果として自ら各々三色を具有する事となる、即ち三人共に三色版で刷り上げた人物である、くどい樣だけれども只其中に赤の秀でたもの、黄の秀でたもの、青の秀でたものとの差がある丈である。其三色版の出來榮えの好し惡しは、それは評者の言はんと欲する範圍外

であるから御預りにする。

人は勝手なことを言ふものである、て彼の人は人に容易に屈せぬとか、理想が高過ぎるとかいつて毛嫌ひされる、竹越君も亦免るゝを得ない、が是は毫も疚しとするに足らぬ、理想の高いのは善いことである、抱負の大きいのは善いことである、従つて容易に人に屈せぬのも亦善いことてある。之を兎や角いふのは偶ま以て自己の然らざることを表はすものて、巨人の前の侏儒、仰いて其及ばざるを喞つが如き類に過ぎぬ、言はれる當人こそ却つてそれによつて其人物の大なることを證する譯になる。

竹越君を物に倦きつぽいといふ。が是も短處ては無いと思ふ、凡そ物に最も倦きつぽいものはと考へると小供ほどのものは無い。小供が一番物に倦きつぽい、それは身心共に急速力の進歩をする時であるからだが、之よりして思へば物に倦き易いのは知見の不斷の進歩を證明するものといつても宜しい、批難するどころか至極結構な事に思ふ。

それから特に言ふべきは君の金錢に極めて冷淡な事である。最早君の儕輩の中には貯蓄に心掛けて子孫の計をなすものもあるが、君は只生活費を求める以外には貯蓄の念慮は聊か無い、生活費は是は已むを得ない、生活費以外に氏の欲する金がありとすれば只旅行費だけであらう、君は旅行を非常に愛する人て、金と隙さへあれば旅行しやう旅行しやうと望んで居る、是が又偶ま以て氏の現状に安んぜぬ性格の表現てある、新しい智識を望んて居ることの表現てある。それが又黄金以外に於て何か大に期待するものあるを暗指して居る要するに紛々たる政治家中に頭角を拔いて居る人てあると思ふ。(談話校閲濟)

△感じのよい人

上司小劍

竹越さんはまことに感じのよい、物のよく解る人て、半年ばかり讀賣の主筆をして居られる間に、私は心持

ちよく其の下に使はれてゐました。

▲非常に青年を愛する人で、戀人に對するが如き狀を以つて青年に對して居られたことのあるのを私は屢々見ました。

▲日本人であのくらゐの年齡になると、一種の日本臭味――骨董癖――と云ふやうなものが附いて、妙に時代の幇間と云つたやうな役目を勤めたがるものですがあの人にはそれが尠い。何處か若々しいところがあります。

▲無論あの人はパーリアメンタリズムの大信者で、議會の壇上に立つて演說すると云ふやうなこととの非常に好きな人ですが、併し政治に趣味を持つて、政治に活きてゐやうとするには、今のところあれくらゐのことをやつてゐるより外はありますまい。

▲兎に角あれくらゐの程度の人が、日本の政治家、議員と云ふやうなものゝ大部分を占めるやうになれば、何事も今よりは少しく都合よく行つて、小說なぞも書きよくなるだらうと思ひます。

▲西園寺さんに勸めて雨聲會と云ふものを拵へたのもあの人の細工で、其の席上であの人は「文運の隆盛を祝す」と云つて杯を擧げたと云ふことも聞いて居ります。

▲然るに今や日本の文藝は權力階級から掏摸窃盜に對すると同じやうな待遇を受けて、小說家などは拔き足差し足と云ふ風で仕事をしてゐます。曾つて「文運の隆昌を祝し」た竹越さんは、今や「文壇の窮迫に泣か」ねばならないではありますまいか。

▲兎に角竹越さんは山路氏と共に私の最も好きな人ですが、山路氏は面識のない人、竹越さんは半年でも親炙して仕事をした人で、餘りに其の人物が解り過ぎてゐる爲めに、云ひ現はしにくゝ、批評しにくゝて困ります。

△滿十五年間親交渝らざる竹越君

子爵　秋元興朝

私が竹越君を知つたのは、「世界之日本」といふ雜誌を出した時分である。一體あの雜誌はまア私が首唱し

て出來たやうなものである。當時李鴻章が馬關に於て小山某に狙撃せられた。時の輿論は其行爲を褒めそやした。新聞紙などでも賞讃の文字が多く見えた。私は其時今の林董伯に逢つて、小山某のやうなものは何處の國にも、何時の時代にもある。が日本には特に多いやうだ。然しそれは仕方がないとして、傍でそれを褒めて居る。褒める人も偶にならばよいが殆んど全體が褒めて居るといふ有樣である。之では實に困る。之は主として日本人が島國に生れて世界の事情を餘り知らぬ爲めである。それで何とかして世界の事情を一般の人民に分らせる方法がないだらうか。餘り專問的でなく、世界の大勢及び政治より人情風俗文藝等に至るまて面白く紹介するやうな雜誌でも拵へたらどうだらうといふ事を林伯に話した。林伯は當時陸奧外務大臣の下に外務次官であつたが、さアさういふ事が出來ませうかといふやうな事をいつて居つたが、それから一月ばかり經つてから逢ふと、先日のあなたのお話をよく考へて見たら大變面白いから陸奥伯にも話したが至極贊成だといふ事だから、早速やらうといふ事であつた。そして其主筆に選ばれたのは即ち竹越君で、それ以後滿十五年間親交ちつとも渝らずに懇意にして居る。

一體知つて居る人を評するとは具合の惡いものだ、又竹越君は大體一般の人が認めて居る通りで、別に新らしい珍らしい材料もない。けれども普通人間の交際といふものは案外長く續かぬもので、親戚とか何とか特別の關係あるものゝ外はさう長い交際は期し難い。竹越君と私とは明治二十八年から今日に至る迄滿十五年間親交を續けて居る。まア長い方であらうと思ふ。

竹越君の著はされた「二千五百年史」は實に、これまての日本歷史と體を異にして、中の人物の評論から日本の盛衰、文物の發展等について原因を揭げていろいろ議論をされて居るのは非常に面白い事で、日本歷史に一新生面を開いたものである。又臺灣などの事を委しく調べて其著書などもある。總て文學上、殊に人物評論には非常に長けて居る、又政治上にも一種の理想を持つて居らるゝ。進步した考を始終持て居らるゝ。

又公人としてはいろ〳〵の問題を忌憚なく批評されるし、私の一身上などについても時々忠告を與へてくれられる。私も亦無遠慮に思ひついた事を竹越君にいふので、これ迄一二回は爭ふた事もあつたが、それにも拘らず十五年間極く親密に交際して居る。殊更らに人と論爭するといふ事もせず、さればといつて決して苟合はせず、よくないと思ふ事は無遠慮にいふ、友達としては極くよい人だ。

薔薇は主もなるものであるが、薔薇に拘らず、一般の植物について趣味を持つて居る。美術といふ方面は嫌ひてはないだらうが、政治に力を入れて居らるゝから餘暇がないのであらう、經驗が少ないやうだ。美術の事などは私の家へ來て受賣するのだと笑つて居らるゝ。まさかさうでもないてせうが餘暇がないのてせう。

竹越君をハイカラなどいふのは親しく長く交際もせんて、只外見丈けていふので、竹越君に風采を歐洲紳士殊に外交官などに學んて居るから、只ハイカラといふのである。敝れたる縕袍を衣て狐貉を衣るものと立つて耻ぢざるものは其れ由かといはれた子路とは正反對の立場に立つて居る。言語動作すべて文明的であるから日本の舊思想の者などから見てハイカラと見えるのであらう。私なとは風采に一向無頓着な方で、よく竹越君から注意せられる。陸奥伯も存生中に忠告した事があつたが。今もつて私は風采などに注意しない。實は左程の大事件でもなし又社會上政治上に積極的に害を及ぼすものでもないと考へて居らからでもあるが一體私は身體が虚弱て、寒暑に感ずることも甚しいから、つひ無精になつて注意せずに居るのである。出來るならば、風采もチャンと整つて居つた方がよいので、私も身體が今少し丈夫ならば竹越君の忠告も無論容れる積りである。

竹越君の第一の長所は矢張り、文章、歷史、人物評等て政治之に次ぐと思ふ。竹越君はまだ年も若し、見識もあり、將來極めて有望てある。私なども竹越君より十も年が上だが、之から大いにやる積りて居る。竹越君などは無論大いにやる決心てありませう。

片々録

▲「文章の巧拙は之を讀んだ時に睡くなる程度によつて知ることを得べし。巧は之に反比例し、拙は之に正比例す」とは福本日南氏の言。

▲二木博士曰く「牛乳は飲むものにあらず、嘗めるものなり」と、其説を聞くに「人間を初め如何なる動物と雖も皆乳は少しづゝ乳房より吸ふものなり。乳は斯くの如くして細かに球にして飲むにあらざれば充分消化するものにあらず。牛乳をガブ／＼飲んで下痢を起すが如きは、牛乳を嘗めずして飲むが爲めなり。」と。

▲今回の公設展覽會に於ては概して西洋畫よりも日本畫の方に進歩の跡著きを見る。廣業の「夏の一日」、觀山の「魔障圖」、春擧の「寂寥」等皆深き研究に値す。西洋畫に於ては山下氏田邊氏等に新味を發見する外概して沈滯の風あり。

▲「中村春雨氏の「波」は近來の最も眞面目なる喜劇なり」とは佐藤橘香氏の評。我輩も亦同感。

編輯だより

本誌前號「秋期大附錄號」は最近の文壇に於て罕に觀るの歡迎を受け、讀者も頗る滿足に存じ申候、十二月號の小說欄には女流作家の作品のみを網羅する計畫にて、豫告にも有之候如く、森、小金井、國木田、小栗、長谷川、野上、水野、岡田、尾島、永代の十女史に寄稿を依賴いたし候。百花妍を競ひ、衆草芳を爭ふの趣あるべしと存じ候。

又新年號の計畫も已に相立ち、奇拔なる問題を提へ、斬新なる讀物を揭げて一層誌運の發展を計ることゝいたし候。而して小說に於ては島崎藤村氏の「犧牲」と題する二百枚の長編の外、第一流の大家十氏に依賴して短篇十篇を揭載することに相成り居り候。

本秋の公設展覽會に對する批評は諸種の新聞雜誌に相見へ候へ共、多くは偶感的短評に止り、未だ專門家を首肯せしめ、兼ねて一般觀者を啓發するに足るが如き評論少し、我等之を遺憾とし、斯道の大家に囑するに最も注目すべき作五六について詳細なる批評を草せんことを以てし、幸にして承諾を得たるも、開會より本誌締切まで日甚だ淺く、かゝる責任ある批評は到底二三回の觀覽にて出來るものにあらざれば次號の誌上に寄稿せんとの事なるを以て吾人は讀者と共に其評の出づるの日を待たんと存じ候。

次號の論壇には田中王堂氏の「ルーズヴェルト論」及び建部博士の「國家の秩序と思想主義」と題する長論文あらはるべく、又黑頭巾氏は久し振りにて其趣味多き雜錄を誌上に揮はるべく、要するに次號をして庚戌文壇最後の光輝を放たしめんと骨折りつゝあり候(一記者)

文學博士 遠藤隆吉先生新著

孔子傳

菊判約四百頁
裝釘高雅箱入
定價壹圓四拾錢
郵税拾貳錢

現代漢學界の巨擘遠藤博士が深邃なる識を傾け椽大なる筆を揮ってこゝに東亞の大聖孔夫子を傳すと言はば敢て又別に時流の廣告的文字を列ぬるの要なかるべけむ試みに少しく言はむかその渉獵極めて廣汎にその材料極めて豐富にその觀察極めて鋭利にその論斷極めて適確なるは勿論殊に各編各章到處に博士獨特の奇想と先哲未言の結論とに接するを得るは洵に本書の特色として天下に誇稱するに足るところ蓋し本書一たび出てゝこゝに東洋人の孔子に對する二千年來の迷妄謬見を打破し肉あり血ある大聖孔夫子の眞面目は紙上に躍如たらむ冀くは世の東洋學術の精髓を味はむと欲する人靈界の偉人に接して修養の資を得むと欲する人悉く來つてこの空前にして而して唯一なる『孔子傳』を讀め

釋迦牟尼傳

文學士 常盤大定先生著
定價七十錢 郵税八錢

釋尊の研究

文學士 羽溪了諦先生著
定價一圓 郵税八錢

阿彌陀佛

學習院教授 鈴木大拙先生譯
定價卅五錢 郵税六錢

達磨と陽明

慶應大學教授 忽滑谷快天先生著
定價七十五錢 郵税八錢

東京小石川區原町 振替東京一五六八六 **丙午出版社**

東京小石川原町六 振替東京一三五三 **鷄聲堂**

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

BUMMEI-DO & CO.

ENGLISH, JAPANESE BOOKS & STATIONERY.

1750 Sutter Street, S. F., Cal., U. S. A.

運送、鐵道、保險、商業、銀行、北極探檢等の傑作物

L. Evanes............A History of California Labor Legislation ....
....Postpaid, $ 4.50.
E. R. Johnson ......Railway Rates and Traffic......2. vols ...... $ 5.60.
E. R. Johnson ......Elements of Transportation.........Postpaid, $ 1.65.
E. R. Johnson ......Ocean and Inland water Transportation ... $ 1.65.
R. Morris ....Railroad Administration........... ,, $ 2.20.
J. J. Sulivan.........American Corporation............... ,, $ 1.82.
J. C. Ducan ....Business Management............... ,, $ 1.82.
S. Huebner ....Property Insurance.................. ,, $ 1.82.
L. G. McPherson...Transportation in Europe .... ,, $ 1.65.
R. E. Stilwell ......Confidence or National Suicide? ,, $ 1.10.
E. A. Cleveland ...Funds and Their Uses .... ,, $ 1.37.
S. S. Pratt...........The Work of Wall Street .... ,, $ 1.37.
E. S. Meade ....Trust Finance .... ,, $ 1.37.
A. K. Fiske ....The Modern Bank .... ,, $ 1.65.
F. L. McVey ....Modern Industrialism............... ,, $ 1.65.
The Mexican Year Book for 1909—10 .... ,, $ 7.00.
R. E. Peary ....The North Pole .... ,, $ 5.70.
A. Van Wagenen ...Government Ownership of Ralways ,,...... $ 1.37.

教育、宗教、神秘論、ルーテルの政治説其他最近の傑作書類

H. Huntington......A. Apprentice to Truth .... ,, $ 1.65.
C. W. Eliot ....The Durable Satisfaction of Life ,, $ 1.10.
A. S. Rapport ......Leopold, King of the Belgians ... ,, $ 4.50.
L. Abbott ....Seeking after God .... ,, $ 1.10.
J. Allen...............From Passion to Peace .... ,, $ 0.56.
G. A. Andrews.. ...What is Essential? .... ,, $ 1.10.
J. A. B. Greenough. A. Year of Beautiful Thoughts... ,, $ 1.10.
E. M. Bishop......Daily Way to Health................. ,, $ 1.65.
Andrews............Bibliography of History for School and
Libraries..Postpaid, $ .70.
G. S. Hall ....Educational Preblems...2 Vols...... ,, $ 8.50.
G. S. Hall ....Adolescence ....2 Vols...... ,, $ 8.50.
G. S. Hall ....Youth .... ,, $ 1.65.
G. R. Montgomery. The Unexplored Self .... ,, $ 1.37.
L. H. Waring......... The Political Theorics of Martin Luther.
....Postpaid, $ 1.65.
J. Snowden............ The World a Spiritual System. ,, $ 1.65.

書肆文明堂

東京本郷區森川町帝國大學門前　振替貯金口座東京一四九八一番

日本取次店新設　郁文堂

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

維新志士遺芳帖

豫約殘部僅少即時申込あれ

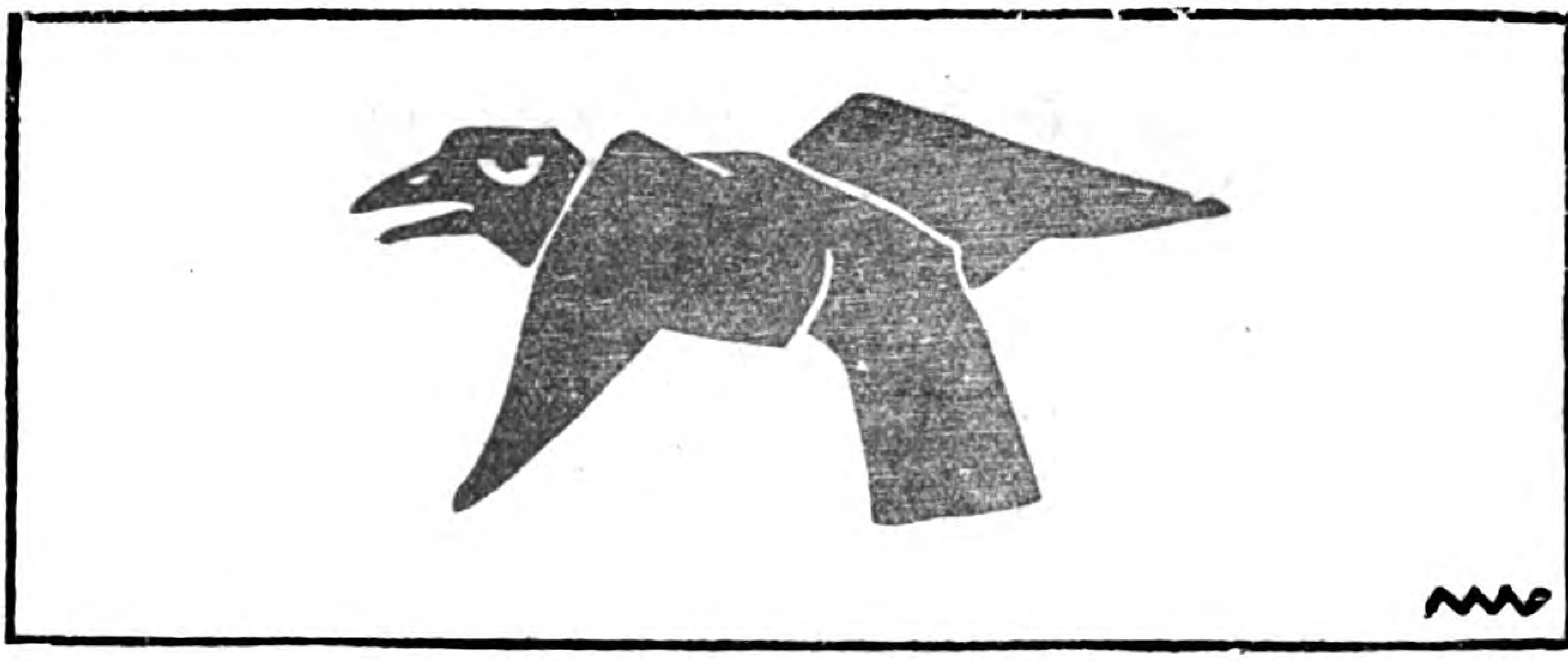
上製特價十二圓
特製特價十五圓
郵税内地四十二錢

再版不可能
賣切後絕版

満天下の耳目を聳動して深甚の感動を與へ畏くも天聴にさへ達したる國民新聞主催維新志士遺墨展覧會陳列品の内特に門外不出の珍、金匱石室の秘、四百十七點を撰び金屬版二度刷として最も鮮明に之を復製し一々之に小傳及解説を附し富麗高雅の装釘を施したる二大册にして維新當時身命を擲ちて王事に勤め國事に盡したる彼等志士の燃ゆるが如き誠忠と愛國の大精神とは悉く此の裡に結晶せり其與ふる教訓の大にして深く且永き之を展ぶれば懦夫も起つべく眞に是れ活ける精神教育資料として紳士の家庭に必ず一本を備へざるべからず製本既に成りて唯だ諸君の迅速なる御申込を待てり

東京神田 **同文館** 振替一三五番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



自由劇場
試演用脚本

佐用姫（禁無断興行）

岩野泡鳴

登場人物

松浦の佐用姫
漁師石足
大伴狹手彦
漁師甲乙二名

場所

松浦潟、虹の松原

（正面、白砂青松の虹の松原。まばらな松の木々を透かして、奥一面に、高くない山の斜面が見える。すべて領布振山前面の景。上手寄り、浪うちぎはに、大きな巖が立つ。そこから下手へかけて、舞臺前面はすべて浪ぎはの體。時化あとの浪の音にて幕明くと、山のふもとを帯劍弓矢の兵士、兵糧その他の荷物を運ぶ人夫などが、おもに下手へ急がしく通行するのが見える。人夫の下手へ行くのは荷を運び、上手へ行くのは空手。いづれも、畫模様で、登場人物のせりふには加はらず、往來をつづける。上手、巖の蔭より佐用姫、髪を腦天で三ツ輪に結び、また左右の耳の前後に垂らし、天平式の衣、裳、領布を後ろから腕の兩方にかけ、その兩方を兩手で握りながら、革沓にて、あわただしく出て來たり、心配げに人を尋ねてゐる樣子。下手をのぞいて、驚いたこなして上手寄りに來る。下手より漁師石足、みづら、筒袖ごろも、わら沓にて、物思はしげな體。）

石足（舞臺中央のそばまで進み）お佐用！

佐用（踏みとまつて、後ろ向きのまま）……

石足　お佐用!!

佐用　……

石足　いやだらうが、返事をして貰ひたい。

佐用（後ろ向きのまま）　はい。

石足　お前は人を尋ねてゐるのだらう？

佐用　はい、——然し、あなたては御座いません。

石足　それは云はずと知れた薄情者のことだ——おれの樣な漁師風情の、この石足などは相手にせず、けふ三韓へ出發の遠征將軍、大伴の狹手彦を追ひかけてゐるのは、おれも聽いて承知したわ。

佐用（向き直りて）　それがあなたに何の關係が御座います？　わたしの自由を以つてわたしの自由な行ひ——それが何であなたに？

石足　そりやア、お前にも自由はあらう、然しまた不自由もあらう。

佐用　不自由とは？

石足　不自由も不自由、大の不自由。大將軍の狹手彦と云ふても、旅から旅への渡り者だ——漁師のおれをそれと乘りかへたはよかつたが、渠はお前の思ふ通りにはならず、けふ三韓へ任那征伐に出發——連れて行つて貰ふことも出來ず、おまけに、ここ僅か一二週の時化時の間の樂しみを一生の思ひ出に、別れてしまはねばならぬといふことではないか？——氣の毒でもあれば、笑止でもある。

佐用　笑止でも、氣の毒でも、あなたの關したことては御座いません。——棄てて置いて貰ひましよう。（と、横を向く。）

石足　いや、棄てて置いては、この石足の胸の中が納らぬ。僅か一週間や二週間の、旅のやどりて、時化のなぐのを待つ間のなじみてあつたのてはなし、おれのうらみだけても充分聽いて貰はう。

佐用（ふり向いて）　わたしにこそ恨みはあれ、あなたに何の云ひ分が御座いましよう？　十年、二十

年の仲ではなかつたにせよ、四年、五年の間は、あなたとわたしとは命ち懸けての戀仲。あなたが漁師なら、わたしも海乙女――人目を忍んで、毎夜の逢ふ瀬を樂しんだのも久しいこと。親の許しがない爲め、長らくの苦しい相引きでは御座いましたが、人に知られてからは、笑はれながらも、親を棄て、兄弟を棄て、世間を棄てての わび暮し――あなたに對する熱烈な愛があつたればこそです。

石足　それはおれも同じとだ――お前に對しての胸の（と、胸を打ちて）愛がなかつたなら、この年月を村の朋輩から馬鹿にせられはしなかつたらうし、また、けふも、わざ〳〵お前を追ふて來て、薄情者呼ばはりはしないのだ。

佐用　わたしをそれほど憎いと思し召したら、なぜ殺して下さいませんでした？

石足　殺すまでもなく、薄情者は浮氣者だらう――少し器量がよいので、佐用姫、佐用姫と呼ばれるのを鼻にかけ、甲のものから乙のものへ、乙のものから丙のものへ心を移して行くうちには、すべての男には棄てられ、世間からはほうり出され、結局は、野たれ死にするに定つてゐる。

佐用　さう思し召すなら、思し召してもよろしい。一たびあなたに棄てられてからは、もはや死んだも同前な戀の脱け殼――新たに狹手彥さまを愛したのは、もとの佐用ではなく、別な女で御座います。

石足　そんな淺墓な云ひ脱けを云ふたとて、戀をするからだは一つ、お前のからだ――それをずた〳〵に切り刻んでも、おれのかけら一つも今は出ては來まい。牡蠣や鮑の磯くさひ臭ひがするおれよ

りも、大將軍の鐙の裾がさぞよかつたらうよ。

佐用（つらいのを押へるこなし） よかつても、惡かつても、この佐用はもうあなたの物では御座いません。數へて見れば（と、考へながら）丸四年の年月を、わたしはあなたの犧牲になつてゐました。戀を仕かけたのはわたしからではなし――あなたが、あの（と、上手をゆび指し）松浦川の川口でけふの樣な秋の晴天に、蠑螺を一つ拾ひあげて、その貝の蓋の堅い如く、自分の心も變らないとおッしやつたのをまことと信じたればこそ、わたしは、それまで持つてゐた獨身の主義を棄てて、あなたの熱心なお情けに從ふたので御座います。

石足 お前も亦、よい春の夜の月のもとであつた、あの（と、下手を指し）玉島川の川上で、おれの手を握つて、暫時の間でもかうしてゐれば、海へもぐる苦勞も忘れて、心までが遠い松原の樣に霞むほど樂しいと云ふた。

佐用 如何にも樂しい世で御座いました。この虹の松原も（と、思ひ出多い樣子して）、あなたとわたしとの戀語りに、幾度這入つたか知れません。松のみどりのけむる時は、そのけむりの樣にやわらかな心と心とが永遠に結び合ふてゐたい――秋の松露がそこらあたりの松の根に出來る頃は、その松露の樣に淸く戀のしづくに結ぶ子が欲しい――などと語り合ふたのも、今ではみんな覺めた夢です。云ひ寄る人が多いなかを、あの年頃までも無事に切り拔けてゐたのは、わたしがみだらな女でなかつた證據――如何に賤しいわざでも、水くぐりをしてゐれば、人の情けに賴らないでも、女ひとりの

生活は出來ます。海乙女、海乙女と云はれる、その『をとめ』で世を送らうとする理想が破れ、あなたばかりに身をまかせたのも、ひとへにあなたを信じましたからのこと。

石足　その信じたといふのもうそだ。それほど云ふのがまことであるならば（と、かの女の言葉につけ込む意氣）、なぜ一朝一夜にして旅のものに乘り變へた、この浮氣者め！

佐用（憤慨のこなし）　わたしが浮氣者なら、あなたは薄情者で御座いましよう。海にも神さまはゐますと云ふて、あのおほ風の夜、この松原で、玄海灘の浪のしぶきを浴びながら、あなたとわたし、お前とおれは未來までも離れまいと、あれほどわだづみに誓ひ合ふたに、現世だけはおろか、たッた四年や五年のうちに、遊女風情のものに心を移すとは――!?

石足　それは順序が違ふ。おれが遊女に棄て鉢となつたのは（と、沈痛に、殘念らしく）、お前の薄情と心がはりがもとだ。お前も知つてゐる通り、おれが遊女がよひをするなどと云ふことはこれまでにないこと――酒も飲まなかつたから、酒に飲みつぶれることも亦これまでにはなかつた。それが七日や八日のうちにから燒けづくになつたのだから、その原因はお前の胸にあらう。とッくり考へて見て貰ひたい。

佐用（決然たる調子で）　いいえ、さうては御座いません。わたしが、村長さまの頼みにより、將軍さまの假やかたへお酌にあがつて急がしい間に、あなたはその僅かな間の寂しさを辛抱出來ず、飲んだこともない酒を飲み――

石足（憤然として）　いゝや、さうてはない！　お前が假やかたへ行つた切り幾日も歸つて來ないのを不思議に思ふてゐると、果して村のものがお佐用に將軍さまのお手が付いたと知らせて吳れた。

佐用　それはさうても御座いましようが、わたしが狹手彥さまのお手に就いたのは、あなたの心變りよりはあとのことてす。

石足　いや、何の云ひわけもするには及ばん。

佐用　云ひわけては御座いません、まことの事實てす。

石足　まことの事實とは――馬鹿なことを云へ！　おれはお前をこれほどに愛してゐるのに、おれから お前を棄てる樣なことがあるものか？

佐用（正直な怒りて）　現在、それがあつたては御座いませんか？　――わたしは、おやかたへあがつてゐても、あなたを思はない日は御座いませんてした。あがつたのは村長さまの賴み、あなたの御承諾のうへてすから、安心して行つてゐましたが、急がしい間にも、あなたがさぞ寂しからうと思へば、早く歸して貰ふ樣にしたいと、時化のなぐのばかりを祈つてゐました――それに、大伴さまが每夜の如く三韓へ一緒に行つて吳れいとのお賴み――村長さまから所天がないと聽かされたのを楯に取り、親切てはあつたが、そのうるささ。

石足　ふん、それて分つた。（と、おもくるしい冷笑）村長めが、將軍の氣に入らうが爲め、お前とおれが正式の結婚をしてゐないのをよい種にして、所天がないと云ひまぎらし、お前を將軍に取り持つ

たのだ。憎いはあいつばかりではない、——お前はその時なぜ（と、力のある恨み聲で）おれがあることを云はなかつた？

佐用（悲しさうに、然しはッきりと）　云はないのではない、云ふ必要がなかつたのです。狹手彥さまは遠征大將軍、その人のお手に就くのは、當り前から云へば、女として名譽でもあり、出世でもある。それにも拘らず、あなたとの特別な、苦しい、而も樂しみな關係があつた爲め、わたしの心は少しも動かなかつたので御座います。

石足（熱心に）　動かないて、誰れがお前と痴話ぐらう？

佐用　石足さん！（と、少し進み寄り）そんな穢らはしい言葉は置いて貰ひましよう。（と、悔しさうに、横を向いて、また離れ行き、半ば獨り言の樣に）お互ひにもとは潔い言葉と言葉とを以つて結び合ふた仲——

石足（追懷のおももちにて）　それは、もう、昔のことだ。（と、横を向き）お前に棄てられたこの石足は、二つの羽がひを射拔かれた鳥も同樣、——もとは、天驅けるほどな勢ひて、村のもの等のねたみ、そねみを心よく受けてゐられたが、今では全く地べたに落ちて、それ見たことかとばかり笑はれ、無精者とか、醉ッぱらひとか、ありとあらゆる惡口をつかれた上、きのふけふの樣に度々足蹴にされても、もう、何の敵對も出來ぬ身體だ。——張り合ひもなければ、望みもなし——意氣地もなければ、働く力もなし——手足の筋肉がゆるんで、毎朝、おれは（と、淚聲て）起きる氣にもならぬ。—

ああ！（と、下手へ離れ行き、胸に手を組んで、仰向き）生きてゐるのがうらめしい！

佐用（顔をそむけたまゝ） それも飲めないお酒を飲み、買ふたこともない遊女に溺れる結果でしようよ。なぜ、あの（と、舞臺後方を下手へ見て）人々と共に急しいけふそあの樣に働きません？

石足（そのまゝ、頸を垂れ） いや、みんなそれはお前の爲めだ！

佐用 わたしの墮落こそあなたの爲め。（と、おろおろ聲。）

石足（佐用の方へ向き） それでは、お前の云ふ通り、初めは將軍の狹手彥にも靡きはしなかつたのか？

佐用 無論ですとも！（と、向き直り、訴へる樣に）愛するあなたがあるのに、何で不足が御座いましよう？ 如何に將軍の賴みでも、わたしにはわたし一個の意志がある。それを動かすものは、ただあなたばかりで御座いました。――狹手彥さまのお賴みがうるさいほどな間を、心強く、無事につとめてゐましたのに、先づあなたの心變り――

石足 もう、分つた――おれが惡い！（と、鳥渡手の甲で淚を拂ひ）おれが餘り早まつたのが惡いのだらう。おれが先づ心變りをしたのなら、お前がおれよりも烈しい燒けを起して、浮氣をするのは、お前の氣性として、當り前のことだ。

佐用 さう云はれると、わたしも實に面目ない。――遊女でも、あなたはそれに就けば寂しい思ひは殘りますまいが、わたしが棄てられた以上は、これまでに積り積つた村中の女や男のそねみ、ねた

みが烈しい嘲りと一變し、わたしの寂しい獨り寢の夢にまで襲ふて來るに定てゐる。――ただ棄てられたと思ふたばかりに、一方には、わたしの身がもう亡きものになつたも同前とあきらめ、また一方には、寢ても寢ざめの惡い、起きても苦痛の紀念ばかりが多い、この村に住んでゐたくはないと、どうせ死んだも同前なわたしが、もとの海をとめに返るよりも――どうせ、また、一たび乙女を穢した以上、もとの純潔に歸ることは出來ないから――いツそのこと、あなたに代る保護者を――それもあなたより一層名譽ある保護者を――狹手彥さまに得て、戰地へつれて行つて貰ひ、弓矢の間にわたしの運命をまかさうと決心したので御座います。その決心もたツた二日前、おとといの晩のこと――然しそれが（と、聲を顫はし）、あなたのお言葉を承れば、わたしの（と、顫え聲を低め）思ひ違ひ――淺墓な仕わざ――もし、石足さん！（と、からだを顫はして、きツとなり）許して下さいませ！（と、領布を放し、兩手で取りつきに行つて、また控へるこなし。）

石足　おれがうらみを云ふたのは間違ひだ。（と、湧き來る涙を右の手で拂ひながら）許して呉れ、お佐用！（と、急にこれも取りつかうとして、また離れる。）然し、考へて見ると、お前とおれとの仲には、越えがたい大きな溝が出來てゐる。（と、横を向いて、悲しさうに下手へ一二歩。）

佐用（も亦上手へ離れ行きて、石足に背を向け、悲しみを堪へる樣子）　その大きな溝が今では二人の隔て――どうすることも出來ません。

石足（急にふり向きて）　出來ないとは、おれに愛想が盡きたのか？

佐用（鳥渡ふり向き、これも早口に） いえ、愛想が盡きるどころか（と、また聲が遲く、低く、然ししッかりと）、あなたの御親切は一生忘れません。

石足 それでは（と、少し乘り出し）、お前を鳥渡ばかりだまくらかしたあの狹手彥を思ひ切つたのか？

佐用 ………

石足 思ひ切つたか？

佐用 狹手彥さまはわたしをだましたのでは御座いません。

石足 でも、棄てられては、思ひ切つたか？

佐用 ……………

石足 返事がないのは思ひ切ることが出來ぬのか？

佐用 ………

石足 ええッ！（と、胸が煮えくり返るこなし）矢ッ張りおれは獨りだ！ なぜあんな浮氣者、畜生をんなを愛したのだ！ 馬鹿め！ このあたま――この手――この胸！（と、多少わざとらしく、やたらになぐりまわし、砂上に倒れて、もがく。）

（この時、下手、松のかげより大伴狹手彥古代の、筒袖ごろもに胴よろひ、かぶと、帶劍、毛沓にて、弓を以つて登場。後方の兵士や人夫の往來、暫く絶える。二人は狹手彥に氣がつかず。）

佐用（溜りかねて、石足に驅け寄り） 石足さん、許して下さい！ みんなわたしが惡かつたので御座います。許して下さい――わたしの罪で御座います。

狹手（近よりながら） いや、その罪はみなわしの爲めだ。

（二人はびツくりする。石足立ちあがる）

佐用 あなたは狹手彥さま、會ひたかつた！（と、取りつからうとして、今見られたことが恥かしいと云ふてなし。狹手彥と石足とに背を向けて、苦痛の體。）

石足（狹手彥を見つめて、全身に力を入れ） 大伴の狹手彥とはお前か？

狹手（泰然として） わしが大伴の狹手彥だ。

石足 おれからお佐用を奪ふたはお前だ。

狹手 如何にも――

石足（身を顫はして） この畜生！（と、飛びかからうとするを、狹手彥、手に持つ弓のさきにてとめる。佐用、おぢけづいた樣子。）

狹手 待て！――お佐用の情夫、漁師の石足とはお前のことであらうが、力づくては、弓矢の手前にはかなふまい。

（石足、狹手彥の弓さきを抑しのけて飛び込まうとしても、その弓さきがなか〳〵動かない。）

待て！――待て！

（と、云へど、なほ石足は押しのけようとするので）

待てと云へば、ええッ、待て！

（と、却つて狭手彦が弓のさきにて石足を押しのける。石足、よろけながら、後ろの方へ行つて）

石足　ちエー！（と、尻もちをつき、悔しがる。）

佐用（ふり向いて、胸のとどろくこなし）　もし怪俄でもしたら――（助け起しに行かうとして、控へるこなし。）

石足（起きあがりながら、充分うらみを籠めた目つきで、佐用を見て）　お前の不埒な爲めに、男一匹がこの業さらし！――軍人ばらの力づくにはかなはんでも、その力づくは人殺しが商買だ。お前もおれも殺されるなら殺されやう――おれは海の魚こそ殺せ、人間を殺しはせぬ――おれも棄てられたものなら、お前も棄てられた身だ――別な男、別な男と追ふて行つても、しまひにはよいとはない。いッそのこと、おれも許すから、お前も許して呉れて、殺されるなら、ふたりで殺されやう――さア、いのちに懸けて（と、佐用に進み行き）、一緒に來い！（と、佐用の手を引ッ張る。）

佐用（引ッ張られるまゝに、下手寄りへついて行き）　まア、まア、待つて下さいませ――聽いて貰ひたいことが御座います。

石足（きッとなつて、踏みとまり、佐用の手を引いたまゝ）　まだそんなことを云ふのか？

佐用（顔をそむけて）　はい、是非聽いて貰ひたいことが御座います。

石足（佐用の方をにらみつけて）　まだ、あの、あんな弓矢に未練があるのか？

佐用（そのまゝ）　いえ――はい、未練では御座いませんが、今となつては、もう（と、離れた方の手て領布を以つて涙を拭ひ）、あなたと一緒には住めません。（と、引かれた手を引き拂はうとする。）

石足（ジッとにらんで、胸の鼓動を激しくしてゐたが）　ええッ、この不貞腐れめ！（と、佐用の手をふり拂ふ。）

佐用　は、あッ！

（と、佐用は泣きつゝ上手の方へよろけ行きて、倒れる。石足、それをうらめしげに見つめて、胸の鼓動を一層烈しくする。）

狭手（両者の間に進み出て）　石足、さぞ佐用が憎からう、なア？（と、額に暗いかげを生ずる。）

石足（狭手彦に背を見せて）　憎からうが、憎かるまいが、お前の知つたことではない。

狭手　いや、石足、わしはお前を恥かしめる爲めに云ふのではない。――佐用が憎いのは、お前もわしも同じだ。

石足　うむ！（と、向き直る。佐用も、鳥渡ふり向く。）

狭手　さ、さう云ふだけでは分るまいが、わしもかの女は見限つたのだ。

（佐用、之を聴いて、うらめしさうに起きあがる。）

遠い三韓までも征伐に行くからは、寂しい心を慰めるつれ添ひがあつたらと、村長にその意を含めて

置いたら、佐用姫といふ村中ての美人があつて、幸ひそれが獨身者だといふので、直ぐ假やかたの酌にあげたところ、不埒にも男持ちだ。(と、佐用の方を見る。)

佐用(狹手彥の目に出くわして、顏を赤めたが、然しまた不平さうに) それは村長さまがうそを云ふたので御座います。

石足(躍起となつて) うそとは——矢ッ張り——ええッ(と、身をもがき)、よくも、よくも、おれをないがしろにする! このすべッた阿魔め!(と、拳を握つて、打ちに行かうとする。)

狹手(石足をさへぎつて) こら、云ふことを云はすがよい。(佐用に)うそとは?

佐用(石足にはかまはず、狹手彥に) う、うそとは、村長さまが云ふたと云ふので御座います。

石足(また飛びかからうとして、狹手彥に押へられながら) そ、それがうそだい!

佐用(石足に) あなたは默つて聽いてゐるがよろしい。(狹手彥に)石足さんとわたしとのもとの仲を、村のものらと同樣、村長さまもうらやみ嫉んで、——もしさうてないなら、あのお方も、村のものらがわたし等二人の仲を裂かう〳〵としてゐるのをよいことにして——さうとは、何にも知らぬわたしを、假おやかたへあげたので御座います。

石足(う、む! (と、一步あとへ引いて、うなづく。)

狹手 それて、お前がわしの云ふことを聽かなかつたわけは分るが、船出も出來ぬ十日餘りの時化が過ぎた跡て、いよ〳〵出發が出來さうになつてから、あのおととひの晩、わしに身をまかせて(石足、

身を顫はす)、心も靈も皆わしに獻上すると云ふたてはないか?

佐用(はッきりと) はい、申し上げました。

狹手 して、お前の器量と年頃で、獨り者とは疑はしいから、内縁の所天とも云ふべき戀人もないのかと念を押すと、いさぎよく『それも御座いません』と返事したてはないか?

佐用 はい、その時には、もう、わたしにそんな者はなかつたので御座います。

石足 ウッー(と、うなつて、苦痛の體。)

狹手 それては、この(と、石足をゆび指し)男は何物だ? この石足は?

佐用(鳥渡石足を見て、直ぐ顔をそむけ) もとの戀人て御座います。(と、目をしよぼつかす。)

狹手(うらみを帶びて) いや、もとの戀人どころか、今でも執着が深からう。

(佐用、心情を穿たれて、云ひわけのないこなし。)

わしも、深い、深い心の奥には、お前が一度は取りにもぐッて行つたこともあらう海の眞珠貝の如く、お前の優しい姿をひそませてあつて、お前を見初めた時から、忘れるに忘れられず、取り棄てるに取り棄てかね、そのふお前にいとまをやつてからも、晝はうつつ、夜は夢ばかり――寢るにつけ、起きるにつけ(と、目をしよぼつかせ)、思ひ出すはお前のことばかりだ。――

佐用(訴へる樣に) それほど思ふて下さいますに、わたしもそのふ下らして――(と、泣いて、手を顔に當てる。)

狹手　それには、また、深いわけがある。――わしがお前を靡かせたのは、お前を風のまにまに漂ふ浪の藻くづと思ふてではない。

佐用　わたしも心からあなたを愛してゐます。（石足、また憎いといふ體。）

狹手　いや、愛されるにも工合があらう。義理一遍の愛を受けるのなら、わしには都に妻がある。その妻は早くから戀の血が涸れ、愛の情けが動かず、わしの胸にぴッたりと合ふて來ないので、わしはもッと若い心持ちの女を得たいと思ふてゐる。その矢さきゑ、遠征の途中で、時化のなぐのを待つ間に、お前を發見したのは、あらしの神の賜物でもあらうと、わしの大事な任務はさて置いて、それを神に感謝したくらゐ。――然しそのお前はうそつきだ。僞りを云ふた。

（と、言葉に力を入れる。佐用、おぢける。）

わしにどれほど愛されたいとて、言葉に僞りがあれば愛ではない。一たび棄てたものでも、戀人があつたとすれば、それを明して置いて呉れるのが後々のさはりにならぬ。

佐用　明して、それが何になりませう？

狹手　前以つて明して呉れれば、わしも女をもてあそぶ男ではなし、人の物を奪ふたと云はれる樣なことはなかつた。

佐用　これほどまでにあなたを愛してゐましても？

狹手　それは止むを得ない。（と、斷言したが、憂ひの體。）

石足　こら、お佐用！（と、憤激したが、多少冷淡に）默つてゐれば、べら〳〵と都合のよいことばかりぬかしやアがる！この（と、鳥渡狹手彥を見て）大伴氏に棄てられたのを、一つには、可愛さうにも思ふて、おれともとの通りになれと云ふと、つけあがつて、おれを一生愛すると云ひ、今はまたそッちに心が移る――よい加減な出鱈目は置け！　女と云ふものは、たとへ男が少し間違ふたことをしても、さう短氣にわが儘を仕出かすものではない。どれほど氣性が引き立つてゐても、お前の樣に移り氣が出來ては、棄てられるのが當り前――遊女の持つ樣な愛情なら、二つは入らぬ――新らしい方がよい。ああ、今といふ今、おれのあきらめが付いた。（と、そッ方を向いたが、また狹手彥に向ひ）お前にこの阿魔めがおれのあることを隱しそうさうとしたのは、おれが漁師であるのをさげずんてかも知れぬ。

佐用　石足さん、そんなわけては御座いますまい――あれだけ云ふたのに？

石足　云ふも云はぬも、根本あきらめた――三韓へ行けぬなら、玄海灘の底へでも沈め！（と、石足、佐用を尻目にかけて、行きかかる。佐用、それに近よらうとして、また上手寄りに行つて、反省する體。）

狹手　石足！

石足　…………

狹手　石足!!

石足　…………

狹手　石足!!!

石足　…………（無言て、踏みとまり、ゆッくりふり向いて、狹手彥を見る。その目つきは急におそろしみを增す。）

狹手　お前こそ短氣であらう——先づ、さうおこらずに、わしの云ふことを聽くがよい。

石足　いや、お前とおれとは、云はば、色がたき——お佐用の心とからだには、お前が實際の勝ち手だ。

狹手（憂ひを含んだ微笑て）　いや、さうてない。お前を勝ち手にしてやりたい爲め、呼びとめるのだ。

石足（半ば獨り言の樣に）　おれを呼びとめたとは、穢されたお佐用のからだがもとの通りに直るものか？

狹手（佐用に近づき）　お佐用、わしが出發する時刻も段々近づいて來る。

（佐用、困つたとあわてる體だが、然し發言しかねてゐる。）

ここて會ふたを幸ひ、今一度、わしはお前にいとま乞ひをしたい。きのふ、お前を下らす時にも云ふて置いたことだが、たッた一夜の許しても、お前の心をわしの胸に刻み込んで呉れたのは滿足だ。若しこの滿足を、お前と共に、ふたりのいのちのあらん限りつづけることが出來るなら、わしも最も結構に思ふ筈だが、悲しいことには、それが出來ぬ。わしがお前を、遠征途中の無聊の餘り、一夜妻に

じたのでないことは、お前身づからもよく知つてゐる筈——（と、目に涙を帶びて）然し、約束に背くやうだが、お前をつれて行くことは出來ぬ。——わしも、もう、戀にさわぐほど若くないだけに、若し愛を受けるなら、全心の愛を受けたい。わしばかりに全心を籠めて呉れる愛を受けたい。——今が今まで、松の樹かげて立ち聽きするまで、もう一度お前に逢ふて、それが出來るか、どうか、聽きたかつた。——

佐用（目を狹手彥の方にあげて）　きッと出來ますから、どうか、つれて行つて下さいませ——わたし、それをお賴みしたいと、あなたのお跡を尋ねてゐたので御座います。

狹手（おもい、深い聲て）　氣の毒だが、それが出來ぬ。と云ふのは、今の樣子を見ても分る通り、わしがきのふわしの家來の報告て知つたよりも、もッと深い事情つきの戀人がお前にはある。お前達ふたりの今の話と樣子とても分る通り、お前がわしを愛することが出來ると云ふのは、お前が反抗的に石足に對する失戀の腹いせをする爲め、位も位置もある正直なわしをその踏み臺にするも同樣だ。反抗してゐるだけ、石足に對してまだ未練が深いことが分る。お前には、それがもうもとの戀人に過ぎないと云ふたにせよ、お前の事情は戀を戀するだけて濟むまでの時間をまだ經過してゐない。まだ實際に戀しい人があるのに、わしを愛したり、愛させたりするのは、浮氣なら知らず、お互ひに間男も同樣——

佐用　　くッ！（と、齒を喰ひしめて、泣き聲を隱す。）

狹手　わしにはそれが出來ぬ。石足のあはれな、失望した樣子を現在目の前に見ては、なほ更らそれに忍びられぬ。——然し、お前を、おととひの約束通りつれて行けぬ樣になつた代り、今わしが思ひ付いたことをお前達ふたりに聽いて貰はう。(石足に向ひ)石足、こちらへ來い。

石足　……　……

狹手(石足に進み行き、その肩をとらへて)　こちらへ來い。

石足(とらへられた肩を振りはづして)　何しやアがる!

狹手　さうおこらずに——おこることがあるなら、跡でいくらでもおこるがよい。(と、また石足の手をとらへ)まア、こちらへ來い。

(と、狹手彥、石足を無理に引ッ張る。石足、いや／＼ながら、引ッ張られるままに進む。)

お前も少しこちらへ來い。(と、狹手彥、佐用に命ずる。)

佐用　わたしは石足さんのそばへ寄るのはいやで御座います。

狹手　まア、さういふな。(と、佐用の手を引く。)

(佐用も、無理に引かれ、優しい手に引かれつつ顏を赤くして進み、石足と舞臺中央に於て相向ふ。狹手彥、その間に當る後方に立つ。)

わしは今お前達ふたりに同じことを云ふて聽かす。お前達がわしの爲めに久しい間の戀仲を裂かれたのは、わしは如何にも氣の毒に思ふ。若しわが君の使命を帶びてをらぬ身なら、この場でわしが二つ

裂きにされても苦しくない。然しわが君の使命はわたくし事の爲めに妨げられぬから、わしは兎も角寂しいままに、からだだけても三韓へ渡るが、その跡ては、(悲しみの體て)いつ打ち死にするとも計られぬ弓矢の人などをかたきとも見ず、また戀の目あてともせず、ふたりは元の通り仲よくなつて貰ひたい。

石足(輕蔑の意を見せて) 元の通りにするなら、お佐用をも元の通りのからだにして返せ。

佐用(石足に) 元の通りにならうが、なるまいが、わたしは、もう、あなたの物ては御座いませんよ。(狹手彥に、歎願を含みて)御もッともらしい仰せては御座いますが、わたしは今更ら石足さんとの仲は直せませんから――

狹手 いや、元の仲にと云ふのてはない――元のことは互ひに忘れてしまひ、今初めて逢ふたものとして、わしをお前達ふたりの仲人に見て貰ひたい。

石足(ます〳〵輕蔑の調子て) そんなたわけた眞似事が出來るものか?

佐用(いよ〳〵歎願的に) わたしは石足さんを根本思ひ切りますから――

狹手 それては、わしが困る――わしばかりが罪人にならねばならぬ。

石足 知れたことだ。お前さへなかつたら、お佐用は穢れはせなんだのだ。――お前は浪の藻くづとは思はぬと云ふたが、お佐用は、もう、藻くぞだ――三韓までも、そのあくぞ藻くぞを拾ふて行け―

佐用　どうせ、墮落したも同前な女ひとり——拾ふたと思し召し、御一緒につれて行つて下さいませ。

狹手（深き苦悶の色を見せて、半ば獨り言の様に）　如何に知らずして行ふたこととは云へ、その結果は間男と同じ罪惡——良心が責める！　お佐用が事を隱してゐたのがうらめしい。ああ（と、兩手を廣げて天を仰ぎ）、たとへふたりに恨まれても、わしも亦（と、下を向き、兩手を胸に當て、）心の底には、深い、深い恨みが殘る。——ふたりがさう云ふつもりなら、もう、この上にわしの力は及ばぬ。——ああ！　かうしてゐるに堪へられぬ！（と、石足の前を通つて、下手へ行きかかる。）

佐用（一歩を進めて）　狹手彦さま！

狹手　…………（無言て、一歩。）

佐用（また一歩して）　狹手彦さま!!

狹手　…………（また一歩。）

（狹手彦、佐用、下手へ進むに從ひ、石足は、それをおそろしい憤怒の目つきて見ながら、一歩づつ上手へまわる。）

佐用（また一歩）　狹手彦さま!!!

狹手（踏みとまりて、背を向けたまま）　もう、聽くことも、云ふこともあるまい。（と、うらみを含む聲。）

佐用　いゝえ、云ふてとは澤山御座います。(と、調子を低め、顫はして)澤山あつて(と、半ば獨り言の樣に)胸一杯!(と、溜め涙をこぼして、橫を向く。)

狹手(見向きもせず)　聽く耳はない!(と、急ぎ行かうとする。)

佐用(あわてて)　まア、待つて下さいませ!(と、驅け行きて、すがり付く。)

石足　ああ!(と、上を向き、兩手をかしらにあげ、髮の毛を燒け握りにして)おれの運命も定つた! いツそのこと、三韓の奴となつてゞ、あの狹手彥とお佐用とを射殺して見たい!(と、悔しさうに、よろ〳〵しながら、上手の後方に退場。)

佐用　待つて下さいませ。待つて下さいませ。

(と、佐用、狹手彥の胸に顏を當て、兩手を同人の周圍にまわして、舞臺中央に引ッ張つて來る。狹手彥、情愛にほだされ、佐用のするがまゝになつてゐる。)

佐用(狹手彥を胸から見あげて)　わたしの隱してゐたことが惡かつたので御座います。どうか許して下さいませ。

狹手　……………(返事をしないで、上から佐用の顏を見つめる。)

佐用　ええ(と、見あげたまゝ、歎願的に狹手彥をゆすり動かして)どうか許して下さいませ、してわたしをも一緖につれて行つて下さいませ。ええ――ええ――ええ、狹手彥さま。

狹手　……………(返事をしないで、兩眼に淚――その一滴が下から仰いでゐる佐用の頰に落ち

る。)

佐用(も釣り込まれて)　狹手彦さま!(と、情の籠つた訴たへ聲。)

狹手　ああ!(と、佐用を兩手で押さへて、天を仰ぐ。淚、その頰を傳ふ。)

佐用　返事がないのは、矢ッ張り、わたしを憎いので御座いますか?(と、淚を目に一杯。)

狹手(右の手をあげて、仰いでゐる自分の兩眼を拭ひ、下を向いて、左の手で佐用を押へたまま、右の手の袖を以つて佐用の淚をも拭つてやり、急に)　ああ、これまでだ!

(と、佐用を右の方へ押しのけ、自分は上手へ離れ、仰向き加減に胸をそらして、佐用に背を向ける。佐用、下手へ來て、自分でも兩手を目に當て、狹手彦に背を向けて、下向きになる。いづれも烈しい苦痛の呼吸。——無言を破る浪の音、舞臺の前面に白浪寄せる。——山麓に、空手の人夫、あまた、上手の方に歸つて行くばかり。貝の音が下手から響く。)

狹手(貝の音に氣が付いたてなし)　あのほらの音は出發の第一合圖——第二の合圖が鳴れば、直ぐ船出。——

佐用(あわて行きて、また狹手彦にすがり)　一緒につれて行つて下さいませ!

狹手(强い聲にて)　ならぬ。

佐用　可愛いとは思し召しませぬか?…(と、やわらかに狹手彦を見あげる。)

狹手(わざと見ぬ振りをして)　可愛ければこそ、この苦痛!　一生の思ひ出!　わしはこれで本望だ。

ただ殘念なのは、石足があつたのを知らなかつたこと――必らずしも反抗的に浮氣ッぽいお前の落ち度には限るまいが、おれを無情とは恨んで呉れるな。君命を帶びた此の身が、使命の途中で、人の女を取つたと云はれるのは、わが君に對して申しわけがない。わしがことはさらりと忘れて、あの石足と元の通りになつて呉れ。――賴む！（と、佐用を誠實な眼つきで見る。）

佐用（左の手で狹手彥を捕へたまま、右の手で自分の頒布の端を握りながら、目を下に向けて）　さう云ふ優しいお心を承はりますと、なほ更ら石足さんには歸れません。

狹手　それは却つてわしの苦痛を增すばかり――

佐用　わたしも苦痛は增すばかりで御座います。

狹手　同じ苦痛を受ける樣になつたのも、お前とわしとの戀の運命――たッた一夜が一生の別れ！――どうせ、三韓のいくさで死ぬか生きるか分らぬ身を（と、急に早口になり）必らず恨んで呉れるな！（と、佐用を上手へ押しのけて、下手へ驅け行かうとする。）

佐用　狹手彥さま！（と、追ひかけ、またすがりつく。）つれて行つて下さい！

狹手　放せ！（と、佐用を力強く押しのける。佐用、舞臺中央のところまでよろけ行きて、倒れる。）

佐用　はア！（と、泣き崩れる。）

狹手（あはれみの目つき深く、佐用の方を見て、而も強い調子で）　わしの方がさきへ戀を戀する身とならうぞ。

（狹手彦、下手へ退場。山麓を兵士數名、急いで、下手へ行くのが見える。その跡につづく人影なし。浪の音、白浪の寄せ。――第二の合圖、貝の音聽える。）

佐用（そのほらを聽いて、起きあがり、狹手彦のゐないのに氣づき）あのほらの音が、もう出發か？――つれて行つて下さい！（と、懸命の樣子にて、下手へ驅けて這入る。）

（石足、上手の奥より、苦痛に疲れ切ッた樣子、髮を亂だし、半ば狂亂の體にて登場。跡より漁師二名、髮を後ろて藁結びにし、徒足て追ふて來る。）

石足（舞臺中央に來たり、兩手て自分のかしらの髮の毛を燒けに握り、無念さうに）もう、死ぬまでだ！　死ぬまでだ！　おれの爲めには、海も涸れた――松原も消えた！　戀をしたのは、この腕か？（と、右の手て左の腕をなぐる。）この胸か？（と、兩手て胸をなぐる。）ええッ！（と、身をもがいて、砂上に倒れ、投げ出した兩足て砂に足ずりする。）

漁師甲　それ見たことか、石足、とう〳〵、あの薄情なお佐用に棄てられたてはないか？――とう〳〵、棄てられやアがつた。

漁師乙　棄てられたも、棄てられぬもない――大伴氏とお前とては、月にすッぽん、丸て釣り合ひが取れぬ。

漁師甲　お前達はみな因業もの――お前がお佐用に棄てられたら、お佐用はまた大伴氏に棄てられた。

漁師乙　お前達夫婦があんまりええ氣になつて、愛だとか、戀だとか、――
漁師甲　理想だとか、純潔だとか、――
漁師乙　珍文漢なことばかり云ふて、村のもの等を馬鹿にしたから、――
漁師甲　さう云ふと、お前達はおれ達のそねみからだと申しわけをするが、さうではない。
漁師乙　その報いは覿面に來て、お前達からお前達の身を持ちくづして行くてはないか？
漁師甲　お前は酒ばかり食うて、遊女におぼれ、――
漁師乙　お佐用は他の男とくつついて、その男からも見限られた。
漁師甲　それも止むを得ない應報――村の名物、お姫さま夫婦がなくなつて、惜しい物だ。――
　氣味がよいわ。
漁師乙　氣味がよいわ。
漁師甲、乙　は、は、は、氣味がよいわ！
　（漁師甲乙、こわ〴〵そばに行つて、石足をからかつてゐると、）
石足　ちエ――あ、あア！（と、聲をあげて悔し泣きをする。）
漁師甲　何を泣くのだ？
漁師乙　何を吼えるのだ？
漁師甲　お前も男なら、村のものと一緒に働らけ。こら！（と、右から石足を蹴り）きのふけふの樣

な急がしい日にも、お前ばかりはぐたり、ぐたりとなまけてゐる。

漁師乙　こら！（と、左からまた蹴りて）男なら、しッかりせい。こんななまけ者があるのは村の名折れだ。

漁師甲　村中での力持ち、眞面目なかせぎ手と云はれたものが、笑止にも、このざまは何だ！（と、右から石足の顋をはねて、左へ倒す。）

漁師乙　こら！（と、左からまた石足の頸をはねて、右へ倒し）お佐用に棄てられたのが悔しうて、さうのめ〳〵となまけるくらゐなら、いッそくたばつてしまうがよい。

（石足、漁師兩名のするがまゝになつて、悔しさと悲しさとをこらへるこなし。）

漁師甲　丸て死んだも同様だ。——つれて行つて、村のものらに見せてやらう。

漁師乙　それがおもしろからう。

漁師甲　さア、しッかりしろ！

漁師乙　さア、起きろ！

（と、兩名、左右より石足をおもさうに抱き起す。）

石足（起されるが早いか、たまりかねた様子で）もう、おれのいのちもない！（と、足もともあぶなかッしく、踏み出して、浪打ちぎはに進み入る。浪、石足の裾を濡らす。）

漁師甲　あぶない！

漁師乙　あぶない！

(漁師甲乙、異口同音に叫んで、進み行き、石足を左右よりとめる。下手より、貝の音、漕ぎ出した船々より數多く起る樣子。)

石足(聽き耳立て)　お佐用も出たか？——もう、死ぬまでだ、放して呉れ！　放して呉れ！

(石足、兩人の手を振り切つて、浪ぎはをうろつく體にて、下手へ這入つて行く。漁師甲乙も、「あぶない、あぶない」と云ひながら、その跡について這入る。下手より、諸船の貝の音、少し遠く響く。)

佐用の聲(下手より、遠く)　つれて行つて下さい！

(貝の音、一段遠く響く。)

つれて行つて下さい！(と、少し近くなる。)

(貝の音、さらに一段遠くなる。)

つれて行つて下さい！(と、また一段近くなる。)

(貝の音、ずッと遠くなる。佐用、登場。)

佐用(沖の方に目と心とを奪はれて、血色青白くなり、兩手て浪うつ胸を押さへ、左の方にからだを傾け進みながら)　つれて行つて下さい！

(佐用、息ぐるしさうにして、舞臺中央に來たり、目を沖の方に据ゑて、なほ上手へ寄つて行く。)

浪の音、白浪の寄せ。）

石足の聲（下手より）　お佐用、お佐用！

漁師甲乙の聲（下手より）　待て、待て！

（石足、下手より、半ば嬉しさうな狂亂の體にて、登場。舞臺中央まで驅け行いて踏みとまり、じッと佐用をみつめる。漁師甲乙、跡より驅け來たる。）

漁師甲　待て、石足。

漁師乙　つかみ合ひてもする氣か？

（と、兩名、石足を左右より引きとめる。佐用、それに氣が付くと、急いて、その前方を下手へまわり、石足はまた漁師兩名に引かれて、佐用の行動と同じ速度て、後方を上手へまわり、石足、佐用、ずッと開き合つて、向ひ合ふ。しばし無言。白浪の寄せ。）

佐用（石足の樣子の變つたのに驚いたと云ふ樣子て、早口に）　石足さん、その樣子はどうしたので御座います、秋の景色が急に變り行く樣な？

石足（少し顏色をやわらげて）　お佐用、つれに離れた秋とんぼの樣にゐ殘つて呉れたか、許して呉れ！　みんなおれがわるかつた。

佐用　惡いも惡くないも――（と、やわらかに云つたが、氣を變へて、横を向き、あはれむ樣な、悲しむ樣な、然し強い低い聲て）あなたを愛したのは、もう、過ぎ去つたこと――今更らわたしの

意志は動かせません。

石足(漁師兩名にとめられてゐるからだをもがきながら)　ては、矢ツ張りおれを棄てたのか？

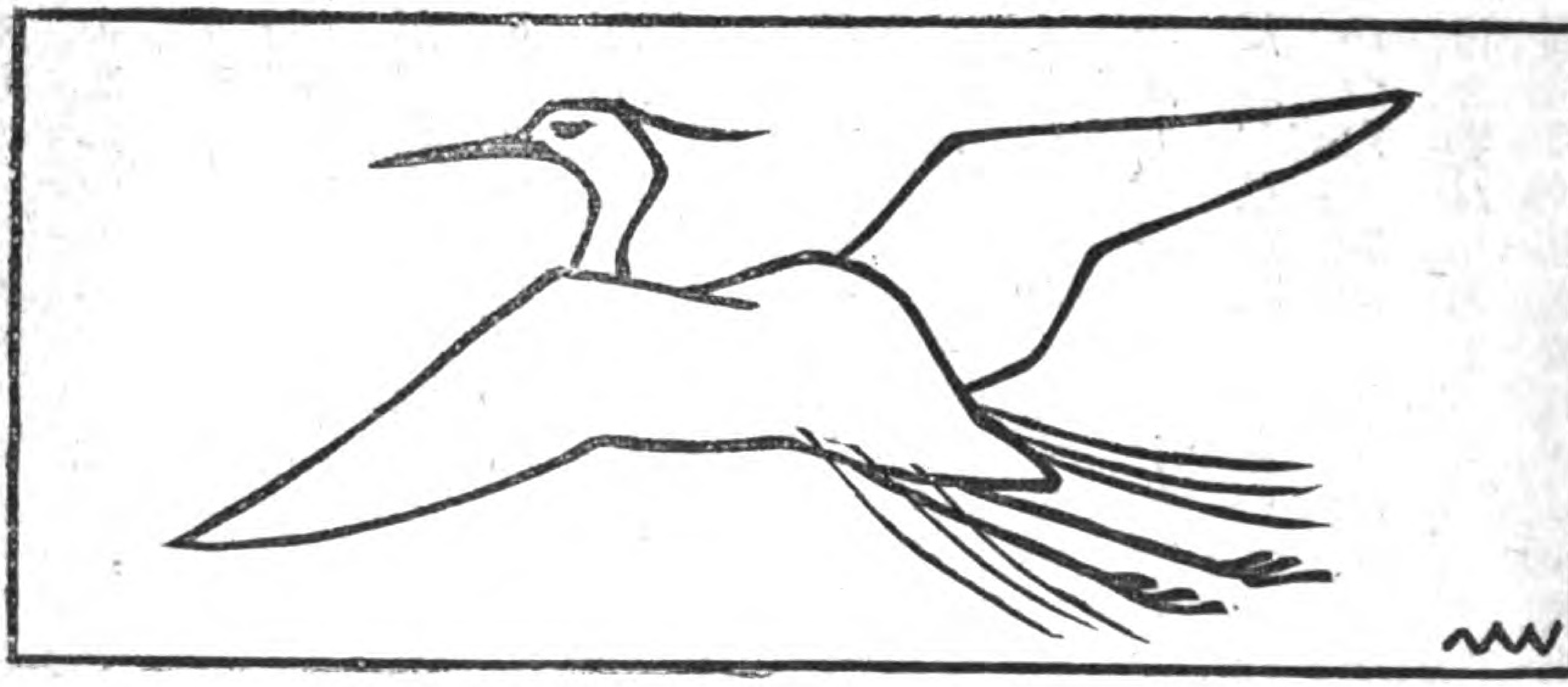
佐用(石足の方に向き、はツきりした悲しみの聲て)　棄てたのは、あなたもわたしもつらい同じ事情！　石とも化したわたしの心、今更ら動くわけは御座いません。(と、沖の方に注意をやる。)

石足　ては、これが最後、お佐用！

(と、石足、飛び出して、なつかしさうに、佐用に抱きつかうとして進む。漁師兩名、それをとめながら、ついて進む。佐用、ふり向いて、渠等を舞臺の後方から上手に避ける。石足は、漁師兩名に取り押へられながら、下手より佐用を見つめる。佐用、沖の方ばかり見て、足も浮きさうな樣子。そよ風吹き來たりて、佐用のころもを拂ふ。)

佐用(沖を見つめて)　つれて行つて下さい！つれて行つて下さい!!(と、叫びながら、上手、巖のそばに駈け行き、巖の上にのしかかつて、最も熱心な見つめ方をして)狹手彥さま、つれて行つて下さい!!!

(と、顏をうは向き加減につき出して、右の手て領布を振る。石足、砂上に、佐用の方を向いて、足を投げ出し、悔しさうに顏を下手前方に向けて、足ずりする。漁師兩名、氣味がいいと云ふ見え。白浪の寄せ、浪の音にて幕。)



友情

正宗白鳥

最早仲間内の記憶からも薄らいてゐる大辻順一の事を、或作家が小説に仕組んで、或文學雜誌に掲げたさうだ。私は讀みたいと思ひながら、まだそれを讀んでゐない。しかしその作家ほど大辻の事を描くに適した者はなからう、その作は隨分主人公の眞相を穿つてゐるだらう。と思はれる。彼等二人は少年時代からの親友であつた。大辻の慘ましい臨終前は、多少その作家の世話にもなつたと聞いてゐる。

私は小説の噂から大辻の事を思出し、その作家と大辻との關係をも思出した。大辻は私に向つて折々その作家の性行を話し、人物評

をもした。臨終前の端書や手紙にもチョイ〳〵書いて來た。私は懇意でもないその人の行爲にさして興味もなかつたが、大辻は書かないては腹の蟲が收まらぬといつたやうに、左右の知人のことを彼此と書いて來た。隨分ひどい批評も下してあつた。私は一度だつてそれを文字通りに信用しないて、むしろ大辻の僻みだと思つてゐた。病氣のさせる我儘からだと思つてゐた。

が、私は此處で大辻と他の友人との關係を忖度して見やうとするのではない。只私自身と彼れとの交はりを回顧して、記憶の一部を書かうと思ふのである。彼れは私を割合に親しい友人の一人としてゐたのに違ひない。不平をも窮狀をも隱立てせず、備さに訴へて來たものだ。

私が大辻順一といふ名を知つたのは、上京後間もないことて、學校の揭示場に、月謝滯納者の一人として殆んど毎月その名が出てゐた。後て友人から聞いて、その男の私とは同縣人て、可成の放蕩者てあることを知つた。五六年後には彼れが大坂の或雜誌に、熱情の籠つた文章て、友人の作物に對する惡評を辯護し、その天才を紹介したのを讀んて、文章の巧い人だと思つた。

だが、私が初めて會つて、交際の緒を開いた時は、最早放蕩者てはなかつた。文章に左程情熱も見えなかつた。艶聞を新聞紙上に暴露されて、文壇や知人の間てさま〴〵の噂をされてゐた當座て、痛々しいほど萎れてゐた。

間もなく私と彼れとは前後して、或出版部に奉職して、同じ机に差向ひて編輯事務を執ることゝなつ

たので、交りは次第に深くなつた。脊の高い頬の膨れた彼れと、脊の低い痩せた私とは、屢々相並んで市中を散歩した。芝居や小説の批評をして夜を更かしたこともあつた。その頃大辻は須藤といふ作家の小説に感心して、折々口を極めて褒めてゐたが、或夜私が寝床に就いてゐる時分に訪ねて來て、

「僕は今日須藤君の家へ行つて來た。一日話込んで、妻君の拵えた洋食の御馳走にもなつた」と、不斷にない元氣のいゝ聲で云つた。

私は須藤のやうな文壇の大家と、食事を共にして打解けた話の出來る彼れの身の上を羨んだ。

「話振りも面白い人だ。文藝に對して生命を捧げてる人だから、その話になると夢中になつて來る。あれだから一行一句の文章にも力が入つてるんだ」と、大辻は突掛け〳〵須藤の作物を褒め出した。同じ地位の外の大家とはまるで比較にならぬやうに云つた。「外の大家は抽象的な文字をよく使つて、物を描くことを疎かにするけれども、須藤君のは何時も具象的で目に見るやうに書くからね。そのためには隨分苦心してゐる。銘酒屋の一時間といふ短篇を書くために、一月の間毎日銘酒屋へ通つたんださうだ」

「さうかねえ」と、私は只謹聽して、創作に從事するの苦しさを想像してゐた。大辻の話に一點の非難をも挿まうとはせず、一々尤だと思つてゐた。

「一體どう思つた、かう思つたと書くのは寫實主義から云へば避くべきことで、外形の事物で人間の心の中も自然に顯はれるやうに書かなくちや駄目だ。須藤君は其點で非常に苦心してる。そして僕が近松の重井筒にある「どうか斯うしやうが酒、いりつく樣に氣がなつて、胸かきまはす玉子酒、心二つに打

ち破つて、君が方へと走り行く」といふ文句を話して、あれが德兵衛の迷つてる心の有樣を、外物でよく現はしてると云つたら、須藤君非常に喜んで、いゝ事を敎へて呉れたと云つてた」と、大辻の顏にも得意の色が顯はれた。話は十二時過ぎまでも續いた。

その翌日、出版部で出會ふと、彼れは須藤から新作を寄贈されたから、批評を書くんだと云つて、仕事の間々に讀んでは、鉛筆で印をつけなどしてゐたが、批評は翌月の雜誌に揭げられた。彼れが編輯してゐる誌上二十頁にも渡つて細かに論ぜられた。重井筒の文句も圏點つきで引用されてゐた。私は久振りで輿に乘つた大辻の文章を讀んだ。そして須藤の新作の妙所をその批評に照らして味はうとした。

三月ばかり出版部に勤めてゐる中、大辻は社會に批評家としての技倆を認められたのか、或有名な書店の文藝雜誌編輯員に聘せられた。「活動するのはこれからだ」と、彼れは場末の緞帳から急に檜舞臺へ出たやうに喜んだ。月給も多い、手當も充分だ、編輯主任は譯の分つた好人物だ、雜誌の基礎も堅いと、口を極めてその書店を褒めて、微塵も其處に缺點を認めなかつた。

「僕ももつと働甲斐のある仕事をしたいなあ、何時までも出版部で愚圖々々してちや仕方がない」と、私は友人の立身を羨んだ。彼れほどの文才のないのを悲んだ。

「君も大に書きたまへ、僕の雜誌へも時々書いて呉れたまへ、君の文章は粗雜でも、惡い癖がないから、將來有望だよ、須藤君も君のシエーンキウイツチの短篇の飜譯を褒めてた」と、大辻は私を勵まして、

自分の雜誌編輯の抱負をも述べた。

彼れの職務は案外忙しかつたらしい。時々私が訪ねて行つても、何時も家にはゐなかつた。向うからも訪ねて來なかつた。雜誌の前景氣は盛んて、初號の評判も喧しかつた。大辻の名も以前に比べて俄かに重味のついたやうてあつた。暫らく噂を聞くばかりて相會ふ機會もなかつたが、二號の發刊された日に、大辻は不意に私の宿へやつて來た。新しい外套を着てゐた。

「忙しいさうだね」と私が云ふと、

「あゝ」と、さも疲れたやうな風て、「僕もこの四五日は碌に眠れないんだよ、煩いことばかりあつて」

「しかしあれ位の雜誌を出せば愉快ぢやないか。よく賣れるんだらう」

「そりや賣れるさ。その代り原稿の選擇に困つてるよ。情實があつたり主任が分らなかつたりするから……………今度須藤君の小説にも弱つてるんだよ、」

「だつてあの人のならいゝだらう、賣行から云つても」

「いゝから弱つてるんだよ。强ひて賴んどいて、出來上つた後て原稿料の問題が起つて、僕が兩方から板挾みになつてるんだ。僕は飽まて須藤君の要求を容れたいんだけれど、店の方て出惜しんて仕方がない。今日も須藤君の方から原稿を撤回するなんて云出して、今僕が調停に行つて來た所だ」と、大辻は惱んてゐた。雜誌のために自分まて須藤の機嫌を害ねるのを殘念がつた。そして、

「しかし、本屋に對して强硬に主張出來るのはえらいよ、それだけの自信があるんだから」と、私が須

藤の態度に感心すると、

「無論作家として、あの意氣込を持つてるのはいゝんだが」と、云ひながら、彼れは自分の顏を立てるために、少しは折れて異れてもいゝだらうのにと、心の中をほのめかした。

が、次號の誌上には須藤の小説が卷頭を飾つてゐた。艶のある筆で微細に女を描いてゐる。私は二度三度讀返して、そゞろに創作の困難なことを思つた。每號揭げられてゐる大辻の評論も私の目を惹いた。そして私自身も何か短い飜譯でもして、雜誌に出して貰はうと思ひながら、筆の運びの自由にならぬので、每號締切期限に遲れてゐた。

大辻には又暫らく會はれなかつたが、その消息は折々耳に觸れた。主任にも厭がられてゐると云ふ事も聞いた。むつつりして氣六ヶ敷しいので同僚間の評判もよくないと云ふ事も聞いた。△△といふ青年作家の作物を手嚴しく非難したゝめ、その男に怒鳴り込まれ、顏に唾を吐きかけられたといふ噂も聞いた。

「あれも意氣地のない奴だよ、男の面に唉唾を吐きかけられながら、默つて手出しもしないのは情けないぢやないか」と、彼れの友人が嘲つた。

その後、大辻が△△の師匠へ長い手紙を送つて、門弟の暴行を責めたさうだが、それが又物笑ひの種となつた。私の知つた限りでは誰一人「辛抱強くて感心だ」と云つた者はなかつた。私は世間へ出て活

動するのは苦しい者だと思つた。そして、彼れを慰めかた〲訪ねて行つて、事情を訊くと、彼れは言葉少く△△の作物を罵りながら、あんな者をと云つたやうな顏をした。

「山田先生（私達の師匠）に事情を話して意見を訊いたら、そんな者は相手にしないで打ちやつとけと云ふ事だから打ちやつといた」と云ふ。

「構つたつて仕方がないからね」と云ひながら、私はそんな事を師匠に訊いに行つた彼れの量見が分らなかつた。誰れが喧嘩しろと煽てる者があらうぞ。

私にも次第に新しい友達が出來た。大辻とはます〲疎遠になつて、その消息をも滅多に聞かなくなつた。が、或日ふと彼れが喀血したといふ噂を耳にした。あの大きな強さうな男が、まさか肺病になつたのでもあるまいと、私は信じかねてゐたが、病床を見舞つて來た男の話を聞くと、最早疑ふ餘地もなくなつた。

「あの男は身體は大きいけれど、鶴のやうに首が長いから、肺病に罹るんだよ」と、或友人が云つた。

「人間が陰氣だからねえ。それにあんな空氣の惡い店で一日働き通してたのが惡いんだよ」と、他の人が云つた。

「何しろ新聞で叩かれた時から、身體中の元氣を無くしちやつたんだね、あの以前はもつと活潑な男だつたが。……しかし兎に角薄運な人間だ」

當分寄ると觸ると、大辻の病氣が話題に上つて、その病狀の經過やら、書店との關係やらが日々私の耳に入つた。で、一度は是非見舞はなければならぬので、今日は明日はと思ひながら、仕事や遊びに取紛れて、一日二日と時が遲れた。

所が或日、思ひがけなくも、葉山から大辻の端書が來た。寺院の一室を借りて靜養してゐる、俗惡なる都會を離れて、毎日心緩やかに自然を樂んでゐる、これも病氣のお蔭かも知れないといふ意味の事を書いてあつた。それを讀むと、私は急にその地へ行つて見たくなつた。久振りで田舍の風に吹かれたくなつた。

で、「明日出立、君の見舞をかねて、十日ばかりその地の山水に親むつもりに候」と端書で知らせてやつて、直ちに旅費の調達に取掛つた。汽車賃だけは書物を賣つて拵えて、滯在費は彼方で原稿を書いて雜誌社へ賣つて支辨することゝ極めた。

最早かれこれ一昔以前にもなるが、葉山へ行つた時の事は今も記憶に新しい。五月の初旬で、空は晴れてゐたが、肌に觸れる風はまだ寒かつた。逗子の停車場から鞄を脊に掛けて海岸を傳つた。靜かな波に夕日の光が流れてゐた。日暮れぬ前と道を急いだので、息は苦しく額からは汗が垂れるほどだつた。腐つた魚の臭ひのする細い道を通拔けて石段を上つて、海一面を見下した眺めのよい寺に着いた。寂として四邊に物音がしない。鞄を下に置いて氣持よく息を吐いて案內を乞ふと、

庭に向つた部屋の障子が開いて、大の辻ヒヨロ高い姿が現はれた。
「よく來たねえ」と云つたが、さして喜んだ風も見えない。
「一人て淋しかつたらう」と、私は座敷へ上つて、肌を脱いて汗を拭つた。
「別に淋しくもないさ、煩い思ひをしないだけてもいゝ。東京て下らない作家の文學の話なんか聞いてるよりや、漁夫の話ても聞いてる方が餘程ましだ。僕は此頃漁夫と懇意になつたよ」と
大辻は文學者は皆んな虚僞や虚榮や邪推の權化てゞもあるやうに云つて、低い力のない聲て罵つた。
私は彼れの變りやうがあまりに急なので、不快な氣もしたが、成べく逆らはぬやうに相槌を打つた。
「漁夫もいゝだらうが、今更我々が職業變へも出來んから、矢張志した通りをやり通すんだね。君なんか殊に才分に富んてるんだから、病氣さへよくすれば、幾らでも發展されるんだ」と、私は勵したが、
彼れはさも氣の向かぬやうに、
「强いて物を書く必要はないさ」と云つて、それから、現代の作物を一つ／＼けなし出した。廣い座敷て火鉢に縋つて、折々咳をしながら、ポツリ／＼氣燄を吐いて夜を更かした。氣燄の間にふと思出したやうに、机の上から手紙を取つて、「須藤君から今日こんな手紙が來た」と私に見せた。
「沼津へ移つて來たまへ、此處は空氣もいゝ、水もいゝ、美人もゐる。生活の心配は入らぬから早く此處へ來たまへ、待つてゐるよ」と片下りに書いてある。
「沼津へ行くつもりなんか、君は」と、私は大辻の話の中にふと氣がついて訊くと、

「都合て行くかも知れん、須藤君は友情の濃かな人だ」と、大辻は感歎して、「秋田君なんか口では親切さうな事を云ふけれど、ちやんと利害は打算してるから手頼りにはならん、須藤君のやうな俠骨はない」

「だけど、須藤さんだつて、まさか君の一身を引受けて呉れやしまい。さう深い緣故はないんだから」と、私は一度だけ反對らしい口を利いたが、それが不思議に大辻の氣に障つたらしい。

「あの人は僕を認めて呉れたのだ」と、信念を籠めて云ふ。

私は敢て爭はないで、彼れを促して寢床に就いた。二人同じ夜具の中に脊中合せて寢た。寺には貸夜具がないので、民家から借りて來ねばならぬのを、大辻がウッカリして忘れてゐたのである。

私は夜中咳や譫語を聞かされて、氣味が惡くて寢つかれなかつた。て、朝早く起きて海岸に立つて盥風を吸つて來ると、大辻は緣側に腰掛けて、蒼い顏に朝日を浴びながら、遙かに沖を眺めてゐる。暫らく身動きもしなければ物も云はない。私も遠慮して言葉を掛けず、座敷に寢ころんでゐたが、やがて大辻は後向きのまゝで不愛想に、「僕は今日一寸東京へ歸らう」と云つて、又何やら考へてゐた。

「急用があるんかね」私は一人でこの見晴しのいゝ座敷にゐられるのを喜んだ。

「四五日して又來るから、君はそれ迄此處にゐて呉れたまへ、彼方て金を拵へて、此處の食料を拂つて、沼津へ引越すことにしやう。」

「さうか、ぢや僕だけ當分此處にゐやう」

「それがいゝよ、君も少し孤獨の生活を味つて見たまへ、」

彼れは頻りに孤獨生活の趣味を說いて、用事さへなければ一日も東京に留まりたくはないと云つた。そして晝過ぎに手ぶらで歸京の途についた。私は海岸まで見送つて、その姿の消えると、俄かに晴々した氣持になつて寺の廣い座敷に歸つたが、不意に不快な念が胸に萠した。大辻の食料の擔保に留置かれたやうな氣がした。

机に向つて書き物をしてゐても、寺の周圍を散步してゐても、何だか自由が束縛されてゐるやうに思はれた。

でも、四五日は海を眺めながら筆を執れる詩人らしい境遇を悅しがつてゐたが、約束の四五日が過ぎても、大辻は歸つても來なければ、一枚の端書をも寄越さない。又病氣が重くなつたのだらうかと思ふと、不安心でならない。私自身の原稿さへ思ふやうに捗らなかつた。

やがて一週間を過ぎた。最早辛抱が出來なくなつて、僧侶に一言斷つたきり、諾否の返事も聞かないで、鞄を脊負つて東京へ歸つた。新橋へ着いた時の悅しさは今にも忘れない。その足で直ぐに大辻を訪ねたが、主人はゐなくて、顏立の淋しい色の白い妻君が出て來た。私から譯を聞いて頻りに詫言を云つた。

で、私は二三の知人を訪ふて、大辻の氣の利かない話などを面白さうにして、宿へ歸つたが、歸ると間もなく大辻からの手紙が二つ同時に着いた。その一つには「……君は我儘だ、利己的だ、君が彼

處にゐて勉強してゐると思へばこそ、僕も安心して踊つてゐられるのに、一言の通知もなく出拔けに歸つて來るのはあまりに無責任ぢやないか。………それに君の食料までも僕が負擔するやうだと、自然沼津へも行けなくなつて、僕は非常に迷惑する。須藤君には二十日までに必ず行くと約束してるし、向うても適當な部屋を借りて呉れてるんだらうから、豫定の日までには是非行かなくちやならんのだ。兎に角旅費を減らしたくないから、この手紙着次第、君の食料だけ使に持たせてても、僕の家へ屆けて呉れたまへ。」とあつた。

私はそれを讀んで呆れた。思ひも染めぬ事だ、誰れが大辻なんかに金の迷惑を掛けるものかと思ひながら、今一つのを讀んだ。

「今、手紙を出した後て、直ぐに後悔してゐる。病氣の所爲か、神經が過敏になつて、詰らぬことに腹を立てたり涙つぽくなつたりして困つてゐる。今の手紙にも前後の思慮もなく、君に對して失敬な事を書いたが、どうか許して呉れたまへ。食料は僕が拂つてもいゝんだよ。こんな下らない事て多年の友情を害はうとしたのは如何にも殘念だ」

その翌朝私は自分の食費だけ持つて、大辻の家へ行つた。

又暫らく會はなかつた。沼津へ移つてからの彼れは、只の一度も手紙を寄越さなかつた。音信不通は私にばかりではなくて、親友の磯谷なども、「大辻といふ男は勝手な奴だ、手紙を寄越し出すと、毎日の

やうに寄越すし、寄越さぬとなると、轉居の通知さへしない」と云つてゐた。

私は葉山から歸つて間もなく、或新聞社へ入社して、毎日俥に乘つて種取りに奔走してゐた。いろ〱の社會へ出入した。同窓仲間の行動のみを話の種にしてゐた今までとは變つて、廣い世間を見る事が出來た。最早怠屈醒ましに友人を訪ねて、半日一日を送るやうな事はなくなつた。從つて大辻の消息も滅多に耳に入らない。須藤の小説の評判はます〱盛んで、それを掲げてゐる新聞は急に讀者を増したと云はれてゐたが、大辻の名聲は次第に薄らぐばかりだつた。沼津には須藤あり草山ありと、その土地の俗人にも知れ渡つてゐたが、大辻の名には何の光もなく、たまに知つてゐる者は、只須藤の門下生とのみ思つてゐた。

所が。或日社の編輯長が私に向つて、「今度沼津の須藤の依頼て、大辻順一といふ人に文藝評論を書かさうと思ふんだが、相當に技倆はあるんですか」と訊いた。

「そりや非常にいゝ。大辻なら面白い評論を書くでせう」と、私は彼れの再び文壇に現はれることを喜んだ。

そして何時から紙上に掲げられるんだらうかと毎日待設けて居たが、一月立つても二月立つても、彼れの文字は見えなかつた。「どうしたんだらう」と、編輯長に訊くと、「何故だか送つて來ないよ」と答へて、別に催促する樣子も見えない。重きを置いてはゐないらしい。

私は待甲斐もなく、遂に大辻の論文を紙上て見られなかつたが、その歳の十二月の或日、思掛けなく

も、大辻自身に私を社へ訪ねて來た。見馴れた外套を着て、寒さうに應接室に立つてゐるのを玻璃越にチラと見ても、何となく影が薄い。

「病氣は少しはいゝんかい、久振りだねえ」と、私は扉を開けると、直ぐに懷しさうに云つた。

「次第にいゝ方だ、少しは肥えたらう」と、大辻は頰を撫でながら、含み聲で云つたが、その顏は少しも肥えてゐなかつた。唇は紫がゝつてゐる。

私は小使に命じて火鉢に火を盛らせた。大辻は指の細長い手を火の上に翳して、窓越しに銀座通を眺めながら、「久振りに賑かな町を見るんだ……君も毎日こんな所へ來て活動するやうになつたんだね」

「沼津から來ると煩いだらうね、それに彼方は溫いだらう」

「彼方も飽いたよ、來年にもなつたら東京へ來たいと思つてる」

「だけど、君は妻君もあるんだし、須藤さんも側にゐるんだから、さう淋しくもあるまい」

「此頃はあまりあの人の家へも行かないんだ」と、大辻は何時ものやうに須藤の噂はしないで、東京の文壇の事を彼此と訊いたが、今度は私の方からそんな話を斥けた。

「僕もこの頃は文學の話が厭になつたよ。それよりもつと生々(いき〳〵)した社會の事件に興味が出來た」

「身體(からだ)の健康な人にはその方が面白いだらうね」大辻は大人しく答へて、暫らく茫然外を眺めてゐたが、やがて淋しく笑つて、「此處の新聞には脚本を出して呉れんだらうかね」

「さあ、脚本はどうだかね。君はそれよりは評論を書く筈だつたらう、何故書かなかつたのだ」

と、私が責めるやうに云ふと、大辻はボツリ〳〵不明瞭な聲で、彼の須藤君の昨今を話した。その話によると、彼れは須藤の命令で、屢々新聞の「讀者の聲」の欄内に投書して、須藤の小説を褒めたことがある。沼津で須藤と並立つてゐる通俗作家草山の小説を新聞の文學欄で攻撃せよとの命令を受けたこともある。

「僕も草山の小説は攻撃したいけれど、さう〳〵他人の命令を奉じて文章を書くのは厭だからね」

「だけど、君は須藤さんの小説の眞價を認めてるんだし、向ふでも君の評論の手腕を認めてゐるんだから敢て節を屈して筆を曲げるんじやない。實際須藤さんも心細いだらうよ。外の作家とは違つて、何派にも屬してゐないんだから、提灯持をして呉れる者もないし、君一人を味方にしてるんかも知れない」

私はさう云ひながらも、大辻が水のいゝ空氣のいゝ沼津に住むために、人知れぬ苦勞をしてゐたことを察した。

彼れのポケツトには、二月かゝつて書上げたといふ飜案の脚本が潜んでゐた。彼れはそれを私に手渡して、「筋は可成り面白いんだが、何處かの芝居で買つて呉れんか知らん」と、鈍い目で私の顔を見詰めた。

「さうだねえ」私は氣乘りのしない返事をして、二三枚走り讀みしたゞけて、後は所々指先で開けて見て、「面白さうだねえ」と、悦しがらせを云つた。

大辻の顏には珍らしく溫かい笑ひが浮んだ。蒼い頰も紅味を帶びたやうに見えた。「相當に苦心をしてるんだらう、此の儘葬つてしまうのは惜いよ。金の必要ばかりぢやない」と調子に乘つて、舞臺面の工夫などを說いた後て、本鄕座の坂井に見せて來やうか、あの役者には二三度會つたことがあるからと、私の意見を求めた。

「兎に角見せて來たまへ、買はんとも限らないよ」

私はとても駄目だと思ひながら、さう云つて慰めた。そして一緖に外へ出て本鄕座近くまで行つた。大辻は坂井を說くのに私をも座に加へて、側から口添させたかつたが、私は拒絕された後の大辻の惱みを見たくなくて、態よく斷つて袂を別つた。

て、その翌日、談判の結果の報告を心待ちにしてゐたが、何の音沙汰もなかつた。沼津へ歸る旅費すらないと云つてゐたのに、どうしたんだらうと案ぜられたが、旅費の負擔を免かれたので助かつた氣もした。五日六日立つても、田舍へ歸つたとも歸らぬとも。その通知すらなかつた。

所が、或日本鄕の通りて公文堂の編輯員の谷村に出會ふて、たま〳〵大辻の話が出た。

「此間不意にやつて來て泣きつかれたよ。あの飜案は同じのが一度僕の社の雜誌へ出たことがあるんだから、無論斷はる筈だつたけど、あゝ弱つてちや仕方がない。僕が責任を負うて原稿料だけ渡しといた。實際可愛さうだからね。何でも沼津から電報が來て、妻君は留守中に田舍へ行つたんださうだ。妻君の母親が急に大病になつたとかて」と、谷村はキビ〳〵した口調て話して、此頃は新年號の編輯て急がし

いと云ひながら行過ぎた。

不斷俗物呼はりしてゐた谷村の所へ、大辻は最後の歎願に行つたのだ。

歳が明けて、私は諸方の宴會に忙しかつた。その間に年賀をかねて、端書て大辻の近況を尋ねたが、何時まで立つても返事がない。沼津を引拂つて大坂近傍の知人の家に寄食して養鷄などをやつてゐると云つた人もある。妻君は貧乏と病氣とに愛想を盡かして行衛を晦ませたと云つた人もある。が、私は深く聞糺しもしなかつた。

その歳から日露戰爭が始まつて、社内も世間も氣色立つた。私はこの時分から劇評を受持つことゝなつたが、芝居にも戰爭物のみが人氣を惹いた。文筆に縋つて暮らす人々は、傍目にも心細さうだつた。

その年は戰爭騷ぎて暮れたが、翌年の春になつて、久振りに大辻の手紙が來た。西京から出したのだ。塵紙のやうな紙に書いてあつて、墨色は薄い。

「……世は血腥き噂のみに候、不景氣の聲は山の奥までも入込み、ホーケキヨと鳴く鶯すらフケーキ〳〵と聞え申候。かゝる世に我等は何の用をもなさず、退いて山中に隱れて筆を燒き消息を絶ち、以て十年靜思の人とならんと思付きしも、遂にこれ机上の空想に過ぎず、山の奥にも矢張味噌と醤油の必要あり、これを求むるには矢張市に出てざるべからず候。かくの如くして我れは又浮世の戰爭場裡に押出され申候。唯押出されたるにて候。さながらエキスモー人の如く、水草を追うてこの地よりかの地と

遍歷するは、これ同じ土地に長く止まる能はざれば也。われ義を守らんとすれど、世はわれに不義を强いるにあらずや。われは病に勝つことを得べく候、されどこの苦みには得堪へられず候。御承知の通り處世の道に迂なる上に、病といふ重荷を負へる我れ。行いてこれが救濟の道を講ぜんとすれど、關山遠くして思ふに任かせず候。就いては……」

私の周旋で新聞に小說を掲げて貰へぬだらうとかと賴んでゐる。そして最後は「劍に倒れし人には金鵄勳章あり、筆に倒れし人には何の酬ゐかある。綠雨は陋巷に窮死して、世のこれを見ること、一士官の死にも及ばず」云々と結んでゐる。

私はこの力の籠つた文章を讀みながら、嘗て大辻が文學を罵つてゐたことなど思出した。そして彼れの小說を推薦するのは少し躊躇されたが、一應は主筆に話してやつた。

「その人の小說は評判なんですか。どの位の地位にゐるんです」と、主筆が問返した。

「また地位は定つてゐないんですが、特色のある人だから、案外面白い者を書くかも知れません」

私はそれ以上推して賴む氣にはなれなかつた。「何時か」といふ當てにならぬ言葉を、せめてもの手賴に

「さうですか、ぢや何時か賴みませう」と、主筆は愛想よく云つた。

にする外に仕方がないと、大辻に知らせてやると、向うから折返して、「何時かと待つ中に、小生は餓死致すべく候、再度の御周旋を乞ふ」と云つて來た。しかし私は最早望みのない者と諦めて、再び口を利かうともしなかつた。

それから後は引續いて大辻の端書や手紙に接した。自分の境涯よりも知人の消息や批評をよく書いて來た。某は奸佞な男だから警戒してゐろとか、某は利口な口先ばかりの男だから信用してはいけないとか、私の一面識もない人々の事をも知らせて來た。私はいろ〳〵の人に取圍まれて、獨りて氣を焦つてゐる彼れの樣子を想像して、哀れにも可笑しくも思つてゐた。

「君に會ひたしと思ふの念切なり」と、病院からの端書を手にして後、彼れの音信は全く途絶えたが、暫くして、社へ訪ねて來た或人の口から、「大辻は死んだよ」と傳へられた。私は弔辭を送らうと思つたが、誰れに宛てゝいゝか分らなかつた。彼れには親もなく妻君もなかつた。

確か一週年だつたらう。小人數て一度追悼會だけは開いたが、その席でも彼れは誰れからも懷しがられはしなかつた。傳染病と知れて下宿屋を追出された時、落着く所もなくて、二條城の塀に凭れてシク〳〵泣いてゐた事、妻君は朝鮮へ逃げて行つてる事など、その席上て話された。

その後も折々、大辻の悲慘な末路の有樣を、京都の人から聞かされた筈だが、最早大抵忘れてしまつた。思出さうとしても思出されない。

和歌

尾上柴舟選

○ 正木哲夫

追はれ追はれ後の壁に身をよする心地に神はたのみけるかな

何といふものの力ぞ黄昏は鐵の板なして胸押して來る

やうやうに癒えたる目あげ外を見れば初秋の風すこし沁むかな

匂よき煙くゆらし八月の夕の門に身をよせてゐぬ

あさ風の野を吹くごとくわが若き心はてなく擴がりて行く

秋ばれの空をながむるに心やや寂しうなりぬ風白う吹く

榛名高う大野のはてに聳えたり月あかき夜を雁啼き渡る

屠牛場のやや丈のびし草むらにうす月さしてこほろぎの啼く

こすもすの細葉に雨のしづくしてうつくきしかな灯かげさしたる

○ 新島絹舟

たゞひとこと勵語のこして船腹のランチに立ちて手巾を振る（渡米する友を送りて）

倦むになれその日その日の小さなる刺戟に我れは生きてあるなり

ほこり湧く日和つゞきの午後の街つかれ果てたる我れも歩めり

初夏の入江を抱く暗綠の半島の裾に白き波よる

舌にやゝ澁き茶の香をなつかしむ午後四時頃の事務のつかれに

床に入り靜かに目とぢ悔多き今日を思へば涙ながるゝ

淋しけれど今日かくありてかく笑める我れと思へば心足らへり

○ 下村淳

秋の夕べかへりきたりて姿見に向へばかほの蒼ざめてあり

姿見はかなしからずや我が若さ失せけるかほを其のまゝうつす

秋の日のくれ終りたる高臺の家にさびしき灯ぞともりける

旅にいて行き方知れずなりにける友をば思ふ初秋のかぜ

君きまさず木々はつめたくそよぎそめさびしや夏もくれ行きにけり

我が若さうばふ事務所のにごりたる空氣の中にちらばるうれひ

○　岩谷莫哀

うら悲し都に入りて月あまりまじめに物を思ふひまなき

頤をなづれば僅かにさわる髭のあり女々しきことをまたも思ひ出づ

ほろ醉ひて祭りの夜の神燈のあまたつらなる町をかへりぬ

ふる郷の野火に似たれど華やかに淺草あたりそらの明かれる

三四人下水工事を見て立てる場末の町に秋風ぞ吹く

○　摩文仁朝信

隅にゐて指吸ふ人とわれなりぬ君が心にはなれ來しより

われはたゞかなしき夢をつくりゆく有甲斐もなき男なるらん

たゞれたる入日はかなしわたつみの旅よりかへる赤き帆の色

古街の夜のおもてこそさびしけれ繻子の瞳にも似たるともしび

やゝしばし君がなげきに囚はれぬこの少年の黒き瞳も

○　小澤紫紘

腕にみつ若き歎きをしばらくも忘れむとして野にはいてにし

うら若き血潮ぞ冷ゆる夕風の河原蓬に流るゝ夕べ

雨やみぬ音なく歩む月光のその冷たさに耐へられず泣く

やゝ黄ばみし野べのかゞやき晩秋の野の明るさにしば眼をとづ

なよやかに白き芙蓉をかざす子がすそよりそよ

ぐ初秋の風

○

小出秀月

月見草涼しき庭の夕ぐれの空氣草履の輕き足どり

かたりごととぎれしひまに石拾ふありのすさびのさびしかりけり

うちふるふ木の葉の影の暗きよりかなしみどものしたゝりきたる

海明けぬ水平線に並び立つ山ながむるに心さめぬる

○

桑田實

とりあぐる磁石の針のさゆらぎのはかなきこゝろ秋に入りけり

この夜ごろ寝つきよからず中秋の雨の中にてきりぎりすなく

朝寝せしわが眼にいたし何の木か山の麓に白く光れる

丘の上は秋さびゆきて風さむし今宵もひとり月の出に立つ

桔梗などこぼれ咲きたる郊外の温き陽をあび町のかたみる

○

小河原素山

音もなく靜に雨はふりてあり大和田津海に白き渚に

海に來ぬ夏のみどりのうつらざる北の海へと泣きに吾れ來ぬ

呼びとむる人もあれかし夕ぐれの街に出て行くはぐれ心を

つばくらめ巢へる跡の白壁にうすく殘れり夏のさびしさ

みどり樹は皆蕭として暮れ初めぬ靜に物をおもふべきかな

○

千住湘江

ひとひらの雲たゞよへるおほぞらのきららの如き光ながむる

樺色の雲いくすぢの流れたる下に海見ゆほのあかりして

やはらかき藥の匂ひを嗅ぎながらしづかにものをおもふ晝かな

おどろしくむせぶが如き十月の海の夜こそよろしかりけれ

○

塚田眞

あゝいたく身は疲れたり街の上になほ生くことを思ひあはれむ

ものいはず淋しく起きて秋の朝白楊高きもとを歩めり

逃れ來て池のほとりにたゝづまひかなた明るき雜沓を見る（淺草にて）

丘を來て下の木蔭の泥濘の冷きを蹈む九月の日かな

野に立ちてたゞ野を思ひはるかなる高黍の葉に秋風をきく

○　　　　坂田順作

われをたゞ力と頼み生くといふ女を妻とよびてながらふ

飽き足りし晝の眠のはてにしてなほ起きもえずひとり悲しむ

ふと想ひいてしことあり客人と語ることばの多くなりにし

日光の反射まばゆき石塀の酒造場うらのひまはりの花

○　　　　江上魚梁

うす青き林の奥にひゞきいる山の手線の汽車のとゞろき

日光はあふれ落つるに夏蔭の青きがなかに身は飢ゑてあり

天草の君を思へば南風の甘き額への聞きのよろしき

しろじろと夏の夜明をなやまして海の方より風起りくる

○　　　　杉山守眞

くもり日や君とならびて憩ひ居る銀杏のもとの青色の石

來ともなき君を待つ間のつれづれにピアノの壓板にそとふれて見る

なき人の墓に手向けぬわかき日のくちびるに似る石竹の花

○　　　　水上おぼろ

さ綠の木々にあかるき雨のふる港の街の溫かき晝

砂山を越ゆれば渚にまける波相模の海は藍いろにして

石竹の花ごと泪にじみ來るかはたれ時よ灯をばともさね

○ 菊池野菊

朝の風車輪のひゞきこゝちよき思に耽り旅にいてけり、

わが性に足らひし日なしわが性をいとひし日なしたゞにさびしき

事務室を汗ににじみて出てくれば午後の巷に日のただれたる

○ 荷田重

若き日の悲しみ抱き友の家に枇杷の實などに口ぬらしけり

夜となりぬ燭はともりぬ吾が心町に出てよとうちしきりせく

母を思ひふと淋しさを覺えたり阿蘇の湖水を見て下る時

○ 内野武司

青赤の淋しさを知るひねもすを都大路に旗ふる人は

夕暮の冷たき青き底に沈み淋しく我れは物をこそ思へ

とある日にとある町にて出遇ひたる淋しき人ら浮びくるかな

○ 大地白秋

思ふことおもふがまゝに云ひもえてたゞ徒らに悔のなみだす

街はいま眠りにおちぬ青き夜の胸にぬかふせ眠りにおちぬ

○ 井田葉歌

つかれたる眼にいとも心よくうつりぬ蕎麥の花の眞白き

やるせなく物思はする日暮るればつとめの如く又床に入る

○ 井上靜香

目なし鳥二つ浮びて音をば泣く世界の果ての暗がりの海

ひとりしてものを思へば夜の室の我が影を吸ふ壁の淋しさ

○ 田方白哀

月照れり人默したり海鳴れり渚に貝のきらめくが見ゆ

月あかき海邊の町の安酒屋默して入りぬ人のあとより

○ 野崎哀果

薔薇の香の窓に滿るうす月夜ふと喜びの胸にきざせる

眞晝畑木々の梢に影浸し風白き中に頬白の啼く

○　　　　　平島芳美

自働車はかるく埃を揚げて去る君へとてゆく市のたそがれ

落葉せる林に青き芽は萌えぬまた痛ましき風きかむかも

○　　　　　森泣花

しら／＼と明近き風海へ海へ雨にぬれたる樹の間をばぬひ

つよきこと云ひつゝ瓶の酒をつぐ妻と厨の寒さに對す

○　　　　　若林秋光

初秋や一輪ざしの陶物の白きに活けぬ名も知らぬ花

いと強き光の底にうごめける寂しき影も我なりしかな

○　　　　　百田楓花

かゝるときせめては禱る神の欲ししづこゝろなく暮れゆく夕

おもふまゝ若き命を延ばしめよほこらしめよと神に念ずる

○　　　　　武田又八

秋淺し庭の野菜のうつくしくくまどる中に人とかたりぬ

いささかの悲しみもなき今日の日も夕となればやすらかにして

○　　　　　岡本昇

もろ／＼の悲しき事を思ふ時此の天地は切にいたまし

南國の空なつかしみなつかしみ今年の夏も半ばすごしぬ

○　　　　　大岡綠雨

落日の赤き嘆よくれてゆく今日の一日のいたましきかな

○　　　　　○○子

もの思ふ事ももものうき夏の野邊たゞたんぽゝの花散らし見る

○　　　　　磯井正彦

ヒヤシンスわが友の病む湖南院の大灘見ゆる窓ににほへり

○　　　　　野田守雄

何と云ふ望もあらずなにといふ思もあらずなほかくてあり

○　　　　　河盛蘆村

今日も又嫁げる姉の歸り來て母としみ〴〵泣ける淋しさ

○　　　　廣瀬涼眉

寢くたれ人の吐息と石炭のにほひと夏の午後ゆく汽車と

○　　　　伊藤綠水

つらかりし昔に想ひ返る時胸につと湧く淡きかなしみ

ほの霞む春あけがたの野の末の牧場に近き川のさゝやき

○　　　　末吉落紅

僞りもふたゝび三たびするほどに犯しがたなき威を感じぬる

○　　　　岩下三郎

歷史てふ興あるものも空ごとと疑ふ子なり日々倦じぬる

○　　　　增淵夏村

いひもえて心に泣きし日を思ひしづかに居れば秋の風吹く

和歌原稿は東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛中央公論歌稿と表記ありたし

俳句

蕎麥の花　　高田蝶衣選

一族の島開墾や蕎麥の花　へき生
花そばや狐のせたる戾り馬　同
畑て食ふ磯の小寺やそばの花　同
花になる蕎麥見て歸る燕かな　同
朝夕べ二度見る虹や蕎麥の花　同
花そばやあとの厄日も晴にして　同
雁眠るべくもあらず蕎麥の月冷えに　夢筆
君をまねび吟步せん蕎麥白う照る　同
籾篩ふ間の晴れ蕎麥の花黃にす　同
花蕎麥の月を驚く宿鳥や　同
蕎麥白きに卜居せん離塵與ずまゝ　同
寒村に我れ寓す蕎麥白き月　同
心眼の視界に蕎麥の花白き　湧漁聲
山容の一峰に損す蕎麥の花　同
箕の如き山形見えて蕎麥白き　同

梓に上る養痾記の文もそば白き　同
山買へば附く瘠畑やそばの花　同
芥焼に飛べる羽蟻か花蕎麥に　涼　眉
油搾る町尻の家麥蕎白き　同
花蕎麥に住み燒く名陶いさゝかに　同
禁獵の山守る寺や蕎麥白き　同
蕎麥の花瘤取岩か黑う見ゆ　同
花蕎麥や毛見見落しの裏畑　五　黄
父祖の學統我に亡ぶる蕎麥白き　同
鍋尻の火も門畑の蕎麥冴えて　同
花そばや乳神詣りの女等が　同
復命書綴る旅窓や蕎麥白し　卯　月
灰置きの免租の畝歩もそばの花　同
花そればや茜染屋の溝邊畑　同
花そばに憂ひの氣壓又や來ん　同
此地質楮にやよけん蕎麥の花　雨　郎
蕎麥の花明日雨の峰かくし雲　同
蕎麥の花莖長草も穗に出てゝ　同
蕎麥の花塀沿ひ畑をうね長に　同
熟れ綿を摘み切れば蕎麥の花暮るゝ　月　精
織子夜を出歩きぐせやそばの花　同

穴釣の汐時を蕎麥の花白し　同
足柄の紅葉が染まる蕎麥の莖　總　子
十月の故鄕こひしやそばの花　同
花蕎麥に入口近し高尾山　同
花蕎麥や雜巾をさす絲白に　不　騒
日暮れ蜘蛛死にまねか蕎麥の花明り　同
蕎麥白う餅つき蟲の杵ふるや　同
花蕎麥や寛租の國に堺して　不寐庵
歸臥の意もありて展墓や蕎麥の花　同
そば白し蹄鐵を何に吊る戸口　同
釣る沙邊牧笛に覺むや蕎麥の花　同
蕎麥の花人血膎を怪しとて　鬼哉生
背きたる人追へば無しそばの花　同
桑瘦せて年貢の足しの蕎麥白し　但　翠
入海の浪頭なり蕎麥のはな　同
堆肥の朝吐く息や蕎麥の花　同
筆匠の毛干し日和や蕎麥の花　山　魚
麥の精げを二の水車場やそばの花　同
竹林に寺はありけり蕎麥一面　螳　郎
星出づや蕎麥白けれど渡し闇　同
蕎麥の花と山里沼を白う見し　風　車

解屣に泣く戀の機女や蕎麥の花　同
先住忌川忘れめや蕎麥の花　夢弔
句に居りて法務懈怠やそばの花　同
心置く朝夕の風や蕎麥の花　琴星
花蕎麥や來ます僧見て句意動く　同
蕎麥白し遠山影に雨の色　倨入
藪の竹根を張り伸すそば畑　同
斜雨に來て碑に門下泣く蕎麥の花　鶯樓
擲却す句屑に蕎麥の花白し　同
蕎麥の花去年君いたく太りしが　漁笛
早起早就こゝの家訓や蕎麥の花　同
花蕎麥や陸穂作りもする山家　人生
花蕎麥や落日の美を君に文す　同
利生記に殘る史蹟やそば花　燕閣
郷學の窓灯しけり蕎麥の花　同
寧ろ莖に興ぜし筆や蕎麥の花　木犀
未成畫に蕎麥寒しとの評得たり　同
山裾の時なし風や蕎麥の花　水竹
花そばや十二御倉の旗も見ゆ　同
花蕎麥に結願戻り日短かな　江村
野祭近う假屋も葺くやそばの花　同

水雛の供養の標や蕎麥のはな　竹朗
そばの花に吹き寄す雲や月白し　同
蕎麥の花塾生募る師も住みて　兎國
風の晨花蕎麥荷ふ人の行く　同
麓畑行人蕎麥の嵐言ふ　保赤
作場道やせたる蕎麥の花寒し　同
湯釜たけば祭らしさも蕎麥白に　芽青
朱壁色褪せしに蕎麥の彌白き　同
此山も二毛の忙やそばの花　一白水
續稿も猶溽暑の日蕎麥の咲く　同
猪追ひの小屋ある畑や蕎麥の花　蓮窓子
この秋や師の辭世にもそばの花　同
花蕎麥や絹も値安く買ふ產地　天梅
花蕎麥の蕋さきて涯なり寺の裏　同
薄吹く風よりそばの冷え白し　紫滴
延び過ぎに咲くそばよりぞ秋行かん　同
胡麻の跡其まゝも惜し蕎麥の花　逝水
越え來れば原に聲なし蕎麥の花　同
遊子碑に眼を勞しけり蕎麥の花　十璺
水に遠き壘々の野やそばの花　同
隱坊が通ふ闕裏そばの花　無香子

鳥黄のそれかと見るや蕎麥の花　同
筆耕の閑を養鷄や蕎麥の花　一樓
報德社夜話ある頃や蕎麥の花　枕水
花そばに曉寒むをまたも寐る　巨椋
蕎麥の花雨ふるひたつ鶉かな　薔微
黎明を下る筏や蕎麥白し　渚萍
臑に響く臼音や土間蕎麥近し　洒淚雨
五車の文畑にもかへて蕎麥の花　紫明
花蕎麥や蘘打つ石に小雨降る　秋甫
そばの花小丘起伏村をなす　櫻漁
山寨のいましめ解けて蕎麥の花　金泉城
そば白き頃よりぞ妹の遠ざかる　溪村生
そば咲くや鷄卵の値の二度下がり　柳洲
萱叢のかげ毎にさくこぼれ蕎麥　紅風
葉無し桑荒れて隣りぬ蕎麥の花　天籼子
山莊に薪割る孤影そばの花　宵雨庵
免官の無爲寺に住む蕎麥のはな　蓼雨
隔離舍の蕎麥の月夜となりにけり　月下
變り種の黍丈伸びぬそばの花　叱咜郎
そばの花一夜うつらふ俄霜　狠子
花蕎麥に怪鳥下れば風死せん　山彦

そばの花鹽斷ち三日の眼に白き　句坡
入鄕を迎ふ百傘蕎麥咲いて　虹涼子
はな蕎麥に俗謡も哀歌めく春情　禾人
霧淀む櫨の木原や蕎麥の花　行々子
人戀し花蕎麥に來て鳥啼けば　淼雨
山鳩の午眠に匂ふそばの花　清仙
三周忌故人の德の蕎麥白き　鳥城樓
地芝居のはやしにゆるゝそばの花　渡水
坪堀の小盤投げるやそば畑　寸江
獨身の身瘦せてそばの白きかな　寺人
蕎麥の花白きもきえて初更かな　百錸

關谷山中
花蕎麥に遺賢の事蹟たづねけり　塊堂

前々號及前號正誤

亂峯の秋聲に筏落しけり　島川
出遊人に孫しかりしが蚊帳名殘　丈貝子
白き蛾の飛びあへず秋の蚊帳たゝむ　舟二

課題

年木　十一月十日〆切
恵方　十二月五日(繰上)〆切

規定　△淡路國假屋在高田蝶衣宛
△一人三十句限△字體明記

秋雜詠

蝶衣

秋風や矢矧ぎが指に刺たちぬ
癒えぬれば信心捨てつ秋の風
秋風や無慾の慾を主に見たり
秋風に質問や拾遺愚草など
秋風に殺生王の怪我も聞く
嫺うから美女に累しぬ秋の風
見古るせし當壚の面らや秋の風

畫賛

秋風に透視やはげむ對壁子
薄情を女に見る日去ぬ燕
去ぬ燕忌穢と產穢の勝ち負に
籤磨ぎの菜色を燕名殘かな
疊屋が苧に指きるや雁の聲

歸庵

月の戸に鋤犂納む師弟雅語もしつ
コスモスの枝に根ふくや秋の雨

破紙窓

末枯れて風に矢まじる思ひかな

評論

葡萄牙の革命

一

十月三日の深夜、葡萄牙の首都里斯本(リスボン)に革命起りぬ。四日には、滿都、軍馬の聲、砲銃の響喧しく、官賊相奮戰する光景勇ましさ言ふ許りなし。わけて皇叔オポルトオ公、千金の御身を勤王軍の陣頭に立てさせ給ひ雨なす彈丸を物ともせず、防ぎ戰ひ給ふ姿は、ゼオン一世の古へも斯くかとぞ忍ばれける。左れどブラガンザ王家滅亡の時機や來りけむ。官軍の將卒、情を敵に通じ、降服、鉾を逆まにして却て我を攻むるもの引きも切らず。今は宮城の運命も危うしと覺ゆるに、皇帝マヌエル二世は是非無くも共和黨首領がかねてなしたる情け深き申し出でに從はせ給ひ、四日夜從者四名と共にドッド(駱駝の一種)に打ち乘りて砲擊の裡を海岸に遁れさせ給ひぬ。

皇太后マリー、アメリー、祖后マリヤも同じく逃れさせ、皇帝と合せられて帝室快遊船アリメー號に召され、英領ジブラルタル港に御着あり。九日は恰かも日曜日なり。皇帝、皇太后共に同地の羅馬教會の會式に臨御ありしが、席上皇太后は御手を御顏にあてさせて泉なす涙に咽ばせ給ひつ。次て淹留兩三日、御親戚オルリアン公を知るべとし、英國倫敦に落ちさせられぬ。かゝる内に本國里斯本(リスボン)府には共和政成りて、文豪ブラガ氏大統領にぞ擧げられける。

吁嗟是葡萄牙帝政沒落史の終(ラストページ)也。

二

然り是葡萄帝政沒落史の終頁也。如何なればブラガンザ王家は此悲運に遭會せざるを得ざりし乎。

是毫も不思議にあらず。葡國數百年の秕政は之を餘儀無からしめたる也。然かも古きは少焉らく問はず、最近の事實をして試みに之を證せしめよ。

葡國には憲法(一八二六年制定、一八五二年、一八

八五年、一八九五年修正）あり、議會あり。然れども帝王の目にも首相若くは諸大臣の目にも、憲法、議會あらざりき、一九〇七年先帝カルロス一世はフランコの毒言を容れて、忠良の諫奏を斥け、議會を解散して久しく召集せず、獨裁政治を斷行し、其結果翌年二月弑害の難に會したるは世人の知るが如し。次て新帝マヌエル二世、弱齡を以て天位を踏むや、獨裁政治は破れしかど、昔年の循環主義復興し、邦家の政權は、保守、進歩兩黨の領袖なりと自稱する寡頭の私黨間に「廻り持ち」に掌握せられ、朝令暮改、政治も人民も其歸する所を知らざりき。現にマヌエル皇帝在位二年九月間、内閣を更ゆること、六回内在職長きものも十月を越えず、其半數は僅かに兩三月を以て仆れたり。其間中央及地方の政治は依然壓制を主とし、官吏腐敗し、賄賂公行するも、何れの執政者も之を改むるを欲せず之を欲するも之を行ふの力あらざりき。是近來勢力隆々たり又同國の新智識を集めたる共和黨員の奮慨措く能はざる所也。而して去八月末政府が斷行せる選擧干涉は、海陸軍部内の不平増長と相俟つて愈遂に此革命を見たるならむ。

三

然かも是唯だ政治的改革運動勃起を說明するに足るのみ。其長驅帝政其者を迄覆へすに至れる所以に至ては別に理由あり。何ぞや。現王家の不人望是也。

何が故に不人望とは成りたる乎、第一は多年の歷史的事情に依りて葡國皇室と人民とは、他の皇室人民の如く親近ならざるに在り、第二は現内閣制度が之をして責任を皇室に負はしめて議會に負はしめず（葡國には選擧を造るものは内閣なりとの諺もあり）、從つて動もすれば内閣の行動につき一々罪を皇室に歸するの風ある點に在り、然かも事玆に止らば、猶ほ救ふの餘地あらむ、若しそれ皇太后及祖后の奢侈に至ては是炎火に油を注ぎたるものなるを奈何。

人は感情の動物也。六箇敷き政治上の理窟よりは分り易き皇族の行動こそ却て人心を離反せしむ。祖后及皇太后が珠玉を愛し、美衣を愛し、爲めに民間の商人にも多大の負債を重ねながら、支拂はせ給はず、日夜獨り愉樂是耽らせ給ふ姿は如何に臣民の目に映じたりしぞや、今春ペイラオ内閣が不當の支出を皇室になしたりしとて在野黨の攻擊を受けたるも、皆此故なりき。夫れ驕るものは久しからず、葡國帝政何ぞ獨り亡滅を免れん哉。

四

プラガンサ皇家没落し、共和政府之に代る。伯刺西(ブラジル)瑞西を除き列強未だ之を承認せず。然かも大統領ブラガ氏、旬日にして本國及殖民地人民を歸服せしむ。茲に至て共和國は最早や既定の事實也。

此共和國は新に政針宣言を發表せり。曰く我政府は英國との同盟的關係を持續し、國防を嚴にし、司法制度の獨立を期し、政教分離を斷行し、自由主義に基き普通選擧制度を布かんとすと。抑々も何等肯綮を得たる政綱ぞや

他は少焉らく措き、英國との同盟關係持續宣言に至ては、頗る巧妙なるヂプロマチック、ストロック也。葡國殖民地保全は英國の制海權に依頼せずして、望む可きにあらざれば也。又政教分離斷行は葡國の急務たり。他無し同國の文化を羅馬教會の拘束より離れしめざる限りは、國民の愚盲依然たり、議會政治の有名無實依然たる可ければ也。

遮莫、ブラガ氏は聲言に巧みにして實行に拙なるを常態とする詩人文學者てふ階級に屬する人。果して能く其理想の實現をせしめて遺憾なかる可きか。疑懼を此點に挾むもの豈獨り吾人のみならん哉。

波斯分割の機

波斯攝政アリレサカン長逝し、新攝政ナシルエルムルク未だ歸らず、何ぞ知らん、此時に當つて分割の厄難、裏海南方の邦土を襲はんとは。

十月中旬、英國政府は通牒をテヘランに致して曰く波斯にして速かに南部波斯の秩序を回復せずんば、英國自ら其の將校の下に地方部隊を組織して之に當り若しくは印度兵を派遣して鎭定の勞を執らん、而して其の費用は波斯灣關稅を以て之に充てんと、吁嗟是英國が遂に露國側の壓迫に會し、一九〇七年英露協約の「勢力範圍」主義より一歩を進めて六十三萬方里の領土を兩分せんとする端緒にあらざる乎。

然かも飜つて想へば是波斯國民自身が區々たる私黨の內訌と、勢力爭ひに耽りたるの罪のみ、新帝即位以後一年、衆民猶未だ其緒に安んぜず、獨り憲政失敗の批難日と共に盛ん也、タブリッツの戰役に殉じたる義人、若し靈あらば、それ必ずや地下に泣かむ。

佛國罷業の失敗

佛國鐵道大罷業失敗す、是首相ブリアン氏が高壓手段を用ひ、工夫等に軍律を適用して制肘したる結果也。而して首相の名聲、今や爲めに隆然たり。

然かも、吾人は恐る、是却て遂に反動を惹起し來らんことを、蓋し佛人は東洋人の如く壓制を忍ぶ國民にあらざればなり。

洵貝勒と秘密黨

清國籌辦海軍大臣載洵貝勒、桑港灣に於て刺客に襲擊せらる。幸に無難なるを得たるも天下駭然たり。

然かも是何の駭然たる可きことか之あらむ、北米の地は萬國無政府黨員避難の地たり。就中清國革命黨員、斧鉞の身に及ぶを恐れて、假居を桑港、シャトル、デンヴーに置くもの數千に上る、今春『殲韃族、復漢族』の檄文を發したるもの亦彼徒也。然らば則ち其無事難を免るゝを得たるもの、誰か寧ろ貝勒と我が地洋丸との幸福にあらずと曰はむ。

英米漁業仲裁判決

九月海牙仲裁々判所、英米ニユーフアウンドランド漁業權紛議に關して判決を下せり。而して其勝利は英國の手に歸したるもの丶如し。

曰く英國はニユーフアウンドランド其他條約に記する區域に於て漁業規則を制定するの權利を有す、曰く入江、灣等は突出點と突出點との間に一線を劃し、之より以外三哩を英國の領海とし、米國人は此以内に入りて漁業をなすを許されざる可しと、是即ち約一世紀に亙りて英國の漁業規則制定權を否認し、又海岸線の屈曲に從ひ領海を定むべしとせる米國主張の根本的敗北を示すものにあらざる乎。

吾人は今此判決の當否若くは之に含まるる國際法理につき批評を試むるの心無し。然かも合衆國建國以來の難問として血を見る可しと傳へられたる本件の平和的解決を美とす。而して是亦二十世紀文明の恩澤也。

南阿總選擧

南阿總選擧の結果漸く判明す、曰く國民黨六十七、南阿合同黨三十七、勞働黨四、無所屬十三。而して落選せる首相ボータ將軍、幕下の情けに依りて、新議席

を得、翻然辭職の念を放棄したりと、兎も角も多數は政府黨(和蘭人黨)に歸し、英人ジエムソン氏の黨與は希望程に好運にはあらざりき。然かも英蘭人口の割合より見れば、確かに上出來也。知らず今後の活動も亦上出來なる可き歟否歟。

太西洋横斷飛行

米國飛行家ウエルマン、十月中旬太西洋横斷飛行を企て丶失敗し、强風に驅られて南の方バームダ近海に落つ。英船之を救ふて漸く事無きを得。而して我邦の輕佻兒之を聞て失笑するものあり。

笑ふ勿れ。寧ろ顧みて我が氣球の稚境に在るを愧ぢよ、大森、青山に飛揚せらるゝ邦人の飛行機は、猶飛揚其者の問題に惱んで、猶未だ旅行を說くの境遇に達せざるにあらざる乎。

片々錄

△伯林大學百年祭十月十一日を以て擧行せらる、獨宰相ベードマン、ホルウエヒ等皆列し、列國諸大學代表者多數之に臨み、盛觀比類無し、亦以て獨逸文化の勢力を見るに足る。△米國諸州知事及國會選擧本月上旬を以て行はれんとす、月桂冠は遂に共和黨に落つべしとするも、民主黨が從來に比し勢力增進すべきは疑ひなし、其の程度如何こそ見ものなれ。△英國將校二名獨逸に捕へられ、獨逸尉官ヘルム、英國ポーツマスに擒せらる、曰く是間諜也と、英獨相鬪の折柄、事疑心暗鬼に出てずんば幸也。△傳ふるもの云、英國統一、自由兩黨の上院否認權妥協々議成功せず、恐らくは來年一月亦總選擧を見るの外なけんと、載冠式前此の爭鬪を見る、何ぞ邦家の慶事と云はむ。(以上懷沙隱客)

朝鮮貴族の任命

十月七日朝鮮總督府に於て、我が皇の勅使參列し、朝鮮の王族及び門閥あり勳績あるもの七十餘名に侯、伯、子、男の爵を賜ひ、同時に裕量なる恩賜金あり、彼等悅服して頌聲洋々たり、希くは四民に率先して以て我が皇化に浴するに至らんことを

傳ふる所によれば、此等新貴族中の或者は、其の夫人及び男女婢僕等を提げて母國に來り觀光すといふ、

蝶螺の殼を出て、汎く大海を看る、其の資益する所蓋し尠少ならざらん

朝鮮總督等任命

十月一日寺内統監は朝鮮總督に、山縣副統監は朝鮮總督府政務總長に補せられ、以下總督府の幹部を始め地方の道長官郡守府尹等總て任命せらる。

官制に於て總督を海陸軍大將に限りたるは世間の多く非とする處、吾人も亦同感なり、海陸軍隊を動かすの要あるを以て、武將に限るといふは曲解のみ、總理大臣たるもの未た武將に限るの法規なければ也、伊藤公文官として能く統監の任を完ふしたれば也。

朝鮮總督の歸京

韓國併合の事全く終り、各般の政務また略々緒に就きたるの故を以て寺内總督十月廿日を以て歸京す、天皇殊に儀仗兵を賜ひ、且つ東京市煙火を揚げて歡迎す、儀恰かも凱旋將軍の如し。

寺内子が韓國併合を成就したるは、實に死鯨を曳き揚げしが如し、然れども朝鮮の官民をして一波瀾を揚げしめず、平靜無事の間に之を成したるの手腕は、何人も之を認めざる能はず、彼れの技倆は茲に至て實に超凡なる檢定を得たり、官民の歡迎素より當然のみ

寺内總督の不謹愼

寺内總督の歸京するや、途次箱根なる高田愼藏の別邸に一泊したりき、吾人は之を以て子の不謹愼として嘆惜す。

高田は陸軍の御用達なれば也、彼は實に日清日露の兩戰役に於て、多くの軍需品を陸軍に賣込みて、以て巨富を致したる成金の一人なれば也、陸軍大將として殊に陸軍大臣たる寺内子は此の御用達の家に宿す、瓜田に靴を入るゝものに非ずして何ぞや。

我が法律は官廳請負業者の衆議院議員たることをすら嚴禁す、然るに自省の御用達たる、殊に御用達として富人となれるものゝ家に宿す、假令疑惑の挾むべき莫しとするも、不謹愼の譏を免かれざるや素よりならん。

然るに論者皆總督の勳功の赫々たるに眩して、未だ

一人の之を指摘せるものあらず、故に吾人玆に一言す、言ふもの罪なし、而して聽く者實に戒むべきにあらずや。

載洵貝勒來朝

清國海軍籌辦大臣載洵貝勒殿下十月廿三日橫濱に着して我が國賓と爲る。

清國海軍のため歐米を巡視して竟に我が國に至る、我が海軍の強き所以を看取して、果して其の人に在るに及ぶべきや否や、日清役に彼の提督丁汝昌の自刄するや、人物の容易に得べからざるを以て船舶を日本に納れ、將士を助け還さんことを求めたりき、此の眼識ありて、而して我が將士養成の手段を觀察せば、始めて其の正鵠を得るに近からん乎。

臺灣總督留任

十月八日佐久間臺灣總督の陸軍大將たる現役年限を向ふ一ヶ年延期するの命出づ、生蕃討伐は佐久間總督の生命也、此あるがために俄かに其の地位を動かすべからざるも、年々歲々同一の延期を繰返すと、寧ろ見ッ共よくは非ざるならずや。

理蕃策の進步

臺灣の生蕃討伐隊は、新竹隊と宜蘭隊と聯絡し得て北蕃中の最强最頑なるガオガオ蕃の死命を制するまでに進みたり、此のガオガオ蕃歸順せば、他は大半風を望みて降るべし、我が理蕃策も玆に至て一大進步を告げたりと稱して可也、吾人は臺灣總督府のために深く祝す、否、我が皇化の前途のために祝す。

行政裁判所の刷新

行政裁判所は、其の評定官會議に於て、松浦、樋山、由布の三評定官に對して退職の決議を爲し、而して內閣之を執奏し、十月十一日直ちに三評定官を免官したり、玆に於て物議紛々として底止する所なからんとす。

第一は此の三評定官を免官するがため、內閣總理大臣桂侯より行政裁判所長官山脇玄氏に要望する所あり

たるは、是れ行政官が司法官の獨立を侵害したる違憲不法なりといふの論にして、第二は評定官會議の決議は、解職を爲すに止まるに、内閣が三評定官を解職とせずして免官としたるを違法とすといふの説也、第一は事實問題にして、正さに移りて政治問題となるべく第二は正さしく法律問題なれば、多く論議の餘地なかるべし。

但し三評定官が學識稍々時勢に遲れて、其の判決に過誤多く、且つ平生職務に精勵ならざりしとは、法曹社會の輿論にして、之を斥けたるは正さしく刷新の一端なるが如し、唯々三評定官の罷免のみに由て、十分に刷新の効を擧げ得しや否やは、吾人の頗ぶる疑ふ所とす。

選擧法改正案

衆議院の提出にして、貴衆兩院を通過したりし衆議院議員選擧法改正案（議員は一審の判決によりて直ちに失格とする現行法を更めて、普通人の如く三審の確定によりて始めて失格とする案）は、久しく法律と爲らず、竊かに政府の措置を難ずるもの多かりしが、十月十九日の樞密院は、本案を可決したれば、やがて發布せらるべきが、樞密院が議會の通過法案が必らず法律たるべき憲法の正條あるに拘らず、此の改正案の可決を躊躇したりしは、吾人の怪まざるを得ざる所とす。

工場法案の公示

政府は前期議會より撤回したりし工場法案に修正を加へ、十月十八日之を公表して以て輿論の贊否を問へり。

修正の重もなるは、婦人の夜業禁止に對する制限を少しく寛くしたる事、幼工の年限を縮めたる事、勅令に委すべき事項を多く明定したる事、工場法適用の範圍を明白にしたる事等なり、兎も角兩院を通過せしめて法律と爲し、不備の點を發見するに隨つて、漸次改良し往くを以て最も妙とすべし、工業主もまた國民の健康に考慮して、公平に本法の成立に努めんと然るべし。

豫算の大要決す

寺内子の歸京を急ぎ、後藤男を旅行先きより呼還して、十月廿一日に開かれし閣議は、唯だ病臥中の小村伯を除く外、各大臣總て參集して、略々次年度の豫算案を協定したるが如し。

豫算の方針は、第一海軍補充費として約一千九百萬圓並びに製鐵所擴張費百七十萬圓、第二水害復舊補助費七百萬圓（治水費二百萬圓の要求は治水會の獻策を俟つて確定するとして之を削除す）第三朝鮮經費數百萬圓を新增加額とし、外に蠶絲統一費等を認めしも他の新事業費は總て之を削除したり、而して收入の部に於て減少するは減税の分一千餘萬圓の外、營業税の整理減二百萬圓、地租の一部整理減二百萬圓にして、又增加額は關税の增收六百萬圓、自然增收六七百萬圓、四十二年度の剩餘金三千餘萬圓なるも、此の剩餘金中より責任支出、追加豫算等を控除すれば、此等の差引合計三千數百萬圓に過ぎず、所得税改正案は提出せず、國庫債還は臨時事件公債第三回並びに煙草專賣國庫債券の借換償還を實行して、毫も既定の方針を曲げず、償還資金の繰入は既定額五千萬圓の外、不用利子六百萬圓なりとす。

豫算の決定に多くの議論なかりしは、また現内閣特有の強味とす、唯だ之を以て閣運泰平と見るは速斷に過ぐ。

臨時治水調査會

勅令を以て臨時治水調査會を組織し、法制局長官、内務、大藏、遞信、農商務四省の次官局長並びに貴衆兩院議員を其の委員に任命したり、治水と離すべからざる港灣修築を沒交渉としたるは如何はしきも、根本的に治水策を確立し得ば、其の効果は極めて稱すべきも、政府と委員と、果して其の誠意と識見とありや否や、吾人は嚴格に之を事實に徵せんと欲す。

電車市有の運動

電車市有運動また起る、尾崎市長巴里に於て資本家と協議し、電車買收費六千五百萬圓の外債を得るの内約を成したりといふも、頗ぶる眉唾すべきもの也、之を問題として又々投機を試むる狡兒の市會に無くんば幸甚のみ。

不作

洪水の後、秋霜あり、關東東北は非常の不作なるは論なく、西南また少からず秋霜の影響を受けしを以て、實收に收穫四千三百萬石に過ぎざる見當なりといふ、實收に至らば、更に恐る、尚ほ若干の減收あらんとを。

昨年は無比の豐作なりしも、米價暴落のため、農民に取ては凶作と大差なく、且つ米質粗惡にして搗減多く米價の安きに乘じて之を濫用したる者多きがため、農家儲米の乏しきと實に意料の外にありといふ、然るに今秋全く不作ならば、其の結果の不良なる知るべきのみ、內閣の運命また必らず影響を免かれざらん。

新刊批評

▲涓滴　森林太郎著　新潮社發行

森鷗外氏の小說集也。收むる所十四篇、「杯」「花子」「獨身」「棧橋」「あそび」「普請中」「木精」「大發見」「電車の窓」「追儺」「懇親會」「牛鍋」「里芊の芽と不動の目」「ル・パルナス・アンビユラン」是れ也。何れも氏の創作にして之を讀めば漫ろに多趣味にして多方面の才を有する氏の性格を羨むの情に堪えざらしむ。嘗て「スバル」「三田文學」「中央公論」其他にて通讀したるものなれど、一冊として通讀すれば更らに氏の行くとして可ならざるなき才筆を嘆ぜざる能はざらしむ。「普請中」には氏の「舞姬」時代の情趣を掬すべく、「杯」は氏の文藻の豐富なるを見るべし。「里芊の芽と不動の目」は枯れてゐて面白く、「あそび」は氏の世事に對する半面があらはれて興あり。何れにしても近來の短篇集中最も注目すべきものなり。製本紙質共によく心持よき本也。（定價九十錢）

▲新釋挿畫近松傑作全集（卷之四）　水谷不倒校註　早稻田大學出版部發行

全集類の出版は動もすれば中途にして挫折し、挫折せざる迄も遷延長年月に亙つて豫約者は勿論、一般の購讀者にも迷惑を及ぼすもの尠からざるに反し、本全集は着々として出版の步を進め、今や第四卷の發行を見るに至れるは先づ第一に歎すべく賞すべし。本卷に收むる所、「蟬丸」「用明天皇職人鑑」「雪女五枚羽子板」「けさん茂兵衞大經師昔曆」「鑓河波の鼓」「大職冠」「鑓の權三重帷衣」「曾我會稽山」「傾城酒呑童子」の九篇にして、例によつて印刷鮮明、校註懇切、斷然として他の近松集を抽んず（定價

二圓五十錢)

▲貴族の家

相馬御風譯
新潮社發行

ツルゲネフのハウス、オブ、ゼントルフオルクを譯したるもの也。原著はツルゲネフ集中にあつても有數の傑作にして若し藝術的見地よりすれば「春潮」「死せるが如き靜かな地」などと共にツルゲネフの最大傑作に數ふべきものなるを疑はず。只譯文は初めの部分の比較的成功せるに反し、後の方に至れば內容と伴はざる蕪雜なる譯語の散見するは慊らぬ心地す。例へば此小說の最終、ラヴレツキーがリーザの新家を訪うて、十年前の戀を偲ぶあたりは最も詩的なる箇所なるに拘らず譯語甚だ妥當を缺けるが如く感ぜらる。少くとも情調と一致せざる文字散見す。例へば「尋問や、感叫や、珍談が相次いで出た」といふが如き語句が處々に見らるゝ。再版の際今少し字句の修正あらんことを望む(定價一圓)

▲巴里安下宿の哲學者

小原要逸著
內外出版協會發行

スウヴエストルのアン、アツチツク、フイロソフアー、イン、パリを譯したるもの也。原著(即ち英譯)は我國の英學生に最も弘く讀まるゝものゝ一つにして可なり面白きものなれども、譯文は概して冗長軟弱の箇所多く決して好翻譯と稱し得べからざるを恨む。(定價五十錢)

▲南極探險發見號の航海

山縣文夫編
內外出版協會發行

スコット大佐の第一回南極探險を記し、附するに最近の南極探險家たるシヤツクルトン中尉の日記を以てせり。時節柄一讀の價値あり(定價五十錢)

▲婦人問題

河田嗣郎著
隆文館發行

「最近經濟問題第十卷」として發行せられたるものにして、主としてミルのセ、サブゼクシヨンオブ、ウーマンより議論の根據を得、婦人問題に關聯する總ての問題、殊に婦人の經濟問題について詳述せり。一步〱歐米の社會の足跡を踏みつゝある我國に於て、婦人問題が重要なる社會問題の一となるべき日のあるべきは疑なし。此書の世に出づる決して偶然にあらず(定價二圓)

▲維新史八講

吉田東伍著
冨山房發行

國學院の夏期講習會及早稻田大學校外講演に於て、吉田博士の講述せられたる維新史の大要也。日本人の辯として、講演の言葉遣或は妥當を缺き、或は冗長となり、若し博士が筆を執つて書かれたならば、三分の一か四分の一となるべく、從て長さに比して內容の乏しきを憾むも之を讀めば大體維新の形勢が分り、且つ所々流石に博士の識見を窺せしむる所なきにあらず。只山路愛山氏の說によれば「海舟日記」などを讀み誤りて意味を取違ひたる箇所も見ゆといふ。(定價一圓)

▲新釋日本外史

大町桂月譯評
至誠堂發行

日本外史を假名交り文に直し、且つ評釋したるものなり。外史は漢文中最も讀み易きものなれば、假名交り文にて讀み得る人ならば漢文の儘にても讀めざること殆んどなかるべく、又本文中に括弧入れの註を附したるは却て讀みにくし、且つ評論も國史に加へたる高等批評にもあらず、只記されたる事件に對する桂月氏の感想を述べたるに止りたるは慊らぬ心地す。然れ共漢文の智識日一日に退步しつゝある今日なれば或は此書によつて初めて外史を讀み得るものもあるべき歟。然らば此書の出版も徒爾ならざるべし。(定價一圓五十錢)

▲家紋の由來

生田目經德著
學海指針社發行

古來の家紋を集めて、一々其由來を說きたるもの、かゝる事に興味ある人には極めて便利なる書也。（定價五十錢）

▲酒と煙草

兒島貞譯
獨立出版社發行

トルストイが酒と煙草との害惡を論じたるものを譯したるもの也。原著者の熱烈痛切なる筆鋒は深く讀者を刺戟す。（定價三十錢）

▲通俗呻吟語

下中芳岳譯
內外出版協會發行

[illegible]の呻吟語より譯者の氣に入りしものを選んで之を譯頭に揭げ本文には其譯文を載せたり。譯文多くは冗漫、少しく文字あるものは譯頭の原文の方のみを讀むべし。原著は大隈中齋品川彌二郎などに愛讀せられたるものなりと雖も、吾人は餘り大したものとも思はず、然し娛樂として讀めばちよい／＼面白き文句もなきにならず（定價五十錢）

▲經濟全書

神戸正雄編
寶文館發行

寶文館の計畫せる經濟全書の出版は、此種出版物中の最も注目すべき大事業也。全部を六卷四十三編に分ち約八千頁の豫定なりといふ。而して經濟原論より各部分の詳細に亙り何れも我國經濟界のオーソリチーたる人の執筆にかゝる。今回出版せられたるは河上肇氏の「經濟學の根本概念」田島錦治氏の「生產論」津村秀松氏の「消費論」氣賀勘重氏の「交易論」（以上一册に收まり定價一圓三十錢）戸田海市氏の「工業經濟」（定價二圓十錢）。松崎藏之助氏の「統計學汎論」小林丑三郎氏の「國家財政史」（以上一册に收まり定價一圓十錢）。横井時敬氏の「農業經濟」（定價一圓十錢）河田嗣郎氏の「社會主義論」（定價四十錢）神戸正雄氏の「公債論」（定價七十錢）の六册にして、完成の上は經濟界の偉觀たるべし。只遺憾なるは執筆者の都合もあるべけれど、出版の順序は甚だ飛び／＼なることなり。成るべく順を追いて出版せられんことを望む。

▲影

中村星湖著
今古堂發行

中村星湖氏が「東京毎日」？に揭げたる長篇小說にして、處々に稚氣を脫せざるが如き箇所も見ゆれど、概して落付いて周到なる筆つき讀みて奧ゆかしき心地す。（定價一圓）

▲新譯文章軌範

大町桂月譯
春秋社發行

譯頭に原文を揭げ、本文に之を邦文に譯したるものを載せ、對照の便を圖りたるは大いによし、文章軌範は日本外史などに比し難解のものも少からざるを以て、少年子弟の便利なるべし（定價七十五錢）

▲どん底

ゴリキー原著 昇曙夢譯
聚精堂發行

浮浪者であり泥棒であり無賴者であるといふた樣な種々雜多な人間の集りである一木賃宿內の生活を寫したもの、其間に病死、喧嘩、殺人、自殺といふ樣な雜多な事件が目眩しく起つて來る、ルカなどいふ敬虔な基督の信者も居り、其言行が妙に緯綜を爲して異心の閃きのある人々であり乍ら而かもそれを力にし得ぬといふ樣な社會的壓迫の悲慘な空氣が漂うて見える、ゴリキーの作として評判の宜いものだ、譯筆亦極めて暢達、彼等社會の粗豪の語を能く寫し取つて居る佳作である（正價金九拾錢）

關東大賣捌所

東京神田表神保町　東京堂
仝　神田裏神保町　上田屋
仝　京橋尾張町　東海堂
仝　京橋元數寄屋町　北隆館
仝　本郷本富士町　盛春堂
仝　京橋西紺屋町　良明堂
仝　日本橋本石町　至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町　盛文館
仝　京町堀　太華堂
京都佛光寺　東枝書肆

○壹冊定價　金武拾錢外ニ郵税金壹錢五厘（海外郵税拾錢但清國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓武拾錢	金壹圓七拾武錢
十二冊	金武圓參拾錢	金參圓參拾四錢
以上郵税共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料壹錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし次の前金を送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず兒まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十三年十月廿九日印刷納本
明治四十三年十一月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所　東京市本郷區駒込西片町十番地　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷九一九　電信略號ハンセイ

印刷所　東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場